時空世界英雄伝説

無目藻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時空世界英雄伝説

【Ｎコード】
Ｎ１８１９Ｖ

【作者名】
無目藻

【あらすじ】
新銀河帝国初代皇帝　ラインハルト・フォン・ローエングラム。
彼は２５歳の短命でこの世を去った。
去った、はずなのに。彼はなんとリリカルな世界へ神様の気まぐれで飛ばされてしまった！

これは、次元世界を駆け抜けた英雄達の記録である。
銀河の、そして時空の歴史がまた１ページ・・・

プロローグ　ラインハルト、飛ばされる（前書き）

もしかしたら、キャラ崩壊とかあるかもしれませんが、極力無くすと作者が言ってましたｂｙ　ユリアン

プロローグ　ラインハルト、飛ばされる

新帝国暦3年（宇宙暦８０１年）　7月２６日
銀河帝国皇帝　ラインハルト・フォン・ローエングラム　死去。
享年２５歳。
彼が皇帝でいた期間は僅か2年足らずだった。
しかし

神は彼をヴァルハラへとは送らなかった！

「・・・ここは？」
ラインハルトが目をさますと、そこは無限に白い空間だった。
「ぬしが、ラインハルト・フォン・ローエングラムじゃな？」
「！？」
振り向くとそこには一人の老人がたっていた。
「卿は何者だ？」
「わしか？わしゃぁ、神様だよ」
神？神って、あのオーディンとかみたいなあの偉大なる神？
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「卿は俺を馬鹿にしているのか！？」
「いやいやいや！違う！本当に神なのじゃ」
ラインハルトは疑いながら少しだけ信じることにした。
自分は訳のわからない空間におり、必然的にこの老人を頼ることになるのだ。
「それよりラインハルトよ。お主の姿、少しいじくった。見るか？」
老人はいきなりそんなことを言い出し、大きな鏡を秘書らしき人物に用意させた。

「！これは・・・」
そこに映っていたのはまだ皇帝になる前の――親友、ジークフリード・キルヒアイスと広い大宇宙に共に想いを馳せていた頃の自分であった。
「どうじゃ？気に入ったかの？」
ラインハルトは悔しかったが、少し嬉しい。
「まぁ、なんだ。礼は言っておく――」
「それじゃ、出発じゃな」
「・・・・・は？」
言うなり、老人は小さなスイッチを取り出して、ポチっと押した。
次の瞬間、ラインハルトの足元に穴が開き、彼は珍しく叫び声をあげながらその暗い闇に落ちていった。

新暦００７５年　ミッドチルダ首都クラナガン郊外　リニアレール
「生命反応（バイタルサイン）？」
「そうなの。あの列車に急に。二人で調べてきてほしいの」
エリオ・モンディアルは今回が初陣である。
そして、先程敵のガジェットに放り投げられて危うく死ぬところだった。
すなわち、くったくたである。
そんな僕を再出動させるなのはさんは鬼なのではないか。そんなことも思い始めた。
しかし、いくらなんでも一人で行かせない。なのはさんは教導官の一人をつけてくれた。
「なんか、二人が並ぶと親子みたいだね」
フェイトは二人が並ぶと必ずそうコメントする。
だが、確かに親子のようだった。
エリオはこの教導官を尊敬していた。
実力があるのにおごらず、大きな体からは優しさがにじみ出てい

る。そして、責任感の強さ。
エリオは大人になるならこの人のようになりたい、と何時も思っていた。
「それじゃあ、エリオ君。行きましょうか」
この人も、燃えるような赤毛の持ち主だった。
「はい！」
二人は飛び出した。
エリオのは本来キャロが飛竜のフリードで輸送されるのだが、今回はその教導官に運んでもらう。
キャロの体力というかいろんなものが限界なのだ。
「頑張ってねエリオ、それに・・・」
フェイトの呟きはヘリコプターのローターの音にかきけされた。
そもそも独り言なので誰も聞いていなかった。

時空の歴史がまた1ページ・・・

プロローグ　ラインハルト、飛ばされる（後書き）

どうでしたでしょうか？ご意見、ご感想は作者の健康状態を底上げします！

ラインハルト　友に会う（前書き）

ラインハルトが赤毛ののっぽさんに会います。

ラインハルト　友に会う

ラインハルトは肩に人の温もりを感じて目を覚ました。
「ン・・・」
まだ彼の意識は朦朧としていたが、その瞳には赤く燃えるような頭髪が映っていた。
「・・・キルヒアイス？」
「僕はキルヒアイスさんじゃありません。僕はエリオ・モンディアル。時空管理局三等陸士です」
確かに、よく見るとキルヒアイスではなかった。赤毛は同じだが、顔立ちが違う。てか子供だ。
ラインハルトは辺りを見回した。どうやら列車の貨物室らしい。
彼は「時空管理局」や、このような子供――まだ９歳か１０歳の子供が、軍人まがいの存在であることに多少の興味を覚えた。
が、しかし。
ラインハルトはそのエリオという少年の台詞づかいに違和感を感じた。
『キルヒアイスさんではありません』
「あの、とりあえず、名前を――」
エリオがラインハルトに問いかけた瞬間、部屋の扉が勢いよく開かれ、薄暗かった室内に強烈な光が射し込んだ。
一瞬目が眩んだラインハルトだったが、逆光に照らし出されたそのシルエットは彼によい意味で衝撃を与えた。
「ラインハルトさま・・・！」
「キルヒアイス・・・キルヒアイスなのか！？」
ラインハルトは信じられなかった。キルヒアイスはガイエスブルク要塞でアンスバッハの魔の手からラインハルトを護り、非業の死を遂げた筈である。
しかし、現にキルヒアイスは生きている。その脚で、大きく活力

に富んだ肉体を支えている・・・！！
「キルヒアイスさん、知り合いですか？」
「エリオ君。この方がラインハルト・フォン・ローエングラムだよ」
「えっ！？」
エリオ少年はキルヒアイスとラインハルトを交互に見て、惚けたような顔をした。
「キルヒアイス、なんだ？お前先生でも始めたか？しかもイカした服を着て」
ラインハルトは顔をほころばせ、親友に語りかけた。彼がこのように話したのはどれだけぶりだろうか。
「はい、まぁ、先生みたいなことはやっています。この服についてはまた後ほど」
キルヒアイスの着ている服は帝国軍の軍服をイメージさせる軽めの鎧といった感じで、似合っていた。
「うん。お前は本当に先生がお似合いだ。生徒から好かれるだろう」
「いえ、そんな・・・あっ！」
キルヒアイスは急に姿勢を正した。口元には柔らかい笑みが浮かんでいる。
「ラインハルトさま、ついに、宇宙をてにしたのですね。おめでとうございます」
「有難う。でも、俺一人の力じゃない。お前や、ヒルダ。それにミッターマイヤーや・・・何でお前はその事を知っているんだ？」
ラインハルトが怪訝そうな顔をして、キルヒアイスはクスと笑った。
「ちょっと、さるお方から聞きまして・・・」
「なんだキルヒアイス。もったいつけるなよ」
ラインハルトがそう言い終わる前に迎えのヘリコプターが近くまで来ていた。
「ラインハルトさま、この話はやはり後ほど。ちょっと失礼します」
そう言うとキルヒアイスはラインハルトの胴体を抱え、飛翔した。

「えええええええええええええええええええ！？」
ラインハルトはやはり驚いた。しかし、彼にとって空を飛ぶことよりキルヒアイスにまた会えたことの方が衝撃的で、嬉しかった。

機動６課隊舎　部隊長執務室
はやては紅茶を啜っていた。
彼女の横にはリインがちょこんと座っていて、目の前には一人の男性が同じように紅茶を啜っていた。
この男性の階級は三等陸尉なのだが、はやては彼の実力がそんなもんではないと度々思わされた。
男性は次元漂流者で、もとの世界では軍人で中尉だったという。
何はともあれ、はやては彼の話を聞くのは好きだったし、男性もそれを楽しんでいるようだった。
「ところで、先生」
はやては男性のことを先生と呼ぶ。尊敬しているからだ。
「どうしたんだい八神君」
男性はまた一口紅茶を啜った。
「今報告がきたのやけど、次元漂流者を保護したそうや」
「それはいいことじゃないか」
その時、執務室の扉をノックする音が聞こえた。
「どちら様～？」
「ジークフリード・キルヒアイス一等空尉です」
はやては残りを一息に飲み干してから「どうぞ」と返事した。
「失礼します。この方が、報告した次元漂流者のラインハルト・フォン・ローエングラム候です」
ラインハルトは入室して、部屋をちらと見回した。
部屋の調度品は質素ながらも綺麗に整頓されている。趣味はいいようだ。
今部屋にいるのは二人（リインは机の裏に隠れた）。
一人は佐官らしき女性。もう一人は・・・ん？

ラインハルトは今目にした人物を理解するのに数秒を要した。
そして、その信号が脳に到達した瞬間、ラインハルトに電流が流れた。
「け、卿は・・・！！」

続く

次回予告
揃いつつある役者たち。彼等はここミッドチルダで居場所を見つけられるか？
そして、ラインハルトのデバイスも明らかに！

次回
ラインハルト　闘う

時空の歴史がまた１ページ　・・・

ラインハルト　友に会う（後書き）

この男性、大抵の人はわかったでしょう。

ラインハルト、闘う（前書き）

奴が登場。

ラインハルト、闘う

「ヤン！？ヤン・ウェンリーではないか！？」
ラインハルトは目を見開いた。

常勝の天才ラインハルトと不敗の魔術師ヤン。
銀河を舞台とした二人とそれを取り巻く様々な人物の織り成す壮大な演劇は一度幕を閉じた。
しかし、幕が閉じたのはその間の小休憩を挟むためであって、ラインハルトとヤンは新たな舞台で再び縦横無尽に駆け巡るのだ。

「やぁ、ローエングラム候。次元漂流者というのは貴方のことだったのですね」
今のヤンは同盟軍の軍服ではなく、茶色を基調とした管理局地上の制服である。ちなみに、キルヒアイスも同じものを着ている。
「ヤン元帥は、現在三尉――少尉相当の階級です」
キルヒアイスがそっと耳打たした。
かつて元帥であった男が三尉という階級に甘んじているのは恐らく管理局に入ることになったとき、かつての階級を偽ったのだろう。皮肉なことに、ヤンはお世辞にも元帥としての風格はなく、すんなり通ったらしい。
キルヒアイスもそうしたらしい。それなりに階級が高くて権限があり、なおかつ自由に行動できるものとして階級を聞かれた際に少佐と答えた。
そのため、彼は一尉という階級を持っている。
しかし、思えば、彼から耳打ちで秘密の話を聞かされるのは何年ぶりだろうか――。
「貴方が、ラインハルト・フォン・ローエングラムさんですね？」
ヤンの前に座っていた女性が立ち上がり、言った。

恐らく、１９か２０の娘だろう。階級章から佐官であることが知れた。

（優秀な娘なのだな）

ここは恐らくかつての帝国―ゴールデンバウム王朝と違い、門閥貴族が優遇されるという愚の骨頂とも言える制度は採用されていないだろう。

優秀な人間は好きだった。

女性としてではなく、彼女がもつ能力が、である。

そんなラインハルトが品定めしている相手も、彼のことを品定めしていた。

（うひゃぁ、これは最早芸術品の域やな）

はやてが表現した方法は何年にもわたり帝国、同盟の両国で使い古されたありきたりな表現方法だったが、それが彼の容姿を最も適格な表現方法なのである。

ラインハルト氏からは強い魔力反応が感知されているという。ということは、彼には魔導師としての素質があるのだ。しかもかなり強力な。

考えてみれば数年前にやって来たというキルヒアイスも魔導師としての素質があったらしい。

彼女は考えた。

この人が欲しい。

保護をしたら協力してくれると言った、といえば正式な局員ではないため、総合魔力の規定には引っ掛からない。

そんなことを考えている自分はつくづくたぬきだなと思った。

海上訓練スペース・・・

「デバイス？」

「はい、ぼくのはここに来た瞬間から持ってました。ラインハルトさまのは？」

キルヒアイスが首にネックレスのようにかかっているデバイスを

見せてくれた。
帝国の印を模したものだ。
「俺の・・・デバイスか・・・」
ラインハルトは、はっ、と思いだし、首にかけているものを取り出した。
それはひとつのペンダントだった。
キルヒアイスが死に、アンネローゼと別離してから、これはラインハルトの心の支えだった。
「それがデバイスならセットアップ、と呼び掛ければ大抵もとの形状になりますよ」
キルヒアイスに言われたことを試してみる。
「セットアップ」
刹那、ペンダントが光を放ったかと思うと、それはあっという間に形を変化させた。
彼のデバイスは美麗なる彼にふさわしく、美しい白色で、貴婦人を連想させた。
《はじめまして。私は貴方のデバイス、ブリュンヒルトです》
ラインハルトは驚いた。その理由は二つある。
ひとつは、彼のデバイスの名が彼が愛していた船と同じ名前だったこと。
もうひとつは、そのデバイスの声が彼の妻、ヒルダことヒルデガルドと同じ声だったからだ。
《どうされましたか？》
「あ、あぁ。ヒルダ―じゃなかったブリュンヒルト。俺にはキルヒアイスみたいなイカした服はないのか？」
ラインハルトの質問は彼らしからぬものであった。
恐らく、彼の長年抑圧された精神が解き放たれ、少し童心に帰っているのだろう。
《はい、可能です》
「それでは、頼む」

《了解（ヤー）》

次の瞬間、彼の体は黄金の閃光に包まれ、光が晴れるとそこには壮麗たる長髪の男性が立っていた。

「・・・て、これいつもの格好ではないか！」

ラインハルトのバリアジャケットは皇帝の服と寸分違わなかった。

それを見たキルヒアイスは嬉しそうだった。

『それでは、攻撃目標を出しますね～』

なのはの声が響いたかと思うとブリュンヒルトが３００メートル先に敵がいると報告してきた。

ラインハルトは地面を蹴り、空へと舞い上がった。

高い場所からだと敵のようすがよく見える。

楕円形をした機械は訓練スペースの建築物の合間を滑っていた。

「ブリュンヒルト、俺が魔法使いなら魔法は使えるのだな？」

ブリュンヒルトははい、と答え、ラインハルトに教えた。

《最も基本的な呪文は『ヒルデガルデブー』となっています》

ラインハルトは「ハアッ！？」と聞き返した。

この呪文は同盟進攻前に会議でミッターマイヤーが言っていた呪文である。

「な、なぜそんな恥ずかしい呪文なのだ！？」

《私が作られる際、閣下の記憶から閣下の印象に残ったものをもとにしましたので》

つまり、かつてミッターマイヤーが悪のりでいった寒いギャグが不覚にもラインハルトの脳に焼き付いていたということだ。

はっきりいって嫌ではあったが、やらないことにはなにも始まらない。

「ヒ、ヒルデガルデブーっ！」

すると、ラインハルトの周りに黄金色に輝く光の塊がいくつも出現した。

《これに命令を出して地上の敵を攻撃してください》

「なるほど、では」
ラインハルトは腕を振り上げた。そして、号令と共にその腕を降り下ろす。
「ファイエル（撃て）！！」
その滑らかで美しい一連の動作に答えるように光の塊は不規則な軌道を描きながら地上に吸い込まれていった。
だが、魔法初心者のラインハルトには光の塊――アクセルシューターの一種だが――を完全に制御するのは至難の技で、１５個出現させた内１３個が目標に当たらず訓練スペースに穴を穿っただけだった。
しかし、ラインハルトの行う動作一つ一つは美しい以外に形容できないもので、見学者を魅了していた。
「なのはちゃん、フェイトちゃん。ホントおもろい人ばっか連れてきて、ウチ嬉しいわ」
「まだ魔法はうまく使えてないけど、ちょっと練習すれば伸びると思うの」
キルヒアイスは空を駆けるラインハルトを見ていた。
マントを翻し、黄金の髪をなびかせる姿は神々しい輝きさえ放っている。が、その神々しさのなかに彼がまだミューゼルを名乗っていた頃の若々しい活力が見え隠れしていた。
その証拠に、あの顔の楽しそうなこと・・・！
そんなラインハルトはついに自分好みの魔法を見つける。
「ゴールデン・フリート！！」
ラインハルトがそう唱えると、彼の周囲に数百からなる帝国軍の艦艇のミニチュアのようなものが出現した。
一つ一つは１メートル弱と小さいが、しっかりと空を飛び、その存在がただの飾りではないことを主張していた。
《この艦隊は閣下の命令通りに行動します》
「おお、これはすごい！！」
ラインハルトは目を輝かせていた。

それにしてもこれ程のものを出せるとは、魔力が安定している証拠である。
ラインハルトは意気揚々と地上の敵の掃討を始めた。

シャーリィはラインハルトの力に驚いていた。
なのはやフェイト、はやてにキルヒアイスとはまた違った強さをもつラインハルトは彼女の知的好奇心を掻き立てた。
「あぁ！あの統一され秩序を持ったあの動きは安定した魔力を持たないとできない！彼はこれまでにないタイプの魔導師ね！！」
そんな興奮する彼女のところに一人の男性がやって来た。
「あっ、ヤンさん」
「やあ、彼はどうだい？」
「見ての通りです。ラインハルトさん、魔法で艦隊を作っちゃいましたよ！」
ヤンが見ると、確かに帝国軍の艦艇が敵を掃討している。
「これに対抗できるプログラムがなくて、データがとれないんですよ」
シャーリィが言った。
ヤンはそれで少し考え、口を開いた。
「ちょっと、私に任せてくれないか？」

ラインハルトは敵を一角に追い込み、一斉射を行おうとしていた。
そして、号令を出した。
「ファイエル！」
しかし、放たれた攻撃は先程まで敵がいた空間を裂いただけであった。
「！？」
『ラインハルトさん、貴方の新しい撃破目標なの！上を見るの！』
ラインハルトは上を向いた。そして、息を飲んだ。
数はラインハルトの艦隊とほぼ同数であろう。

緑色を基調とした無骨な艦艇の数々がラインハルトの頭上を飛行していた。
それは紛れもなく同盟軍の艦隊。
そして、それを操るのは、ヤン・ウェンリーだった。

次回予告
ラインハルトとヤン。二人が再び衝突する。
ラインハルトはヤンに勝つことは出来るのか？
次回
ラインハルト、魔術師と戦う
時空の歴史が、また1ページ・・・

ラインハルト、闘う（後書き）

キャラクターで間違いがあれば　教えてください。
ちなみに、ヤンは機動６課所属ではありません。
詳しいことはまたこんど。
魔法の呪文は実際にミッターマイヤーがＣＤ　かなにかでいってました。

ラインハルト、魔術師と戦う（前書き）

眠い上に短いからスッゴい駄文に。
あとヤツが登場します。

ラインハルト、魔術師と戦う

新暦００７５年　この訓練場で、二人の英雄が再び相打つ。
突如ラインハルトの頭上に現れたミニ同盟軍艦隊。
その数、ラインハルトのミニ帝国軍艦隊の約２倍。
「ちょっとヤンさん！卑怯ではないですか？」
なのはがヤンに抗議した。
しかし、ヤンは反論する。
「戦術は、まず戦略的に数的優位に立つことが大前提だ。奇跡（ミラクル）や、魔術（マジック）が発生するのは極めて異常な事なんだ」
「でも、これは模擬戦なんやし――」
「模擬戦は実際の戦闘を再現するものなのではないかね？私は、そもそも補給線や拠点が存在しないただのガチンコ勝負を模擬戦と呼称することがおかしいと思うよ」
はやての意見もヤンに一蹴され、なのはとはやては二人で肩をすくめた。
「あれ？そういえば、フェイトさんがいませんけど？」
ここで、キャロがフェイトがいないことに気づいた。
「あぁ、彼女には一寸した頼み事をしていてね」
そんなことをしている間に、ラインハルトも艦隊を布陣させ終わっていた。
ついに、始まりである。

その艦隊戦はほとんどの者には何がスゴいのか解らなかった。しかし、はやてとティアナはお互いの艦隊運動を見て息を飲んだ。
見ている限り、ラインハルトというライオンがヤンというゾウに襲いかかってるようだった。
しかし、ヤンも柔軟な機動で鋭いラインハルトの牙をかわし、その絶妙なタイミングで大きな牙を繰り出していた。

それをラインハルトも素早くかわすものだから、決着がつかない。
結局、その日は中止となった。
その事をキルヒアイスが念話でラインハルトに伝えた。
『ラインハルトさま、今日のところはお開きだそうです。ヤン提督、いえ、三尉も仕事がありますから』
『何？しょうがない。ところでキルヒアイス。これは何だ？』
「これ」とは念話のことだろう。
『念話、というものです。特定の相手とテレパシーのようなもので会話ができます』
『ほう、それは便利だな』
ラインハルトは魔法というものに興味を抱いているようだ。
この事はキルヒアイスにとって非常に喜ばしいことであった。

首都クラナガンのダウンタウン。
その一角に一軒の居酒屋があった。
労働者達がその日の疲れを癒す汗臭い憩いの場に一人の女性が入ってきた。
その女性は息をのむほど美しかったが、誰も声をかけないのは彼女の胸に光る執務官バッジと黒い制服のためだろう。
その女性――フェイト・Ｔ（テスタロッサ）・ハラオウンは店の奥へと進んでいき、一人の男の前で止まった。
３０代も後半に差し掛かったであろうその男はフェイトの存在に気付き、たくましい身体と鋭い眼光を彼女へ向けた。
フェイトは一瞬息が詰まるかと思ったが、一瞬の後、男の顔は柔和なものへと変化していた。
「どうされましたかなフロイライン（お嬢さん）？」
フェイトは襟を正し、男を見据えた。
「貴方は、今日６課隊舎に来るはずだったでしょう？」
彼女は今日渡すはずだった書類を手渡した。
それは６課配属の辞令である。

「俺は、あの人の命令以外は聞きたくないのだがな・・・む？」
男は推薦人の名を見て固まった。そして、少し笑った。
「陸士１０８ヤン・ウェンリー三尉・・・はっ！三尉。あの人らしい」
男はガタッと席をたち、フェイトに敬礼しながら言った。
「ワルター・フォン・シェーンコップ三佐、慎んで、拝命致します！」

ついに揃いつつある役者たち。彼等はこの世界で生きていけるのか？
時空の歴史が、また1ページ・・・

今回よりたまにスペースを少しでも埋めるため「エリオの機動６課日記」を書いていきます。
モトネタは勿論ユリアンのイゼルローン日記。

★月●日
キルヒアイスさんに日記を書くことを進められたのを機会に日記をつけていこうと思う。
いつまで続くかはわからないけど、男なら続けるべきだろう。
この事を訓練の休憩中にキャロに話したらそれはいいことだと言った。
「日記をつけるのはいいことだよ。ま、私はやらないけど」
なんで、と聞くと
「え～、だって二人で日記つけてて似たような内容になったらお互いパクったろーって疑心暗鬼に陥りかねないじゃない」
と言われた。
その時は納得しちゃったけど、今考えるとワケわかんない持論だったと思う。
キャロは単にめんどうなだけだ。

台風来る（前書き）

最初はシェーンコップオンリーにしようと思ったけどやめました。

台風来る

その男は例えるなら秋にやって来る超大型台風だった。
ワルター・フォン・シェーンコップ、年齢は３８歳。
やって来たのは三年前。次元漂流者である。
初めは民間協力者としてかかわっていたが、管理局要人救出の際にその辣腕を発揮し、異例のスピード昇進を果たす。
魔導師ランク　陸戦Ｂ　空戦Ｃ。しかし、実質、陸戦ＳＳ以上である――

シェーンコップは機動６課の部隊長室にいた。
「ワルター・フォン・シェーンコップ三佐・・・。ヤンさんとはどう言った関係で？」
「ヤンは私の部下でした。射撃も格闘もできないヤツでね、穀潰しのヤンとか言われてたな」
これは半分嘘で半分本当である。
ヤンは薔薇の騎士連隊（ローゼンリッター）の一員ではなかった。しかし、かつて穀潰し呼ばわりされていたのは事実だ。
「そうですか。まぁ、その話はそれくらいにしといて、シェーンコップ三佐、実はな、ウチの部隊でもう二つくらい小隊を作りたいと思っとるんよ」
「その内の一つの隊長を、小官に任せるのですか、八神二佐」
はやては無言で頷いた。
シェーンコップは辞令を受け取り部隊長室を後にしようとして扉を開き外に出た。
しかし、そこにかつての上官の姿を見た。
「これはこれはヤン提督。今回はどうも」
「何度も言うようだけど、今は三尉だよ。・・・シェーンコップ三佐殿」

シェーンコップは苦笑した。
「どうだい、機動６課は？」
「部隊長は、まぁ、悪くはありませんな。それにしても若い」
「ローエングラム候は１９歳で大将だったよ。それに比べればまだまだださ」
と、いってもラインハルトは別格だ。他の人間が地を這っている時も彼は大空を駆けていた。
「そういえば、そのカイザーもここに来ているようではありませんか？」
「うん、そうだよ。くれぐれも、問題を起こさんでくれよ」
シェーンコップは微力を尽くしましょうと言い、大きく笑った。

機動６課は男性が極端に少ない。
創設の時、フォワードで男はエリオとキルヒアイスだけだった。
そのようなこともあり、エリオにとって男性が増えるのは喜ばしいことである。
＊＊＊

「詳しくはわかりませんけど、質量兵器とちがって、魔法はクリーンで安全だと――」
「質量兵器？」
「拳銃からミサイルといった兵器のことですよ」
これにより、魔法を使える魔導師は世界に欠かせないものなのだそうだ。
「しかし、魔導師という人種はそうホイホイ出てくるものではないそうなのです」
「ん、まてまて。じゃあ、どうやって魔導師を集めるのだ？」
この質問をした瞬間、キルヒアイスの瞳に静かな怒りが見えた。
しかし、それがラインハルトへ向けられたものではないことは明白であった。
「優秀な魔導師や魔導師の資質があるものを現地より徴収しているのです」
ラインハルトは絶句した。
それは半ば拉致ではないのか？
時空管理局は法の守護者たる存在ではないのか？
「ここの高町一尉やハラオウン執務官、八神部隊長はその口ですね。もっとも、本人たちの希望でもあるそうですが」
「ふむ・・・」
ラインハルトは視線をエリオへ移した。
「エリオは9歳だったな？そもそも子供をこのような軍隊紛いの組織で階級を持ち命のやり取りをしている時点でおかしい！人手不足にもほどがあるだろう！」
「でも、僕は自分の意志でここにいます。僕は、フェイトさんに恩返しをしたいんです・・・」
ラインハルトがここで言葉を切ったのはエリオと自分の共通点を見たからだろう。
ラインハルトは愛する姉を皇帝の手から救い出すために、その為の力を得るために軍人になった。エリオはフェイトに恩返しするた

め、彼女を守れるほど強い騎士（ナイト）になるために管理局に入った。
どちらもスケールは違えどにたようなものではないか？それに自分が決意したのはエリオほどの頃ではなかったか？
ラインハルトはこのようなことを考えた。
エリオ・モンディアル。なんと出来た子であろうか。
「どちらにせよ、ここまで人手不足なのは際限なく管理世界を拡大したからだろう・・・完全に管理局のミスだ・・・」
あそこまで考えて意志を変えないのはラインハルトの長所であり短所だ。
エリオの伏せた視線がラインハルトの心に深く突き刺さっていた。

エリオの機動６課日記
○月♪日
ティアナさんに昼食をおごってもらった。
僕は大食いなのだけれど、まさかスバルさんまでここまで食べるとは予想外だった。
「食べることは人が生きていくには必要な事だから。それに、食べれるときに食べとかないといざというときに体が動かないでしょ」
それには激しく同感だ。
スバルさん、キャロ、そして僕はお腹いっぱい食べれて（午後の訓練がなかったから）満足だったけどティアナさんの財布は僕らのお腹に反比例していたようだ。
もうおごってもらえないかもしれない。残念。

台風来る（後書き）

読んだ人全員が思ったと思いますが、シェーンコップさんがこの世界にやって気来たという時期。なんと3年前。あれ？おかしくね？そう、おかしいのです。

というわけでその説明を――

「お待ちください」

貴方はだあれ？

「時空管理局本局執務官補佐二等陸尉、アンドリュー・フォークです」

おお、フォーク二尉、どうされましたか？

「その説明、小官にお任せください。この世界ともとの宇宙歴の世界は平行です。しかし、我々がここへやって来たのはそう、気まぐれ神様のせいです。ですから、肉体的に若返ってばらばらな時代にやって来るのです」

なるほど、ということはもとの世界ではおじさんだった人も若返って様々な時代へたどり着くのですな。

「そうです」

しかし、それではヤンやキルヒアイス、ラインハルトはどうなる？彼等は死んでそのまま平行にある時代へやって来たではないか。シェーンコップは三年前にやって来て「スピード昇進を果たした」となっているがキルヒアイスの話によるともといた世界での階級によって階級が決まるらしいぞ？どう言うことだ？

「・・・小官の説明にけちをつけるのですか？」

まぁ、そうだな。分かりにくいし。

「・・・・・・・・・・」

単に設定が曖昧なだけではないか？

「・・・！！」バタン！

あっ、倒れた。どうしたのだ？

「どうも、医者です。彼は転換性のヒステリーでね、挫折感が異常な興奮を引き起こして視神経が一時的にマヒするのだ」

なんだと！？

「まぁ、彼の言うことを全面的に肯定すれば大丈夫だよ」

そんなことができるか！読者に申し訳ない。て言うか作者がまとまらない変な設定をフォークに押し付けただけではないのか？

「さー、どーでしょー」

新部隊

設立して間もない機動６課だったが、フェイトの執務官の仕事が予想以上に忙しかったのに加えラインハルトの登場が重なって部隊編成を改編することになった。

「と、いっても改編するのはライトニング分隊だけやけどな」

「私は、何かと単独行動が多くなるから。ちゃんとした隊長の方がエリオとキャロのためにもなるしね」

フェイトがそういうとはやてに書類を手渡した。

「それじゃ、ライトニング分隊は解散や。そいで、今日付けでエリオ・モンディアル三等陸士とキャロ・ル・ルシエ三等陸士は――」

「えぇっ!?それは本当?」

「本当だ、ヤン三尉」

今、ヤンとラインハルトは談話室にいた。キルヒアイスは訓練場に出ている。

ラインハルトがヤンに伝えているのは旧ライトニング分隊メンバーの配属先についてである。

薔薇の騎士(ローゼンリッター)分隊。隊長は勿論あの人。

「薔薇の騎士と言えば同盟の最強部隊ではないか。そこの連隊長から指導を受けるなどとはあの二人には少々ハードではないか?」

「いや、シェーンコップもそれはしっかり考えている筈だから心配は無用なのだけど・・・」

ヤンが心配しているのはまだいたいけなエリオとキャロがシェーンコップに変なことを仕込まれないかであった。

「まさか、そのようなことはないだろう」

「あるから言っているんだよ。シェーンコップならエリオ君あたりに『女性の正しい抱きかた』とか教えかねない・・・」

そんな話をしているとシェーンコップが入り口の前を通りすぎよ

うとした。
訓練が終わったからシャワーでも浴びにいこうとしていたのだろう。
「あっ！ヤン提督！どうしたんです、カイザーなんかと一緒に？」
「シェーンコップ、今日の訓練で何を教えた？」
彼曰く、今日は護身術や陸戦基礎を教えたらしい。
護身術、というのが気になったが、そこには触れずに先程話題となった質問をシェーンコップにぶつけた。
「はっはっは！私はそんなこと教えてませんよ」
彼は完成度の高いジョークを聞いたかのように笑った。
それを見てヤンとラインハルトは頬を緩めたが、そこでシェーンコップは急に真顔になり言った。
「私がモンディアルに教えたのは『処女の正しい抱き方』ですよ」

はやてのもとに地上本部より入電の知らせが入った。
繋ぐように指示を出して一呼吸置くと目の前に画面が出現し、そこに一人の老人が映った。
『久しぶりじゃのお八神よ。エ？』
「ビュコック中将もお元気そうで」
ビュコック中将はレジアス中将に並ぶ地上本部の重要人物である。
聞いた話によるとなん十年も前にミッドに漂流してきてそこから叩き上げで中将の地位まで上り詰めた強者だという。
『今回連絡したのはそっちの部隊に任務をやろうかと思ってな』
ビュコック中将から告げられた任務はホテルアグスタで行われる骨董美術品のオークションの警備であった。
『こういうのは禁止物の違法取引の隠れ蓑にもなるし、出展されている品の中には一応ロストロギアもあるらしい。正式な命令書は後日そっちにおくるでの』
「了解しました。慎んで拝命いたします」
はやては消えかけたモニターに敬礼をしてみせた。

嵐の足音は着実に近づいてきていた。
だが、それを関知しているものは少なかったのだ。

続く

●月@日
シェーンコップ三佐はエースに数えられる魔導師の一人らしいからそのような人の教導を受けれるのは嬉しかった。
でも、流石にハードで、魔法の訓練は殆どやらなかった。
きっと護身術の訓練を本格的にやっている部隊とかここだけじゃないだろうか。
そう言えばシグナム副隊長も護身術訓練でシェーンコップ隊長に負けてたなぁ。
「やつは数々の死線を潜り抜けてきたに違いない。やつは何十人、いや、何百人と殺している！」
シグナム副隊長はそういっていたけど僕はシェーンコップさんがそれほど殺しているようには見えなかった。
あと、今日の終わり間近に八神部隊長が来て少しだけ護身術訓練を受けてたけど失礼ながらスッゴく弱くて、キャロにも負けてた。
人間、どこかで優れてるどこかで平均より劣ると聞いたことがあるけど、本当だとわかった。
少なくとも、今回のことで八神部隊長は人間であると証明されたわけだ。
そう言えば、最後に隊長から『正しい賞状の抱き方』について聞かされたけど、どう言うことなんだろ？

新部隊（後書き）

本編では触れませんでしたが、ラインハルトは嘱託魔導師としてキルヒアイスと共に行動することになりました。
部隊としては完成していないので仲間集めをするそうです。

ラインハルト、警備任務につく（前書き）

アニメとはセリフとか大分違うかもなの。

ラインハルト、警備任務につく

首都クラナガン郊外の小さな住宅街。
住宅街と言っても民家とちょっとした商店が申し訳程度に無秩序に並んでいるだけである。
しかし、人はすんでおり、近くに管理局の部隊駐屯地があるためそれなりの賑わいはあった。
そのようなは場所を二人の人間が歩いていた。
一人は少なくとも成人男性で、もう一人は１０代前半とおぼしき男の子である。
このような曖昧な説明しか出来ないのはこの二人が厚手のローブをはおり頭をフードで外界から隔離するように深く被っているからだ。
二人はこの住宅街に用があるわけではない。今ここを歩いているのは目的地への過程でしかないのだ。
そして、その足の向かう先は二人以外にわかるはずがなかった。

「今まで謎やったガジェットドローンの製作者やけど、最近の調査で広域指名手配犯のジェイル・スカリエッティだとわかった」
ミッドチルダ上空ヘリ内部。ここでは今はやてが調査の結果と今回の任務について説明中だった。
「今回の任務はホテルアグスタで開催される骨董美術品のオークション警備、人員警護で、スターズ分隊はここ、薔薇の騎士（ローゼンリッター）分隊はここを警備してもらう。このオークションではけっこうなロストロギアも出展されるようやから、それに反応してガジェットが来るかもしれへんしな」
簡易見取り図を指差して説明していくはやてにキルヒアイスが質問をした。
「私たちは、何処にいればよいのでしょうか？」

「キルヒアイスさんとラインハルトさんは私たちと内部警備するの」
ラインハルトとキルヒアイスがなのはから説明を受けている時、奥に座っていたキャロがシャマルに先から気になっていたことを聞いた。
「あの～、この箱って何が入ってるんですか？」
彼女の指差す先には５つの箱があった。
「隊長たちと、あそこの二人の仕事服よ」
そういうとシャマルは意味ありげにふふっと笑った。

ホテルアグスタ――
ここのオークションはネットオークションとは違い選ばれた者だけが参加を許される気品の高いイベントである。
そこを訪れていた一人の若い男性は美しい女性三人組を見つけた。
「お嬢様方？どうです？私とお茶でも・・・」
何の捻りもない文句だったが、女性はニコリと笑った。
「すみません、私たち今仕事中なもので・・・」
女性の手には管理局員の身分証明証があった。
そんな美しい隊長達に負けじと注目を浴びていたのがラインハルトとキルヒアイスだ。
天使のような容姿に漆黒の礼服をはおり、蒼氷色（アイスブルー）の瞳をもつラインハルトは高貴なる淑女の心を鷲掴みにしており、男性からは羨望と嫉妬の眼差しを受けていた。
キルヒアイスも十分以上の容姿だが、ラインハルトと共にいるとどうも陰に入るのだ。もっとも、キルヒアイスはそのようなことは微塵も気にしていなかったが。
「キルヒアイス、このような所を見ていると門閥貴族の吹き溜まりを思い出すな」
「はい、しかしラインハルトさま、ここにいるのは貴族等ではなく金がある市民ですよ」
例外もいるでしょうが、とは言わなかった。

「それもそうだな。・・・ん？」
巡回を続けていると通路の向こうで我らが部隊長殿と緑の髪をもつ紳士が談笑しているのが見えた。
「キルヒアイス、八神部隊長はこのような所の人物とは縁がないと思っていたがな。なかなか侮れん」
この発言はいささか失礼に値するが、事実、はやてが交流を深めていそうなのは社交界よりも近所付き合いというイメージがあるのである。
「彼も管理局の人間ですよ。アコース査察官です」
そうか、と答えながらもその男が査察官であることを疑うラインハルトであった。
「あ、ラインハルトさんにキルヒアイスさん」
振り向くと、なのはとフェイトがこちらへ歩いてくるのが見えた。
「どうですか？なにか変なところとかありましたか」
「いや、特に。この階は」
ラインハルトがそう言うとなのはから一階玄関の警備をするように言われた。
「このようになにか命じられるのは久しぶりだな」
一階に向かう途中、ラインハルトはキルヒアイスにそう言った。

ホテルアグスタ外――
『はあー、すごいなー今日は八神部隊長の守護騎士全員集合だよ』
念話でスバルが感嘆の思念を飛ばしてきた。
『あんた隊長陣についてやけに詳しいわよね』
それに対してティアナは返事の思念を飛ばす。
スバルにとってここの隊長陣は憧れの存在である。詳しくて当然といえば当然だが。
それにしても、とティアナは思う。
この部隊――機動６課の戦力は異常である。
本来管理局の行使部隊は保有戦力が限定されており、総合的な魔

力値を越えた部隊編成は禁止なのだ。
これはその部隊が反乱行動に出た際に対応できるようにとの配慮である。
しかしこの部隊はどうだ。
次元世界のありとあらゆる魔物を集めたような編成ではないか。
隊長はさておき副隊長までSランクに近い。あの年で既にB　ランクのエリオにレアな竜召喚師のキャロのコンビはかなり強力。潜在能力の塊とも言えるスバル。隊長陣に届くほど強いラインハルト、キルヒアイス。ランクはびっくりするほど高いわけではないが技術なら部隊一のシェーンコップ。
この中で凡人は私だけ――。
強がっているティアナだが、この部隊だと存在自体が彼女にとってコンプレックスなのだ。
しかし、こんなことで挫けてはいけない。私は、もっと進まなきゃいけないんだ。
この焦りがいかに危険性をはらんだものなのかは彼女にはわからなかった。

ラインハルト、警備任務につく（後書き）

今回は機動６課日記は無しです。

ラインハルト、警備任務ｐａｒｔ２（前書き）

なんか長丁場の予感んんんん！

ラインハルト、警備任務ｐａｒｔ２

シャマルの指輪型デバイス「クラールヴィント」が輝いた。
「センサーに反応？ロングアーチ、なにか分かる？」
『来た来た、来ましたよー、ガジェットドローン陸戦？型！」
それを皮切りに矢次に報告が入る。
『一型、数は３０ないしは３５』
『？型もいます！数は４！』
『二型も捕捉。数は４０ないしは４３。全て三方向から接近中！』
シャマルの方に画像が転送されてきた。
ガジェットの大群は三隊に分かれホテルを方位するように展開していた。
「こちらシャマル！ガジェット襲来のため私が指揮を執ります！」
こう言うと各メンバーから威勢のいい返事が来たが、本人は不安だった。
（どうしよう・・・包囲されつつある。こんなのヤンさんかはやてちゃんしか打開無理よ・・・）
彼女がラインハルトの指揮官としての天性の才能を知っていればこれほど悩まなかったろう。
しかし、その事を知らない彼女は臨時指揮官として館内の誘導が終わりもっとも信頼できる上司が来るまで最善の手を打たなければならないのだ。
取り合えず彼女は各隊にそれぞれを対応させることにした。

「敵をホテルに近付けるな、か」
「どうされますか、ラインハルトさま」
キルヒアイスの質問は「この命令に従うか否か」というものである。
ラインハルトはそれを否定した。

「いや、お前はともかく、俺はたかだか三尉待遇の協力者にしか過ぎない」
そう言うとラインハルトはミニ艦隊を出現させた。
「命令には従うまでだ」

「各隊で防衛線を張るように、だそうです」
エリオにそう言われたシェーンコップは「そうか」と答えて少し考えた。
そして顔を上げてエリオとキャロに指示を出した。
「二人はフリードで上に上がって?型の相手をしろ」
「えっ、シェーンコップ隊長!?」
キャロが心配した。
?型は防御力が低く直線的なため相手しやすいが、動きが複雑で頑丈な陸戦型の大群、しかも?型までいるのに一人で立ち向かうなど自殺行為だ。
そんな気持ちを知ってか知らずかシェーンコップは同盟軍の装甲服に酷似しているバリアジャケットを着こみ、右手にトマホークを持ちながらさらっと言った。
「俺はこんなことで死ぬほど悪いことはしてないんでね」

命令を受けたスバルとティアナは戦闘態勢をとっていた。
「よーし!行くよ!ティア!」
「うっさいスバル!落ち着きなさい!」
しかし、一番落ち着いていなかったのは他の誰でもない、ティアナだった。
彼女の精神を自己嫌悪と責任、コンプレックスの重圧が圧迫しており更に大きな焦りを生んでいるのだ。
(落ち着きなさいティアナ・ランスター!)
言い聞かせるも焦りは募る・・・
その時、上空を光が貫いた。

「よーし、新人どもの所へはいかせねーぞ！」
「お前も以外と過保護だな」
「うっさい！」
前線の援護のためにヴィータとシグナムが飛来した。
しかし、三方向から接近する敵にたいして有効な手を打てないでいるようだ。
「くっそ・・・」
しかし、それはティアナから見れば憧れ、そして軽い嫉妬心の対象となっていた。

そんなとき、近郊の森の中、一人の男と数十センチの融合機が１０歳前後の少女を見守っていた。
その少女の足元には魔法陣が展開されている。
「吾は乞う――」
呪文を唱えていくと周りに多くの虫が現れ、彼女が指を差し出すとその先に止まった。
「ミッション、オブジェクトコントロール」
そして、虫に優しく語りかける。
「気を付けてね、行ってらっしゃい」

屋上で指揮を執っていたシャマルは敵の動きが変わったことに気がついた。
「有人操作になったのかしら。あっ！はやてちゃん！」
屋上に誘導が一段落ついたはやてが現れた。まだドレス姿である。
「どうや？敵さんの様子は？」
「うん、さっきまでいつもの規則的な動きだったのに急に良くなって・・・」
「それはよかった」
シャマルは一瞬耳を疑った。今この人はよかったと言ったのだ。
それを見てはやてがもう一度言う。

「だから、有人操作になってよかったちゅうんや。まぁ、見とき」
はやては戦力分布を確認して各隊に指示をとばした。

続く
日記
○月♪日
今日の訓練中にいきなりシェーンコップ隊長が僕たちに昔手下が言っていたという世界最強の言葉を教えてもらった。
使う機会があれば使いたいけど使える相手がいないから暫くはお蔵入りだ。

ラインハルト、警備任務ｐａｒｔ２（後書き）

次回、包囲されつつある機動６課。それを打開するはやての策とは？そして前話の二人組はいったい！？
次回でアグスタタイム終了の予定です。
都合上話を大幅改変しました。ごめんなさい。

ラインハルト、警備任務ｐａｒｔ３（前書き）

まだ終わらないよ

ラインハルト、警備任務ｐａｒｔ３

ミッドチルダ某所
そこには白衣を着た男性と助手らしき女性が一人いた。
『・・・ドクター』
「ン？ルーテシア、どうしたんだい浮かない顔をして？」
男は白衣を翻し、モニターに映る少女に体を向けた。
『新しくガジェットを寄越してほしいの』
「ンンン？ルーテシアにしては珍しいね、なにかあったのかい？」
『敵が予想以上に手強くて。このままじゃドクターのお願い事きけないから』
男は「そうか」と言いなにかを考えるような素振りを見せたあと再び少女の方を見た。
「よし、ガジェットを？型を三機、？型十五機用意しよう。でも、これが限界だからね」
『ありがとう、ドクター』
少女は礼をいうと画面ごと消えた。
そして間をおくと男はククと笑いを漏らした。
「ドクター？」
女の問いに男は優しく答える。
「いや、彼女の能力は実に素晴らしい」
「極小の召喚虫による無機物遠隔操作『シュテーネ・ゲネゲン』・・・ですね」
ドクターと呼ばれた男は満足そうに頷き言葉を続ける。
「もっとも」
「？」
「これもルーテシアの能力の一端にしか過ぎないがね」

ホテルアグスタ　薔薇の騎士（ローゼンリッター）分隊

「!?転送魔法、来ます!」
ロングアーチと通信が途絶した今、薔薇の騎士分隊の情報源はキャロとなる。
「どんな規模だ」
「?型が三機、?型が十五機、やはり三隊に別れてますね」
しかし、シェーンコップはそんなものか、とでも言うように不機嫌な顔をして見せた。
その時、臨時指令所から通信が入った。

ラインハルトは艦隊を展開しガジェットと対抗していたが、やはり苦戦を強いられていた。
「キルヒアイス、そっちはどうだ!」
ちらと見ると丁度キルヒアイスはガジェットを一機撃墜したところで、息を一つ吐くとラインハルトに微笑んだ。
「やはり、ＡＭＦ　が厄介ですね」
このまま真正面からやりあっても勝てないとラインハルトは悟った。
いくら魔力が安定しているからといっても所詮は初心者である。
まだまだ経験不足が目立った。
しかし、その時。
『こちら臨時指令所。今から作戦行動に映るから、言うこと聞いてな』

少女はガジェットの操作をしながら敵が後退をはじめたことに気づいた。
後退してくれるのは有難い。
その分ガリューのサポートにも回せる。
そう判断した彼女はガジェットに分散の命令を出した。
が、しかし。その瞬間、後退中だった敵が急に攻勢となったのである。

彼女は急いで先の命令を取り消すが、そうすると再び後退を始めるのだ。まるで嘲笑うかのように。
非常にウザかった。しかし無視することもできない。
「先に邪魔なやつからやっつけてこう」
彼女は再びガジェットに命令を飛ばした。

臨時指令所――
空中に浮かぶ地図の上を移動する光点を見てはやてはニヤリと笑った。
彼女がニヤリと笑う時は必ず変なことを思い付いたときか、物事が上手く運んだ時の二つである。
今回は確実に後者であるだろう。
彼女はキルヒアイスに念話で話し掛ける。
『キルヒアイスさん、準備はええか？』
『こちらはできてます』
返事を聞き、よし、と彼女は指令を飛ばす。
「予定通り敵を目標地点に誘導したら一目散で逃げるんや。ええな、一目散で、やからな」
そして、敵が目標地点についた。
包囲するような体形だった陣形が今では見る影もなく崩れ、一ヶ所に集まっていた。
目標地点に到着した瞬間に先程まで後退戦をしていたフォワード陣は正に脱兎のごとく背中を向け逃げ出した。
ガジェットはとっさに反応する。が、そのときにはもう遅かった。
キルヒアイスは空中からガジェットの密集する地点へ一発の魔力弾を撃ち込んだ。
すると、その魔力弾が着弾する寸前にそこを強烈な光が包んだ。
その輝きは爆発的なエネルギーを放出しながらガジェットの身体を焼き、引き裂いていく。
そして、光が消えるとそこにはがらくたの山と化したガジェット

達の亡骸が無数に横たわっている非生産的な光景が広がった。
物陰に身体を隠していたフォワード陣はラインハルトとシェーンコップ以外、目をぱちくりさせていた。
「ラインハルトさま、お怪我は？」
「いや、無い。それよりキルヒアイス、さっきのはなんだ？」
「指向性の高濃度圧縮魔力粒子です。ぼくは指向性ゼッフル粒子とよんでます」
「ふうん、魔法なのか？」
「そんなところです。特定の人物の魔法で起爆します」
ラインハルトは再びふうんと返事した。
丁度その時通信が入る。
『ほらほら、みんな。まだガジェットは少し残っとるよ』

ガジェットを操っていた少女のいた森から反対の位置にある森に厚手のコートを羽織った男と子供が立っていた。
「どうだ？」
「間違いありませんな」
男の質問に子供はいまいち子供らしくない冷たい口調で返事した。
「我が皇帝（マイン・カイザー）閣下はここにおわす」
「そうか」
男はホテルの方を懐かしむような目で見つめた。
その男の瞳は左右で色が違うのが印象的であった。

続く

機動６課日記
昨日は久し振りにフェイトさんとキャロ、僕の三人で夕食を食べた。
フェイトさんの手料理はシェーンコップ隊長の“男の手料理”より遥かにおいしかったことは胸を張って言える。

でも、フェイトさんが僕たちの話を聞いて心配そうにしていたのはなんでだろ。

ラインハルト、警備任務ｐａｒｔ３（後書き）

フェイトさん家の夕食風景はまたいつかかきます。
コートの二人組、一人はわかったと思いますが、もう一人は「えぇ！？」だと思います。勘のいい人ならわかったかもしれません。
警備任務は次回で完結するはずです。

ラインハルト、警備任務ｆｉｎａｌ（前書き）

あの二人の正体は？

残った敵機は?型が十数体だけだった。
本当のところはまとめて一網打尽にしたかったのだが、致し方あるまい。
命令を受け、まず動いたのがティアナだった。
「さっきの作戦で自分はなにもできなかった・・・」
彼女はそう思っていたが、実際は敵を丁度良い距離で惹き付けたある意味いちばん活躍していた人物である。
しかし、今彼女が欲しているのは部隊としての戦果ではなく個人レベルでの戦果だった。
「次はもっと、いや、残り全部私が落とす・・・!」
彼女は貪欲な出世欲があるわけではない。名誉が欲しいわけではない。
このまま自分の居場所がなくなり皆に置いていかれるのが辛いのだ。

「ランスターか!?先行しすぎだ!」
しかしラインハルトはそれを言葉にはしなかった。どうやら周りも困惑しているようだ。
「ティア!」
そのようななか、スバルがティアナを追うかたちで駆け出した。
最早あきれて言葉もでない。
指揮官の指示がなくてもある程度の秩序が守られなければならないのは当たり前のことた。
「所詮はまだまだ烏合の衆というわけか」
ラインハルトの評価は厳しいものだったが、自分もその烏合の衆を構成する一人だということを思い出して小さくため息をついた。
「どうしますか、助けにいきますか?」

キルヒアイスが尋ねてきた――いや、キルヒアイスはこの状況にラインハルトがどう動くかは大方予想がついているだろう。
「助けにいくさ。見殺しにもできんしな」
ラインハルトは華麗な動作で艦隊を出現させた。

『ティアナ！戻るんや！』
「掃討戦なら個人でもやれます！行きます！」
『ティアナぁ！』
通信のはやての声には怒気が滲んでいたが、気にしなかった。
「私だって―隊長達のように特別な力がなくったって―ランスターの弾丸に貫けないものはないんだ」
彼女は独り言のように呟くと通信を切った。
生き残りのガジェットの殆どがこの先にいる。そしてそれらは彼女の視界に入ってきた。
隣にいるスバルに呼び掛ける。
「スバル！クロスシフトＡ、いくわよッ！」
「おう！」
威勢の良い返事と共にスバルはウイングロードで駆け出した。
そしてティアナはカートリッジを４発ロードし、いつもよりも多くの魔力弾を出現させた。
「ティア！四発ロードなんて無茶だよ！」
ティアナは大丈夫と答えた。しかし、いつもよりも多くの負担が身体にのし掛かる。
「よし、いける・・・」
このコンビネーションはたくさん練習してきた。失敗は無い！
「クロスファイアー、シュートッ！」
号令と共に幾つもの魔力弾がガジェットに向けて放たれ、それらは的確に金属の肌を貫いていった。
だが、今までに無いほどの数の魔力弾を操るのは半人前の彼女にはまだ難しく、コントロールから弾が一発外れてしまった。

しかも、それはスバルのところへ一直線に飛んで行く。
「しまった!?」
今は対ガジェット戦のため非殺傷設定ははずしてある。当たればただではすまない。
ティアナも、スバルも、そして駆け付けたラインハルトとキルヒアイスも息をのんだ。
しかし、誰もが予想した最悪の事態は怒らなかった。
ティアナの魔力弾が着弾する寸前に森から別の魔力弾が飛び出し、ティアナの物を撃墜したのだ。
ラインハルトが弾の飛び出した方向を向くと、そこには厚手のコートを羽織った男がひとりと同じく厚手のコートを羽織った子供が一人ずつ立っていた。

ガジェットの掃討が終わり、後は撤退を待つだけだった。
ティアナとスバルはヴィータに引きずられるようにして臨時指令所につれてこられた。
そこにいたのはなのはとシェーンコップ、はやてだった。
何を言われるかは分かっていた。
全員（シェーンコップは微妙だが）怒りと悲しみが織り混ぜられた表情をしている。
彼女を引っ張ってきたヴィータは怒り心頭だった。殴られなかったのは殴ったりするのは止めるようにはやてに厳命されているからだろう。
「ティアナ」
まず始めに口を開いたのははやてだった。
「自分が何を言われているか、わかっとるな?」
「はい・・・」
ティアナの声は口に靄がかかったように小さく弱々しかったが、はやては続ける。
「命令違反に危険行為。その一つ一つが部隊そのものを壊滅させう

ることも、わかるな？」
「はい・・・」
「あの、あれはコンビネーションの一環で――」
「スバル、黙ってなさい」
スバルの弁護はなのはによって封じ込まれた。
はやては一つため息をついた。
「ティアナ・ランスター二等陸士、スバル・ナカジマ二等陸士。両名に三日間の訓練参加停止と反省文一日三枚書くことを命じる」

「どうだったなのは？二人の様子は」
なのはが振り向くと執務官の黒い制服に身を包んだフェイトが立っていた。
「大分反省してるみたい。フェイトちゃんは？あの二人のこと、何かわかった？」
「全然。しきりに『マイン・カイザー』て言ってる。ラインハルトさんを呼んでることはわかったんだけど」
ということはラインハルトの知り合い、つまるところラインハルトのいた世界の住人なのだろう。
「わかった。ちょっとラインハルトさん呼んでくるね」
なのはは事後処理にあたっているラインハルトのところへ走り出した。

その男がいる場所はホテルの一室だった。
ラインハルトとキルヒアイスは扉をノックする。すると中から聞き覚えのある声が聞こえてきた。
ドアノブを捻り中に入る。
「・・・やはり卿か。ロイエンタール」
「お久しぶりです、ラインハルト・フォン・ローエングラム陛下」
ロイエンタールは恭しく頭を下げた。

「陛下はよせロイエンタール。今の俺はたかだか三尉。キルヒアイスより低い」
ロイエンタールはキルヒアイスを昔を懐かしむような目で見た。
「キルヒアイス閣下は、何も変わっていないように見える・・・」
キルヒアイスはラインハルトからロイエンタールの反乱については聞いていた。しかし、ロイエンタールがラインハルトを裏切ったわけではないことはキルヒアイスにもわかった。
きっとラインハルトも同じだろう。
「それよりもロイエンタール、なんだ、卿はまた子供を・・・罪な男だな」
その子供とはロイエンタールの横に座っている十歳程の男の子のことである。
「いえ、こいつは私の子供ではございません」
ラインハルトとキルヒアイスが頭の上に「？」の文字を浮かべると少年はすくと立ち上がってこちらを見た。
確かにロイエンタールには似ていない。いや、似ていないというかどこかで見たことのある顔つきだ。
「陛下、貴方は忠臣の顔も覚えられないような方でしたか」
「なに？」
次の瞬間、少年の瞳が不気味に光った。
「！？オーベルシュタイン！？オーベルシュタインか！？」
「左様です」
流石にこれには驚いた。オーベルシュタインはここに来たときおよそ十歳の子供になっていたのだ。
可愛いげがないようだが、よくよく見てみると若々しい肌はみずみずしく、頬にはほんのりと赤みをさしていた。
実に可愛らしい子供だ。女性なら母性本能が沸き上がるだろうがラインハルトとキルヒアイスには笑いの感情が沸き上がってきた。
笑いをこらえるラインハルトとキルヒアイスの心情を知ってか知らずかオーベルシュタインは小さくため息を吐き子供らしい声で言

った。
「陛下が私を見て直ぐに気づかないとは、実に悲しいことですぞ」
「ふん、鉄面皮が哀しみを語るとは、笑止」
「なにか言いましたかなロイエンタール元帥」
「気にするな。只の本音だ」
オーベルシュタインはラインハルトに向き直った。
「陛下、私たち二人を部下としてお使いください。ロイエンタール元帥・・・今は違いますが、彼の戦闘力と私の情報操作魔法の力―必ずしや、陛下のお力になることでしょう」
オーベルシュタインは口調はお願いだが、本質的には「我々を使わないといろいろ苦労しますぞ」といっていることだろう。
「わかった。俺も仲間は欲しいし、断る理由もないからな」
こうしてロイエンタールとオーベルシュタインが仲間になった。
クラナガンの陽は傾き始めていた。

続く

今回は日記はおやすみです。
時空の歴史がまた1ページ・・・

ラインハルト、警備任務ｆｉｎａｌ（後書き）

大分話を変えてますが、気にしないでください。
基本的にはなぞります。

願い、二人で　前編（前書き）

遅れました。忙しくて・・・（汗）

願い、二人で　前編

クラナガン某所
少女と白衣を着た男が通信で話している。
『――ということで、ありがとうルーテシア。また』
「うん、ドクターも元気で」
通信を切ると、画面のあった場所には小さな少女が不機嫌そうな顔でぷかぷか浮かんでいた。
「ルールー、あんな変態と付き合うなよ」
少女―ルーテシア・アルピーノは首を振る。
「ゼストもアギトもドクターを嫌ってるけど、私は別に嫌いじゃないから。それにね・・・」
そこまで言うと、ルーテシアの隣に忍者を彷彿させる彼女の召喚虫、ガリューが現れ、右手に持つアタッシュケースを開けて見せた。
「・・・また違った」
「・・・・・・・・」
ルーテシアは一瞬落胆したようだったが、直ぐにアギトへ視線を戻した。
「私が欲しいものを見つけるのにはドクターの力が要るから」
そのときルーテシアがどのような表情を見せていたのかは逆光で読み取れなかった。

機動６課隊舎
「みんなお疲れさま！」
玄関前でフォワードメンバーが隊長からこの後の動きについて説明を受けていた。
「今日の午後訓練は無しね」
「お風呂でも入って、御飯食べて早めに休んでね」
なのはも、フェイトもティアナとスバルについては触れなかった。

ある種の優しさなのだろうが、それが余計にティアナの心を抉る。
「薔薇の騎士メンバーは俺の料理でも――」
「「結構です」」
振られたシェーンコップは「何が気に入らないのかな」などとぶつくさ文句を言いながら去っていった。

「スバル、あんた先戻ってて。私個人練習してるから」
ティアナが言ったことに乗らないスバルではない。
「あ！私も、私もー！」
「僕も！」
「私も！」
しかし、ティアナはそれを断った。
「エリオにキャロは明日も訓練あるでしょ。隊長達が言ったように、早く休みなさい」
「ティア、わたしも停止処分中だよ」
しかしティアナはＮＯと答えた。
「私一人でやらせて・・・」

隊舎にはいくつかの応接間がある。
その内の一つにラインハルト、ロイエンタール、オーベルシュタインがコーヒーを前にして座っている。
そこへ一人の男性が入室してきた。
「はじめまして。グリフィス・ロウランです」
ラインハルトにとってグリフィスは「目立たないが堅実で信頼と尊敬に値する人物」である。
「八神部隊長は？」
「公務で手が離せないので・・・」
そう言ってグリフィスは三人に対となる席に腰をおろした。
「さて、ロイエンタールさんと、オーベルシュタイン・・・くん？」
その言い方にオーベルシュタインはいささか不満げだったが殆ど

面に出さなかった。しかし、ロイエンタールは見破っており、少し愉快そうだった。

「貴殿方はどういった経緯でここへ？」

二人は（基本的に）正確に嘘をつかずに話した。

ラインハルトはここにオーベルシュタインがいるのを不思議に思っており、その事を話すとフッと笑ってから言った。

「それは皇妃陛下が陛・・・ラインハルトさんに要らぬ心配をさせないようにするための嘘でしょう」

ラインハルトはなるほどと頷いた。

「つまり、お二方はラインハルトさんの友人であったと言うことですか？」

「まぁ、そういったところだ」

ロイエンタールがそう答えるとグリフィスはそうですか、言って挨拶をして応接間から出ていった。

暫く静寂が室内を包みこみ、それをロイエンタールが破ってラインハルトに謝罪した。

「陛下、先程は失礼を・・・」

「構わん。というか、陛下は止めろ。今は三尉待遇の一個人にしか過ぎん」

「そうですぞロイエンタールさん。ラインハルトさんはこの世界においては皇帝としてではなく一人の青年として存在しておられるのです。ここはラインハルトさんの邪魔にならないように言葉使いに十二分注意して行動すべきだと考えますが」

「餓鬼がキーキー音を立てるな。卿の出す音は不快指数がいささか高いのでな」

「・・・何か言いましたかな」

「案ずるな、只の悪口だ」

ラインハルトはこの二人のやり取りを見て思う。

この二人、実は仲が良いのではないか？

日は完全に姿を消しても、ティアナは一人で自主練に励んでいた。
空中に浮かべたスフィアに銃口を向けていく。単純だが、効果的な練習方法だ。
「フッ・・・フッ・・・」
彼女が銃口を動かす度に高い音がなる。正確に狙いを定めている証拠だ。
そこへいきなり人影が現れた。
「・・・誰です」
動きを止めないで暗闇の人物に誰何した。
「私だよ」
「ヤンさん・・・」
そこにいたのはヤン・ウェンリーだった。
「休憩無しで四時間、体壊すよ」
「いいんです。私、凡人なもので」
ヤンはおさまりの悪い頭を掻きながら「凡人ねぇ」と吐息を吐いた。
「私から見ればティアナもすごいんだがね」
「・・・・・・」
ヤンはまた髪を掻き回す。
「とにかく、少しは休みなさい」
しかしティアナは曖昧な返事を返すだけだった。

数日後・・・
高町なのはとジークフリード・キルヒアイスは戦技教導官である。
だから後日の訓練スケジュールをたてなければならなかった。
その為には事務室のオフィスのコンピューターを使う必要があり、二人はそこへ向かっていた。
そんな二人のところへ一人の幼女・・・いや、ヴィータが話しかけてきた。
彼女はなのはの補佐官であるため訓練の時に感じたことや任務中

の部下の雰囲気や技術について報告する義務があった。
「なのは、キルヒアイス。ちょっといいか？」
そう言われ、なのはとキルヒアイスは談話室に入る。
「最近のティアナ、なんか変じゃないか？」
「変？」
なのはとキルヒアイスは同時に聞き返し、考えた。
「確かに、最近のティアナは焦ってる感があるよね」
「だろ？ホテルでの一件より前はあまり感じなかったけど、あのときはおかしかった」
ヴィータは紙コップのスポーツドリンクを一息に飲み干し続けた。
「ウェンリーから聞いたんだけどさ、参加禁止処分受けてからティアナろくに寝ないで自主練してんだぜ」
その事はなのはもヤンから聞いていた。
彼女の焦りの原因はなにか。
その時、キルヒアイスに思い当たる節があった。
キルヒアイスはおもむろにキーボードを操作した。
空中に一人の青年の顔が写し出される。
「彼はティーダ・ランスター。察しの通りティアナの実兄です」
その頃、同じことを大浴場でスバルがキャロに話していた。
「ティアのお兄さんは首都防空隊のとっても優秀な魔導師で、なのはさんより2年早く尉官になった人なの」
幼いティアナにとっては彼は自慢の兄であり、また目標であった。
しかし、機動6課とは違い、首都防空隊には老若男女、ピンからキリまで様々な人々がいる。そのような場所で彼の功績を素直に喜ぶ人間など皆無だった。
同期には遠ざけられ、歳上の部下からは嫉妬と羨望の眼差しで見られ、上司には疎まれていた。
話の流れが重くなると壁のスクリーンに代わる代わる写し出される風景が雨模様となり、キャロにスバルの話とスクリーンが同調しているのではないかと錯覚させた。

「ティアナはね、気づいてたんだって。お兄さんが、ちょっと変なこと」

家に帰ってくるといつも疲れた顔をしており、その疲れは日に日に増していった。いつていた感じらしい。嘗てのように優しく魔法を教えてくれたり楽しい物語を聞かせてくれることもなくなった。

いつも部屋で魔法の勉強。

そのような兄の窶れた背中を見てティアナにできたことはその兄が振り向いてまた彼女を抱き上げてくれることを願うだけだった。

が、その機会は永久に訪れなかった。

日頃の精神的ストレスが原因でうまく立ち回れず任務中に犯人に撃墜され殉死したのだ。

彼の葬儀は一部の者だけでひっそりと行われた。

「その時、お兄さんの上司もそれに参加したらしいんだけど」

幼いティアナは聞いてしまった。その上司が部下に話していたことを・・・。

「奴は本当に役たたずだったな。死んでも捕まえるべき犯人を取り逃がすとは。航空隊の恥だ」

ティアナはその時思った。

―私の兄はそんな役たたずだったか。死んでなお貶されるような人間だったか。

その思い出が今の彼女を縛っている。

それは時として強さとなり、時として自分を滅ぼすものとなる。

そしてまさに今、ティアナ・ランスターは見棄てられたくないという思いから身を滅ぼそうとしているのだ・・・。

続く

日記

◎月£＊日　たまにヤンさんがわからなくなる。

前の世界では階級は中尉だったらしいけど、イマイチ怪しい。

シェーンコップ隊長はなにか知ってるみたいだけど・・・

オマケ

ラインハルト・フォン・ローエングラムは病に屈していた。
本人は別に屈していた訳ではないと言っているが、医者がそういうのだから真実だろう。
帝国艦隊旗艦ブリュンヒルト。その白い貴婦人の一室に彼はいる。
大きな窓からは眩い星が漆黒の海に浮かんでいるのが見えた。
彼は赤毛の友とこの海を手に入れようと誓い合ったのである。
そして、ラインハルトはそれを成し遂げた。が、それを分かち合う赤毛の友はもういない。
しかし、彼の乾いた心を少しでも潤そうとする少年がいた。
名はエミール。従卒であり、皇帝の主治医なや成るべく日々勤勉にくれる少年である。
そんな彼が、ラインハルトのもとを訪ねた。
「陛下」
「どうしたエミール？」
エミール少年は息をひとつ吸い、続けた。
「実はですね、夢に無目藻とか言う不景気な面をした男が現れまして、リリカルキャラに銀英伝キャラを当てはめらどうなるか、ということを陛下に伝えろと・・・」
「まてまてまて、エミール」
豪奢な金髪をなびかせながら起き上がったラインハルトはエミール少年を一度制止して、言葉を紡いだ。
「・・・あんなしんみりした始まりかたで結局ネタか？」
「はい」
又も室内を沈黙が支配した。それを打ち破ったのはエミールだった。
「僭越ながら、僕に考えがあります」

「ほお、言ってみろ」
「では・・・」
エミールは軽くゴホンと言って話始めた。
「読者の皆様にアンケートを取るのです」
「・・・正気か？」
「はい」
「アンケートなぞ、読者の皆様がほいほい答えるてくれるものではないぞ！？誰も答えなかったらどうする！？」
「そのときは、作者が独自の考えと偏見に基づき決定します」
ラインハルトはフムと考え、答えた。
「まぁ、良いだろう」

というわけで青二才の作者がおそれ多くもアンケートなるものを実施いたします。まず、主役三人娘を銀英伝キャラにするなら誰を誰にしますか？
例＊クロノ・ハラオウン＝アレックス・キャゼルヌみたいな感じで。

＊高町なのは
＊フェイト・Ｔ　・ハラオウン
＊八神はやて

願い、二人で　前編（後書き）

アンケート、答えてくれると嬉しいです。わからなかったら質問してください。

次回、伝説の冥シーン

願い、二人で　後編（前書き）

冥シーンです。

願い、二人で　後編

「ほーら、ティアナ、起きて！」
目覚まし時計の音とスバルの声の御世辞にも上等とは言えないコーラスによってティアナは目覚めた。
「むぅ、ゴメン、今起きた」
巣穴から這い出す熊を連想させるティアナは寝ぼけ眼で目覚まし時計を見た。
４時丁度。窓から差し込んでくる柔らかな光がそれが夕方の４時でないことを無言で教えてくれる。
背伸びをしてスバルの方を見ると、既にトレーニング用のジャージに着替えていた。
「て、なんでアンタまで！」
「だって、今日は久しぶりの模擬戦でしょ。しっかり練習しなきゃ」
そう、ついに二人の訓練参加禁止処分が解けたのだ。
若い鋭気をもて余していた二人はヤル気満々である。
「はぁ。それなら、エリオとキャロにはだいぶ遅れてるからね。スバル、アンタ足手まといにならないでよね」
「わかってるよぅ」
そうしてひとしきり笑いあうと二人とも着替えは終わっていた。
ティアナとスバルの一日が、始まる。

高町なのはの訓練は熾烈を極める。
しかし、薔薇の騎士（ローゼンリッター）分隊のエリオとキャロに言わせれば、まだ温い方らしい。
「なのはさんの訓練を熾烈と言うならシェーンコップ隊長の訓練は破滅ですよ」
「そんなにすごいの？」
エリオの意見にフェイトが質問すると、キャロが答える。

「えぇ、破滅です。壮絶、とか激烈、を軽く超越して破滅です」
そのような破滅級の訓練をうけて外見が微塵も変わらない二人をみていると怪しい薬でも使っているのではないかと（特にフェイトに）心配されている。
さて、ＦＷの四人は基礎訓練を終え、午前中のまとめとして模擬戦に移った。
「あれ？二人は参加しないの？」
スバルが聞いたのはエリオとキャロが見学者にまわったからである。
「僕らはもう終わりましたよ」
「あ？そうなの」
ティアナはそんなやり取りを見てエリオとキャロがどのようにあの白い悪魔とやりあったのかが気になった。
見学者はラインハルトとキルヒアイスにロイエンタール＆ａｍｐ；オーベルシュタイン、ヴィータと薔薇の騎士分隊の３人、ヤンである。
そしてそこにもう一人女性が現れた。
「ゴメン、模擬戦もう始まってる？」
仕事の関係でフェイトが遅れてやってきた。
「今からですよ」
キャロがスターズ分隊の二人に視線を固定しながら言った。
「ホントは、この模擬戦、私がやろうと思ってたんだけどね」
「なのは最近訓練濃いからな。しっかり休ませてやんねーと」
最近のなのはは寝る間も惜しみ訓練の構想、審査等を一人でこなしている。
「僕も、一緒に手伝おうとはしてるのですが・・・」
「高町にもう寝ろと言われるんだな、キルヒアイス」
そのような話をしていると模擬戦が始まった。
「おっ、クロスシフトだな」

ヴィータの声に全員が視線を戻す。
「クロスファイアー、シュート！」
橙色の魔力弾がなのはにさっとうする。
「！」
しかし、流石はエース・オブ・エース。なんなく防ぐ。
そこへ間髪入れずにスバルがウィングロードでを駆けてなのはに向かって攻撃を繰り出していた。
スバルは咆哮をあげながら拳をなのはへと向ける。しかし、防がれ、弾き飛ばされる。
「うわぁ！」
「コラ！スバル、危険な軌道！」
「すみません！大丈夫ですから！」
なのははそれを軽く聞き流しながらティアナの影を探した。
それは直ぐに見つかる。ビルの上で砲撃体勢をとっていた。
同じく見学組もそれを見つけていた。
「ティアナが砲撃を！？」
フェイトは驚いたが、ラインハルトは違う点で驚いていた。
フェイトは気づいていないが、なのははスバルのウィングロードが交錯する場所の中心点にいる。つまり、ティアナはそれを利用し航空魔導師に対抗できるのだ。
恐らくあのランスターは幻術だ。
ラインハルトがそう思うとそれを証明するかのようにビルの上のティアナは消え去った。
「あっちのティアさんは幻術！？」
「本物は・・・！？」
キャロとエリオが驚いた。
再びティアナを探そうとするなのはにまたもスバルが唸りながら攻撃してきた。
それもやはり防がれるが、スバルは簡単には吹き飛ばされず、耐えた。

「ティアァァァ！」
そして、その呼び掛けに応じてティアナがなのはを取り囲むウィングロードのひとつを駆け上がり、魔力を銃剣状にしたクロスミラージュを構えて飛び上がった。
「一撃必殺！であァァァ！」
ティアナの渾身の一撃がなのはへと突き進んだ。が。
あろうことか、なのははレイジングハートを待機状態に戻し、魔力の保護なしの素手で剣を握り受け止めた。
「！？」
ティアナは勿論、スバルも、見学者も驚いた。
なのはは下を向いていて表情は読み取れない。しかし、ひとつだけ言えることがあった。
「不味いですよ」
キルヒアイスの呟いた言葉にラインハルトは首をかしげる。
「どういうことだ？」
「彼女、とてつもなく怒っています」

「おかしいな」
それは正しく恐怖そのものだった。
「二人とも、どうしちゃったのかな？」
言葉がでない。空気そのものが口を開くことを阻止しているようだ。
「一生懸命なのはわかるけど、模擬戦は喧嘩じゃあないんだよ。訓練の時だけしっかり言うこと聞いたふりをして、本番でこんな危険な無茶するなら、練習の意味、ないじゃない」
銃剣部分を強く握っているからか、なのはの手には血が滲んでおり、それは直ぐに明確な流血となった。
「ちゃんとさ、練習通りにやろうよ」
次の瞬間、握る力を強めたからか、刃は掌に更に食い込み、なのはの掌からは血が吹き出した。

「アッ！？」
ティアナは思わず目をそらす。そして銃剣を収納したあと、後ろへと跳んだ。
「私はッ！」
それはティアナの魂の叫びだった。
「もう、誰も傷つけたくないから！無くしたくないから！」
銃口を必死でなのはに向けようとするが、腕が震え、定まらない。
「だから・・・強くなりたいんです！！」
しかし、それへの回答は余りにも冷たく、暴力的だった。
「少し・・・」
指をたて、震えるティアナへ向ける。
「頭冷やそうか」
指先に魔力が集中すると見学組に戦慄が走った。
「クロスファイアー」
「アァァァァ！ファントムブレイズ！」
「シュート」
桜色の光線が、怒りを孕んでティアナに命中し、粉塵を巻き上げた。
「！？」
見学組の所まで爆風が吹き込んできて、暫くラインハルト達の視界をふさいだ。
粉塵がはれる。
ティアナは辛うじて耐えたようだが、その瞳はどこも見つめておらず、大きな孔を連想させた。
なのはが、再び魔力の集束をはじめる。
スバルは勿論止めようとした。しかし、封じられる。
「なっ！バインド！？」
「スバル、よく見ておきなさい」
「えっ！？なのはさん！」
桜色の怒り。

ラインハルトはこのとき、ティアナを守るべきか、そのままにしておくべきか迷った。
ラインハルトは人の心境を理解するのが苦手だった。その事もあり、対応が遅れたのだ。
怒りのかたまりは無抵抗のティアナへと直進していき、再び爆発を起こした。
「・・・ティアァァァ！」
スバルの絶叫が訓練場に飽和した。
だが、なのはは煙を凝視したあと、目を細めた。
煙がはれる。
「ラインハルトさま、あれを！」
キルヒアイスの指す方向をみると、ティアナは確かに倒れていた。が、それはショックによるものだろう。
そして、その倒れたティアナを守るような形で装甲の厚い同盟軍艦艇が盾のごとく整列していた。
全員が、振り向く。
そこには、頭を掻くヤンの姿があった。

続く

日記は今日もお休みです。

―やはりアンケートはある種の禁忌でしたね。
フェイト「アンケート？」
なのは「ほら、ラインハルトさんから聞いたじゃない。私が銀英伝キャラだと誰になるかって」
はやて「結局は、作者の偏見等から決定されるわけやな」
―はい。
全員「・・・・・・・・・・・・」
―まま、それはさておき、発表しましょう。先ずははやてさん！

はやて「ウチかいな!?」
―はやてさんは文句なしでヤン・ウェンリーでしょう。
はやて「おお!」
　はやての服が機動6課の佐官用制服ではなく、ヤンの着ていた軍服になる。黒い軍用ジャンパーにベレー帽、アイボリーホワイトのスラックスにハーフブーツである。
―全体的に地味な人にはよく似合う。
はやて「なんか言った?」
―いえ。ユリアンあたりにミウラを配置しましょう。次はフェイトさんです。
フェイト「私は誰ですか?」
―フェイトはラインハルトですねー。執務官服が黒に銀だし。金髪だし。
　フェイトの服が黒地に銀をあしらった帝国軍の軍服に変わる。肩には金モールがついており、大きなマントを翻していた。
―似合ってるよー。金髪には黒い服が似合うのかねぇ?
フェイト「えへへ・・・」
―最後はなのはさん!
なのは「私は誰なの?」
―迷いましたよー。ラップとかにしようかなーとも思った。でも主役だし。
なのは「ワクワク」
―長考の結果、これになりました!」
　なのはの服が帝国の装甲服にかわり、手にはレイジングハートの代わりに大きな戦斧が握られている。
―ミンチメーカーこと、オフレッサーです。
なのは「・・・・・・・・・・」
―なのはさんはミンチメーカーの名にふさわしい活躍を・・・あれ?なのはさ・・・ギャアアアア・・・」

願い、二人で　後編（後書き）

ご意見、ご質問、ご感想、お待ちしております。

大切なこと　前編（前書き）

今回はヤンさんが大活躍です。

大切なこと　前編

なのははヤンを凝視している。
静かで暴力的なその怒りの矛先はティアナではなくヤンに向けられていた。
「なんです？」
なのはがポツリと呟いた。フェイトが青ざめてヤンに言う。
「ヤンさん、不味いですよぉ・・・なのはあり得ないくらい起こってます」
「そんなこと言われても」
「ヤンさん、邪魔しないでください。これは私とティアナの問題ですので」
なのはのオーラが見えるとしたらきっとどす黒い靄となっているだろう。
フェイトは少しおどおどしたが、おどおどしているのが自分だけだと気づき、心を落ち着かせようとした。
「ヤンさんも、頭冷やす？」
ヤンは頭を掻いて答えた。
「いや、頭を冷やすのは君だと思うけど・・・」
次の瞬間、なのはの指先が煌めき、先程までヤンがいたポイントを桜色の光が抉った。
ヤンは間一髪、ラインハルトに空中へ引き上げられていた。
「こりゃ参った」
「何を呑気なこと言っているんだ。オーベルシュタイン、卿の撹乱魔法で高町を少し足止めしてくれ」
「御意」
すると、オーベルシュタインの瞳が点滅した。
「あれ？何も見えないの」
オーベルシュタインの使った魔法は相手を一時的に失明させるも

のだった。しかし、なのは程の魔導師ならすぐに視力を回復するだろう。
「キルヒアイス、来い！」
「はい、ラインハルトさま」
三人は数キロ離れた区画へと飛び去った。

暫くして、視力を回復したなのははおぞましい形相でエリアサーチを始めた。
それを見ていたキャロに念話が入る。
『キャロ、聞こえるか』
『シェーンコップ隊長。どうされました?』
シェーンコップの念話は察知されないように弱く発信されていたため、集中しないと聞き取れなかった。
『金髪の坊やから伝言だ。すぐに指定のポイントへ来てほしいらしい』
『超過勤務です。それには従いかねます』
『・・・お前最初はもっと素直だったぞ』
『ジョークですよ。わかりました。すぐ向かいます』
キャロはオーベルシュタインにもう一度撹乱魔法を使用してもい、怒り心頭のなのはを横目に見ながらフリードとヤン達がいる場所へと飛び立った。

その十数分後、再び撹乱魔法の呪縛から解き放たれた悪魔はヤンを探し始めた。
だが、先よりもそれは早く見つかった。
数キロ先にヤンの艦隊が浮遊していたのだ。
なのははそこへ向かう。
同盟艦隊は当然のように迎撃態勢をとった。
「邪魔なの！」
しかし、怒り心頭のなのはにはそれは只の障害物にしかすぎない。

障害物は破壊する。同盟艦隊は水をかけられたオブラートのようにぐずぐずと崩れていった。

だが、ヤンの艦隊はこれだけではない。

なのはは向こうに同じ規模の艦隊を発見した。あの艦隊を潰していけばヤンの所へ着くだろう。

艦隊を破壊する。そしてまた向こうで別の艦隊が布陣していた。

その終わりなき破壊を見守る影があった。

その存在はなのはが意識をそのまま左に向けたら簡単に見つけることが出来た。

数百メートル離れた地点のビルとビルの間に、ヤンはいた。

彼の右手にはデバイス「ヒューベリオン」が握られており、そして前にはヤンの身長の2．5倍程の大きさの銀色に輝く球体があった。

「ヒューベリオン、「雷神（トゥール）のハンマー」のエネルギーは？」

《現在、約99．993％。まもなく臨界です》

ヤンの一撃必殺とも言える大技「雷神（トゥール）のハンマー」のチャージがものの十数分で終わるわけがない。否、そもそも彼にそれほどの魔力はないし、疲れるのだ。

しかし、この不可能を可能にしたのがキャロのブーストである。

「ありがとうキャロ君。今度何かご馳走しよう」

「エリオ君もいいですか？」

「勿論」

ヤンは再び前に向き直る。ヤンに射撃の腕はないが、それについてはデバイスがやってくれる。

「本当は、あまり使いたくなかったのだが・・・」

ヒューベリオンがなのはを捕捉したことを伝えた。

当のなのはは気付かずに破壊のワンマンショーを繰り広げていた。

ヤンは空いた左腕を軽くあげて、振り下ろし様に静かに言った。

「撃て」

その瞬間、銀色の球体――イゼルローン要塞のミニチュアは一点

に魔力を集束させ、巨大な白い光の柱を吐き出した。
それに気づいたなのははとっさに対応した。
「ディバイン・バスター！」
白と桜色の光がぶつかるが、均衡を保ったのは０．１秒にも満たなかった。
圧倒的な力を誇る雷神（トゥール）のハンマーはすぐになのはを呑み込んだ。

光の柱が天に向かって伸びていく光景をみてラインハルトはヤンが勝ったことを悟った。
今にして思えば、ヤンとなのはの会話もこの作戦の一部だったのではと思う。
極限の興奮状態に陥ったなのはをマリオネットを操る人形師のように射線上へ誘い込んだのだ。
戦術にメンタルを持ち込むのは常識だが、ここまで鮮やかにやるとは。流石である。

見学組も遠くでとんでもなくすごい魔法が使われたことがわかった。
そして数秒開けてフェイトの元に通信が入った。
『ブランデーをたっぷり入れた紅茶を用意して下さい』
フェイトはハァ、と溜め息を一つついてティアナを医務室に送ったばかりのシャマルに念話で語りかけた。
『シャマル先生、患者がもう一人増えましたよ』

続く

機動６課日記
#月●日
最近変な噂を聞いた。ラインハルトさんは前の世界では皇帝をやっていたとか。で、キルヒアイスさんはラインハルトさんの執事だ

ったとか。
真偽を確かめるため、ラインハルトさんに聞いてみた。勿論オブラートに包んで。
だけどラインハルトさんは
「キルヒアイスは俺の親友だ。あいつがいなければ俺は只のダメ人間だからな」
といった。
でも、なんでキルヒアイスさんはラインハルトさんを「ラインハルトさま」と呼ぶのだろう。
謎だ。

久し振りにあの閉め言葉を。

時空の歴史が、また1ページ・・・

大切なこと　前編（後書き）

次回はラインハルト達とティアナです。

大切なこと　中編（前書き）

ちょっと遅くなりました。眠たいので所々やっつけですが、許してください。

大切なこと　中編

ゲンヤ・ナカジマ三佐は陸士１０８部隊の隊長、つまりヤン・ウェンリー直属の上司である。
彼は今ミッドチルダの中央区にある居酒屋の一室で若い女性とテーブルを挟んで向かい合っていた。
と言っても別に二人は愛人同士というわけではない。強いて言うなら先生と教え子だ。
「どうだ八神。ヤンは役にたっているか？」
「えぇ、いつもいろんなことを教えてもらってます」
はやての答えを聞いてゲンヤは愉快そうに笑った。
「あいつは、平時においては自分で名乗るほどの穀潰しだからな。役にたって嬉しいな」
ゲンヤは一頻り笑うと表情を硬めた。その様子から今から話されることがどの様なものかが予想できる。
「先ず、こいつを読んでくれ」とゲンヤはおもむろに内ポケットから一つの茶封筒を取り出してはやてに手渡した。
「今朝がた、ビュコック中将から預かったものだ。中身は見ていない」
はやてはビュコックの書いた文字を一字一句逃すことなく読み取っていった。そして、半ばまで読んだところで顔が強ばった。
「どうした？」
はやてにとってこの手紙に書かれていたことはかなりの衝撃だったが、何処かでやはり、と思っている自分がいた。
手紙の内容を極端に要約するとこうなる。
レジアス中将には十分注意すべし――。

目が覚めたとき、視界には清潔な空間が飛び込んできた。
「ここは・・・」

医務室だ。ということは、ここにはシャマル先生がいるはず。
そう考えたとき、図ったようなタイミングで医務室の主が出現した。
「あら、起きた？」
ティアナはシャマルに曖昧な返事を返し、備え付けの時計を見やった。
「えっ！？９時！？」
「よっぽど疲れが溜まっていたのね。余りにもぐっすり眠っていたから死んだのかと思ったわ」
その時何気無く自分の足元を見ると下着一丁で太股が露になっており、思わず赤面した。
「なのはちゃんの魔法ほ優秀だし、ヤンさんも護ってくれたから外傷はないと思うけど・・・取り合えず、後でヤンさんにお礼、しときなさいね」
シャマルがその様なことを話していると誰かがドアをノックした。
ノックした人物たちは返事を待たずに医務室に入ってきた。
「ラインハルトさんに、キルヒアイスさん・・・」
もう二人のことはよくわからなかったが、ラインハルト関連であることは十中八九間違いない。
「どうだい？調子は」
キルヒアイスが優しく話し掛ける。
「大丈夫です」
「ランスター、何故お前はそう無茶をするのだ？」
間髪入れずにラインハルトが問いてきたことにティアナは少し動揺した。
「何故って・・・」
ラインハルトが言う無茶は今回の模擬戦のことだけでなく、異常なまでの過密訓練のことも含まれる。
「・・・それは、フェイト隊長や、なのはさんのようになりたいからです」

ティアナは言う。自分みたいな凡人は多少の無茶をしなければなのはやフェイトみたいにはなれない。

しかし、その回答に同調するものは一人として居なかった。

ロイエンタールが言った。

「何故そう人の背中を追う」

「凡人は自らを高めるためには人の背中を追うしかないんです」

ティアナは今、非常にネガティブな精神状態にある。自己を過剰否定してしまうのだ。

しかしと、ラインハルトは言う。

「ランスターの才能を伸ばすポイントは、その魔導師としての素質だけではないぞ」

「それ、どう言うことですか」

「俺はランスターの戦闘を見学していたが、敵を自分に有利な状況へ誘い込むということは緻密な計算によるものだ。あれをほぼ完璧に成功される点においてはランスターは優秀な指揮官だ」

ティアナは少し黙り、思い出したかのように言った。

「指揮官としては、八神部隊長やヤンさんとかにはかないません」

ここで、意外な人物――オーベルシュタインが会話に介入した。

「八神部隊長は勝つための作戦を考えているのではない。負けない作戦を考えているのだ―ヤン・ウェンリーと同じくな。しかし、ランスターの作戦は勝つためのものだ。同列で考えてはならんと思うが」

ここでオーベルシュタインは周りのポカンとした顔を見て心なしか、頬を朱に染めたようだった。いや、思い込みだろう。

とにかく、とラインハルトが繋いだ。

「自分を信じることだ。人のことを追ってばかりでは出来ることも出来ないからな」

これだけ言うと、ラインハルト一行はシャマルに追い出されるようにその部屋を後にした。

ティアナは馬鹿ではない。だからラインハルトたちの言うことは

分かるが、それを認めたくないと少し思った。
そんな自分に嫌悪感を抱いた彼女は意味もなく壁を見つめていた。
仮にティアナに透視の能力があれば隣でヤンと対峙するなのはの姿を捉えることができたであろう。
「ヤンさん・・・」
これは呼び掛けというよりある種の糾弾であった。
「なんで、あのときティアナをかばったんです？」
なのはは極力平常心を保ちたかったが、思わず声が震えた。
「なんでと、言われても・・・」
またヤンのこの飄々とした感じも気にくわない。
しかし、今の彼女は何を見ても気にくわないというだろう。
「あれは、私の教導です」
「だが、部下に暴力は良くない。私は部下を殴る上司を多く見てきたが、そいつらは揃って無能だったよ」
「ティアナなら！わかってくれます」
なのはは後半の声が小さくなっていくのを知覚してしまったと思った。
「その根拠はないだろう。殴って何故殴られたかはあの年頃が一番わからないものだよ」
「だけど・・・！」
なのはにはもう反論材料はなかった。しかし、ついつい言葉を放ってしまう。
そんなときな、ヤンは言った。
「高町君、高町君」
ヤンは絶対に怒鳴ったりしない。
これは生前から同じで、師弟であり息子のユリアン・ミンツも怒鳴られたことはなかった。
しかし、ヤンも人間なため、怒ったり不機嫌になったりする。
そのときはいつもヤンはこう言っていた。「ユリアン、ユリアン」と。

「高町君は、もしもティアナの心に深い傷をつけていたら、どうする？これが原因で任務もままならなくなるかもしれないし、下手をしたら自ら命を絶ちかねない」

ヤンの言ったことはかなりショックだったらしい。よくあることなのだが、なのはは驚きのあまり目を大きく開いた。

「それでも君はあれが自分の教導だと言えるかい？」

なのはは言葉に窮した。そして、暫く考えたあと、なのはは恐る恐るヤンに聞いた。

「私、どうすればいいでしょうか？」

後生の管理局史に詳しい歴史家によると、ここを境に高町なのはの教導スタイルが少し変わったらしい。

「資料を読むと、私のマ・・・失礼。高町一佐、当時は一尉でしたが、ここの辺りを境に教導スタイルが『お話という名の修正』から正真正銘の『お話』に変わっています。会話は、日記を元に記していますが、ほぼ、完璧に再現できているでしょう。えぇ、こういうものは正確に書く主義らしいですよ」

続く

日記

#月§日

キャロから聞いた話だけど、ヤンさんがこんど何か奢ってくださるらしい。

シェーンコップ隊長は基本的に奢ってはくれないから食費が浮いてラッキーだ。

そういえば、なのはさんがヤンさんに負けたらしい。ますますヤンさんは何者だろう。

大切なこと　中編（後書き）

『後生の歴史家』はこれからもちょくちょく出てきます。
親が局員で、過去の事件にも深く関わったことがあるらしく、今は無限書庫付属大学で管理局、時空世界の歴史を研究しているそうです。
誰でしょうねぇ。

大切なこと　後編（前書き）

またちょっとたどたどしいかも。

大切なこと　後編

グリフィス・ロウランは八神はやての副官である。
少々融通の利かないところはあるが、はやてが不在の際は彼が代わりに指揮を執ることになる。優秀なのだ。
そのグリフィスに呼び出されたはやては急いで司令室に入った。
「臨海空港近海の上空にガジェット?型が３０機飛行しています。性能面でも、かなりの強化が加えられているようですね」
「こういうものは、ほっておくのが一番ええんやけどな」
「そういうわけにもいきません。空港から早急に対処されたしとの連絡が」
はやては軽く頭を掻いた。こういうところがヤンと似ている。
「しゃあない。隊長たちに、制空権を回復するように伝達してや」
完全な自立兵器には小細工は効かない。正面からガツンといくしかないのだ。
グリフィスがアラームのスイッチを押し、マイクに向かって命令伝達を行った。訓練通りうまく準備が済めば１，２分もあれば出撃可能となる。
あとは前線の仕事だった。

スターズ分隊と薔薇の騎士分隊、ラインハルト達にフェイトを加えた面々がヘリポートに終結していた。
「今回は空港近海の上空に展開するガジェットの殲滅が目的だね。空戦だから、私と、フェイト隊長、ヴィータ副隊長が上がる」
なのはは任務概要を説明した。
「それ以外は戦闘待機ね」
「そっちの指揮はシェーンコップ三佐とキルヒアイスだ」
ヴィータが言うとなのはがティアナをちらと見た。
「ティアナ、今日は待機から外れとこうか」

その時ティアナとの目が見開かれ、なんとも言えない感情を顕にした。

そして、その変化を感じ取ったなのはは付け足すように言う。

「あ、ティアナは体力、魔力共々まだ完全じゃないから―」

「言うこと聞かない奴は・・・」

なのはの話の途中で急に割り込んだティアナに全員の視線が集中した。

「言うこと聞かない奴は、使えないって、ことですか」

一瞬、その場が凍りついたかのように硬直し、それが溶けたとき、なのはは眉をしかめながら「自分でいっててわからない？それ、当たり前のことだよ」と諭すように言った。しかし、ティアナには通じない。

「現場での指示や命令は聞いています・・・まぁ、ホテルでの件はあれでしたけど・・・教導だって、ちゃんとサボらずやってます！」

一瞬力を無くしたものの、再び声を張り上げるティアナの顔には悲しみと言うか、恐れと言うか、とにかくやはりなんとも言えない表情が張り付いていた。

そんなティアナに見かねたヴィータがティアナにつかみかかろうとする―が、なのはに防がれてしまう。

視界の隅で行われたその行動に気づくこともなくティアナは更に続けた。

「私は、なのはさんみたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能もなければキャロみたいなレアスキルもない。そしたら、死ぬほど努力して、強くなるしかないじゃないですかッ！？」

一人叫び続けていたティアナの語尾が上がったのは、彼女がシグナムに胸ぐらをつかみあげられたからである。

怒りを顕にしたシグナムは拳をあげ、ティアナへ修正を加えようとした。

殴られる、そう思ったティアナだったが、覚悟していた衝撃や痛みは訪れなかった。

恐る恐る目を開けると、そこには振り上げた拳をガッチリと掴むラインハルトの姿があった。その姿は、古代ローマの芸術を連想させるほど美しく、神々しいものであった。

「・・ローエングラム、なんのつもりだ」

ラインハルトはなにも言わない。というより、言える立場ではなかった。

元帥だった頃や皇帝だった時はいざ知らず、今はたかだか三等空尉。今のラインハルトに残された選択肢ほ謝るぐらいしかない。

仕方なく、掴んでいた手を離し、心のこもらない謝罪の辞を述べようとしたのだが、ここで思わぬ助け船が入った。

「待ってください」

そういう声が聞こえた。その方に目をやると、キルヒアイスが堂々とした足取りで此方へと向かってきた。

「ローエングラム三尉に貴官の暴挙を止めるよう指示したのは私です」

「キルヒアイス・・・一尉」

シグナムは何かを言おうとした。しかし、キルヒアイスが先手を打つ。

「部下に手をあげるなというのは八神部隊長から厳命されているはずです。このような場所で、主人の期待に背くものではないですよ」

最後の言葉がシグナムにはかなり効いたようで、彼女はうつむき加減で引き下がった。

キルヒアイスはなのはに一礼してラインハルトと共に下がった。

「すまない、キルヒアイス。またお前に助けられた」

ラインハルトが小声でお礼を言うと、キルヒアイスも先程とはうって代わり口許に微笑を浮かべ、ラインハルトの行動の感想を言った。

「ラインハルトさまは少し変わられましたね」

「何がだ?」

「私はラインハルトさまがあそこでシグナム二尉の修正を止めると

は思いもしませんでした」
　振り返ってみると自分でも何故あのようなことをしたのかわかなかった。
「そうだな・・・まぁ、何となくだ」
　そんなやり取りを見ながらオーベルシュタインは言う。
「カイザーも変わられた。昔ならあのようなところへ介入したりしなかった」
　それに対しロイエンタールは言う。
「俺としては、冷酷無比な軍務尚書がランスターを優しく諭したことの方が意外だった――いや、最早不気味であった」
「なんだと。卿に言われるとは心外ですな」
「そのようなことを言うな。明日の休みは卿のいきたいところへ連れていかんぞ」
「・・・・・」
　ロイエンタールは黙ったオーベルシュタインから目を離し、なのはの方を見た。
　何かを叫んでいたが、ヘリのローターにかき消されてこちらまで聞こえなかった。

　キルヒアイスとシェーンコップの提案で、シャーリーことシャリオになのはの過去と教導について話してもらうことにした。
　見せられたのは数字の羅列とも言えるデータだったが、シャーリーの語りが上手いのか、ティアナ達だけでなく、ラインハルトの心にも強く心に刻み込まれた。
　なのはの過去、重傷をおい、生死の境を行き来したこと。教導の意味・・・。
「・・・なのはさんはね、みんなに同じ目に逢ってほしくないんだよ。だから一生懸命、本当一生懸命に教導してるんだよ・・・」
　話しはそう締められた。
　ティアナはこの話しを聞いて己の未熟を恥じた。

ホテルでの事、訓練での事。あれは誰のためのものだったのか。結局、自分のことしか考えていなかったではないか！

この時、はじめてティアナはなのはに謝ろうと思った。

ラインハルトとキルヒアイスが隊舎の外を散歩していると、見慣れた三つの人影が垣根の陰に身を潜めていた。

「・・・薔薇の騎士ともあろうものが何をしているのだ」

声をかけられたシェーンコップとエリオ、キャロは振り替えるとシーッと黙るように警告してきた。

なんだと思ったラインハルトが三人の視線の先を見ると、そこには漆黒に染まった海を眺めるティアナの姿があった。

そこに、缶コーヒーを二つ持ったなのはが近づいてきて、なにも言わずに隣に座る。

暫く沈黙が続いたが、なのはがコーヒーの蓋を開け、話しを切り出した。

「私ね、ヤンさんに怒られちゃったの」

掌でコーヒーを弄んでいたティアナが「えっ？」となのはの顔を見る。

「私、取り乱しちゃって、ティアナに砲撃しちゃったでしょ。その事」

「でも、あれは・・・」

ティアナは私のせい、と言おうとしてやめた。なのはの話の邪魔になると思ったのだ。

「ティアナは賢いから、こうやれば分かるだろうと思ったんだけど・・・わかってないのは私だったよ」

なのははティアナの方を見ると「ごめん！」と謝ってきた。

「えっ、あ！？わ、わたしこそ、ご免なさい・・・」

そういうと、なのはは思い出したこのようなリアクションを見せ、急にティアナのクロスミラージュに何かしらのパスワードを吹きこんだ。

「ティアナは、執務官志望だったね」
なのははティアナに指示を出すように言う。ティアナがその通りにすると、クロスミラージュは瞬間、オレンジの光を放ち、ダガーへと変形した。
「えっ？」
「執務官になるとそういう任務もたくさんこなさなくちゃいけなくなるからね」
ふと気付くと、ティアナの目に涙が溜まっていた。
なのはさんは、自分のことを、考えてくれていたんだ・・・。
「これはもう少し後で教えようと思ってたんだけど――」
なのはが言い終わる前に、ティアナは彼女の体に顔を埋め、謝罪の言葉を吐きまくっていた。
「ご免なさい！ご免なさい！ご免なさい・・・」
泣きじゃくるティアナに初めは驚いたが、直ぐに慰めてくれた。
「ほらほら、明日の休みはスバルと出掛けるんでしょ？泣いてたらスバル、心配するよ」
なのははティアナのコーヒーの蓋を開け、ティアナに手渡した。
まだしゃくりあげるティアナは、ヒックヒック言いながらコーヒーを口に含んだ。
「苦・・・」
しかし、その苦さも今は心地いいものだった。

因みにこのあと、覗き見をしていた五人はなのはからお説教をうけた。

続く

今回は日記無しです。

次回、前々から書きたかった休日のお話。

機動６課の休日　前編（前書き）

ほのぼの系ですが、これから激動していくわけです。

機動６課の休日　前編

歴史は、この日にかなり動いたと言えるらしい。
「この事件は管理局、聖王教会等の思惑や陰謀が強く絡まり発生したものです。書く言う私も、その副産物ではあるのですが・・・。とにかく、自分で言うのもアレですが、私のことを先に見つけたのが６課であったことはこの先かなり優位に働いたことでしょう。いわば、ここが歴史の分岐点だった訳です」

休日。それは日常における縛りから解放される自由の日。
ラインハルトもその休日を消費する権利のある人物の一人で、ここに来てからまだまともに街を観察したことが無かったこともあり、るるぶを読み、キルヒアイス辺りと街へ繰り出そうかと考えていた。
前々からミッドチルダの経済状況や社会について情報がほしかったし、ちょうど旨いフリカッセの店もあるらしかった。
しかし、断られてしまった。
「申し訳ございません。今日はなのはさんと明日からの訓練についてミーティングがあるのです」
言われてみれば、隊長達は今日は普通に勤務日だった。
地理的なこともあり、誰かと出掛けたかったのだが、ＦＷの面々は既に街へ出ており、ロイエンタールとオーベルシュタインも何処かへと行ってしまって誰もいない。
少しふてくされて、気が付けばロビーをうろうろしており、そんな自分が少しおかしかった。
「銀河帝国皇帝ともあろうものが、情けない」
年甲斐もなくはしゃいでいるとでもいうのだろうか？

「それも、悪くないかもな」
これまで肉体や精神を酷使してきたのだ。このような精神的休養も必要だろう。
ラインハルトはここに来て、肉体的にも、精神的にも若返っていた。
しかし、何かが違う、とも考えていたのだった。

心配性のフェイトから脱出し、エリオとキャロはようやく電車に乗り込めた。
窓の外に広がる風景は秩序的に起立したビルの群れで、地方出身の二人にとって心踊るものがあった。
「すごい都会だね・・・」
「うん」
エリオは暫くビルの群れに見とれていたが、キャロに声をかけられ、そちらを向いた。
手には鉛筆と大学ノートがある。
「なにそれ？」
「私ね、ちょっと絵を描いてるんだけど、ここに来てエリオ君の絵をまだ書いてなかったなーって思い出して」
エリオはキャロにノートを見せてもらった。
人物画から風景画、スケッチ等それは多種に及んだ。
人物画は6課メンバーを描いており、中でもデフォルメされたなのはが怪しいオーラをまとっているのには変に納得してしまい、思わず吹き出した。
「上手いもんだね」
キャロはえへへと笑い、エリオからノートを受け取る。
鉛筆が走り始めた。
それは縦に動き、横に動き、はらったり、擦ったりと見ていて飽きることはない。
絵は駅につく数分前に完成した。

「出来た！」
エリオはひょいっとキャロの手からノートを取り上げた。
「あっ！勝手にとってかないでよう」
クレームをつけるキャロを尻目にノートに描かれた自分を見てみる。
それは、プロの目から見ても十分なものだった。しかし、客観的に見れないエリオには「上手な絵」としか捉えることが出来ない。
絵の中の自分はやや緊張していた。
「僕こんな緊張してたかなぁ」
「してたよ。カッチカチよ、カッチカチ」
そう言って二人で笑ううちに目的地へ到着した。
とにかく、初めての休日だ。しっかり楽しまなくてはならない。

その頃機動６課隊舎では、ラインハルトとヤンご何故か並んで歩いていた。
そこへ、キルヒアイスが通りかかる。
「あっ、ラインハルトさま。ヤンて・・・三尉も。どうされました？」
「いや、何故かヤン・ウェンリーと出かけることになった」
「暇人同士、くっついた訳です」
キルヒアイスはなるほど、と言って少し笑った。
「何がおかしいのだキルヒアイス？」
「いえ、ラインハルトさまが、私や、アンネローゼさま以外の方とお出かけになさるなどとは珍しいと思いまして」
ラインハルトはそうか？と聞き返し、行ってくると言った。
「てはヤン三尉、ラインハルトさまを、お願いします」
ヤンはラインハルトの後について歩きながら片手を上げた。
キルヒアイスにとって元々体質的に敵を作りやすいラインハルトが自分以外と親睦を深めることは喜ばしいことであった。
ここへ来てやはり変わられた。

しかし、キルヒアイスもラインハルトの根本とも言える何かが抜け落ちているような気がしてならなかった。

ティアナとスバルは近くの屋台でアイスを買い、公園のベンチに腰を下ろしていた。

「いっただっきまーす！」

ティアナの数倍の数及ぶアイスの塊のひとつをスバルは一口で食べ、幸せそうな声を上げた。見ているこっちが頭キーンとなる。

「スバル、これからどこ行く？」

「ゲーセンいこうよ、ゲーセン！」

これにはティアナも賛成だった。シューティングゲームに自分の銃撃か通用するかどうか気になる。

そんなことを考えていると、向こうから軽やかな楽器の音色と人々の祈りの声が聞こえてきた。

「なにあれ？チンドン屋？」

「バカ、違うわよ・・・あれは、ベルカ新教の信者ね」

スバルは再び口一杯にアイスを詰め込み、口をモゴモゴさせながら聞いてきた。

「なにそれ？」

「あんたそんなのも知らないの？聖王教会の組織の一つで、全ての人はベルカの地を信仰すべきだと言う集団で――ちょっと過激な人達ね」

ティアナはその行列を眺めながら、近い将来何かしらやらかすかもしれない人々を一人一人眺めていった。

この予言めいたものは後に実現するのだが、その事を知るものはまだほんの一握りしかいない。

日記は次回まとめます。

機動６課の休日　前編（後書き）

キャロのオリジナル設定は薔薇の騎士連隊のあの方を意識しています。

そいで次回は最近ちょこちょこ出ているあの子が登場する予定です。

期待せずにお待ちください。

機動6課の休日　後編

トンネル内部には横転したトラックの残骸や積み荷が散乱していた。
ギンガ・ナカジマ陸曹はそこへ現場検証の手伝いとして派遣された女性である。
「状況は？」
「運転手は怪我も無く、現在、事情聴取を行っているのですが・・・」
ギンガが鑑識の歯切れの悪さに気付いた。
「なにか、あったのですか？」
「運転手が錯乱状態でして・・・先程からなにかを呟いているのですが、全く聞き取れません」
彼女はふうん、と頷き、その運転手との面会を求めた。
運転手は地面に座り込み、警邏から事情聴取を受けている最中だった。その目は虚ろで、人間の尊厳を失ったようにも見える。
ギンガが警邏に代わり質問を行おうとした。が、しかし、運転手は唐突に雄叫びを上げたと思うと口をモゴモゴさせ始めた。
周りの警邏や鑑識はすっとんきょうな顔をしていたが、ギンガだけがその状況が理解できた。
ギンガが運転手の口に直接手を突っ込む。
「毒だわ！吐きなさいッ！」
周りが騒然となるが所詮はそれたけであり、結局運転手は白目を剥いて絶命した。
「これでは何もわからない・・・」
しかし、女神の残照が少ない証拠品の一つを残してくれた。
「陸曹！こちらへ」
呼ばれた所へ行ってみると明らかに通常の荷物とは一線を逸した残骸が一つ転がっている。

「これは・・・生体ポッド？」
勿論、それが誕生したその瞬間から残骸であったわけではない。
恐らく中には何かが入っていただろう。
ふと横を見ると、そこはなにかを引きずったような痕があった。
まだ新しい。
その後をたどれば、真実に出会うことが出来るだろうか。

ジェイル・スカリエッティは特に何かするでもなく専用の椅子に腰を下ろしていた。
『ドクター』
通信が入り、画面には美しい女性の顔が映った。
『秘匿回線で通信が入っています』
「どこからだい？」
『聖王教会から』
スカリエッティは繋いでおくれ、と指示を出し、口元に笑みを浮かべた。
画面に先程とはうって代わり男の顔が映るが、極端に暗いため顔が読み取れない。
「これはこれは大主教倪下。どうされましたか？」
『いやな、部下の失態で我々の財産が外へと漏れ出してしまった。そこで、スカリエッティ殿に力を貸していただきい』
スカリエッティの目が怪しく光る。
「ほう！？財産とは」
『聖王女オリヴィエのクローン・・・とでも言うておこうか』
聖王女オリヴィエ！ベルカの時代を生き、没後数百年経った今もなお支持を受けている女性。最後のゆりかごの聖王！そのような女性のクローンとは・・・
『今はまだ6歳のこどもだがな。確保してくれた暁にはそのクローンと共にあるレリックを貴君にくれてやろう。悪い商談ではあるまいて』

スカリエッティは顔が綻ぶのを堪えるのに必死だった。
断る理由はない。これで娘達の仕事もふえるだろう。
「わかりました。お受けいたしましょう」
恭しく頭を下げる。そこでスカリエッティはなにか思い出したような顔をした。
『どうした？』
「いえ、無礼ながら、私からもお願いをさせていただきたく」
『なんだ？申してみよ』
スカリエッティは女性――ウーノというが、彼女に指示を出した。
これで大主教の画面には二人の人物の写真が映ったはずだ。
『これは・・・』
「次元航行艦隊提督、クロノ・ハラオウンと機動６課部隊長、八神はやて・・・」
大主教は恐らく首をかしげていることだろう。
『このもの達がどうした』
「この二人を・・・」
そこまでいって、大主教は少しだけ笑った。何が望みか理解したのだろう。
「この二人を、今すぐでなくても構いません。我々の邪魔をしないようにしていただきたく思います」

ラインハルトとヤンは首都図書館にいた。
ラインハルトも読書は好きである。昔もキルヒアイスと共に物語の世界を駆け巡ったものだ。
しかし、彼は思う。ヤン・ウェンリーの読書量は異常である。特に歴史、戦史においては。
「そのように過去のことばかり調べて何になるのだ？」
これは決してラインハルトが歴史を軽視しているというわけではない。先人から学ぶことも多くある。
「うーん、何になる、と聞かれると返答に困るなぁ」

暫し考えたあと、ヤンは言った。
「過去に生きた人は自分達がやってきたことを記録として見ることはできない。だけど、私たちにはそれができる。私はただ、この贅沢な権利を行使しているにしか過ぎないよ」
そう言った後「好きなこともあるけどね」とつけたし再び本に目をおとした。
ラインハルトがハァ、とため息をつく。
すると、首にかけているペンダント――デバイスのブリュンヒルトがぼんやりとした輝きを放った。
「通信・・・？」

『サードアベインF　23区画の裏路地で小さな女の子を発見しました！レリックケースを所持しています。指示を願います！』
部隊長室で惰眠を貪っていたはやては緊急通信のけたましいアラームがなった瞬間思わず飲んでいた紅茶を吹き出してしまった。
結構高いやつだったのに、と思いながら通信を受けたところ、仮面に現れたキャロに先のことを言われたのだ。
「今はどうしてる？」
『ビタミン剤注射を打って寝かしてあります』
ということは衰弱していたのだろうか。迷子？いや、レリックケースを持っていたのだ。そんな日常的に起きていそうな問題ではあるまい。
「わかった。そこで周辺を警戒しつつ待機！」
『了解！』
先程までの画面が消えるとはやては新しく三つの画面を出現させた。
「高町一尉、キルヒアイス一尉、シェーンコップ三佐」
呼び掛けにたいして三人は各々返事する。
「緊急事態や。各隊員に終結命令を出すように。それと、キルヒアイス一尉はヴィータ三尉、ハラオウン執務官と共に海上哨戒に出て

くれ。高町一尉も場合によっては海上へと向かってもらう」
『了解！』
画面が消えると、上着をはおり、彼女は己の仕事場へと向かった。

キャロの通信を聞けばこの休日がこれで終わりだと言うことがすぐにわかった。
案の定、キルヒアイスから連絡が入る。
「どうせ休日が潰れるのだろう」
『はい』
はっきり言ってラインハルトにとって休日など無くてもよいものだった。彼が求めているのは休養ではない。
『ラインハルトさま、何処と無く張り切っていらっしゃいますね』
「どうしてそう思う？」
『イキイキしておいでです』
「私は残念だがね」
ヤンがボソッと入り込んできた。
ヤンがどう言おうとラインハルトは確かに元気になっていた。
やはり彼は戦いを求めるのだろうか・・・しかし、それも違うだろう。

日記
§月∀日
疲れた！今回は模擬戦とかとは比べ物にならないほどに疲れた。
少し怪我もしたし。
でも、一応任務は達成できた。良かった。

機動６課の休日　後編（後書き）

眠いよー

対ガジェット戦、再び　前編（前書き）

前話を読み返したら文章が腐ってまして、ワオ！ですわ。
そして今回も保証できない。
そんな自分がイヤ。

対ガジェット戦、再び　前編

サードアベインＦ　２３区画裏路地にはなのはとフェイト以外の機動６課戦力のほぼ全てが終結していた。

例の子供は６、７歳と見られ、くすんだ金髪は汚れの所為で余計にくすんでいる。

その子供の簡単な診断を終えたシャマルは驚くべきことを口にする。

それを聞いた全員が驚きの声をあげた。

「人工生命体・・・？」

「服からは細胞を組織するための物質が検知されたし、さっきあったナカジマ陸曹からの連絡でも生体ポッドの残骸があったとも聞いてるし」

ラインハルトのもといた世界――その中でもゴールデンバウム王朝時代にも、人造人間の噂は耳にしていた。

勿論、噂の範疇は出なかったが、不愉快な話だった。

その不愉快な冗談がこの世界では冗談ではなく現実として目の前に存在しているのだ。信じられない。

「このようなことは日常的に行われているのか？」

ラインハルトは自分より遥かにこの世界の事情に詳しいキルヒアイスに質問した。

「人造魔導師は管理局法で禁止されています。ですが、それを掻い潜ってやる人が、いるのです」

成程。人は違法なことをやりたがるものだ。

その時、全体通信が入った。

『こちらロングアーチ。皆聞こえる？』

はやてからのものであった。

『これからＦＷの皆には地下水路に取り残されていると思われるレリックの回収に向かってもらう。ロイエンタールさんとオーベルシ

ユタイン・・・君?はシャマル達と同行な』
「ガジェットは?」
『まだ反応はない。遭遇したら撃破、又は捕獲すること。前線指揮はティアナとラインハルトさんな』
ラインハルトが指揮を任せられるのは思えば順当な流れである。
何しろＦＷの中では一番階級が上なのだ。
『それじゃ、後はよろしく』
そう言い残しはやての画像は姿を消した。

地下水路はクラナガン全域に張り巡らされている。
上水道と下水道とは違い、雨水を流すものだ。
しかし、お世辞にも計画的に建設された訳ではないため地下水路を完全に網羅する人物は恐らく存在しない。その為、犯罪者の温床ともなりうるのだ。
そのくらい通路を五人の人影が走っている。
先頭は黒に銀をあしらった軍服に白いマントを羽織った豪奢な金髪の男、ラインハルト・フォン・ローエングラムである。
その姿は見るものを圧倒する何かがあった。
「キャロ、レリックの反応はあるか?」
彼の声は芸術的で偉大な響きをもってキャロの鼓膜を叩いた。
「ありません・・・あっ!でも何かがこちらに向かってきています!」
報告を受けると全員が自然と壁を背にした密集体形をとった。
近づくその反応に緊張の汗を流す。しかし、それは杞憂であった。
水路を挟んで向かいの壁が吹き飛ぶ。全員が迎撃体制をとった。
そして、すぐにそれを解除した。
目の前に現れたのはスバルとよく似た女性だった。
「ギン姉!」
「スバル、元気してた?」
ラインハルトはすぐに二人が姉妹であることを悟った。恐らく、

いや確実にスバルが妹だろう。
「ギンガさん、お久しぶりです」
「ティアナも久しぶり・・・この人が、噂のローエングラム三尉？」
「はい、そうです」
ギンガは暫く呆然としてラインハルトを凝視していたが、ハッとして敬礼の体勢をとった。
「ギンガ・ナカジマ陸曹です！よろしくお願い致します」
「ラインハルト・フォン・ローエングラムだ。よろしく頼む」
ラインハルトも返答し、スバルは久々の姉との再会にはしゃいでいる。しかし。
「喜びを分かち合うのもそれくらいにしてくださいね。敵です！」
ギンガを含めたＦＷメンバーに緊張が走る。心地よい緊張だ。
ラインハルトはこの状況を内心喜んでいた。壮大な艦隊戦でもないが、再び指揮をして戦うことが出来るのだ。
ラインハルトはやはり、戦いにおいて溌剌とする人間なのだ。

敵の出現はなにも地下水路に限ったことではない。
「海上方面にガジェット？型１２機編隊が５つ出現！」
これは今までに無い数である。
グリフィスが言う。
「多いですね。一体何が・・・」
「囮やな」
司令室の全員が「えっ？」と振り返る。
「あれは大規模な生け贄集団や。本命は別に居る」
グリフィスは問う。「根拠は？」
「奴等の本命はたぶん地下水路のレリックとヘリのレリックや。地下水路へ行くなら？型か？型、ヘリ相手なら空中に静止できる？型が最適なはず。強力な空戦魔導師をおびき寄せるための手段としか思えへん」
「では、隊長達は市街へ？」

「いや、このまま暫く海上におってもらう。私が準備できたら上がるから。それまで」
そこへ会話を遮るように、通信が入った。
『こちらヴィータ。別の部隊の訓練中だったけどナカジマ三佐から許可もらった。どうすればいい』
「せやな、リインと合流して、指定のポイントへ向かってくれ」
『わかった』
通信が切れ、ヴィータがいるならＦＷの子達も大丈夫、と思い、準備のため司令室を出ようとしたとき、妙な違和感に襲われた。
囮・・・いや、それは間違いない。しかしレリック２つのためにあれほどの大部隊を動かすか？
もしかするとレリックなぞよりもっと有益なものがあるのではないか？
はやてにはわからなかった。
ヤンさんなら、わかるのだろうか・・・。
ついそう思ってしまった。

「敵を角に追い込め！狭いこの空間を有効活用しろ」
地下水路には様々な場所に余裕を持った空間がある。
ラインハルトの作戦は敵をその空間へ誘い、動きを封じ込めることだった。
「スバル、ギンガ！突出しすぎだ！戻れ」
「はい！」
「了解！」
味方への指示だけでなくミニ艦隊への命令も行う。
「左翼、一斉射。ファイエル！」
一つ一つは細い魔力光線も束になり、？型のＡＭＦ、装甲を簡単に貫いていく。
周りの面々もラインハルトの威厳というか指揮能力に驚いていた。
以前、ヤンと艦隊戦を演じたときは観客として眺めたため実感が

沸かなかったが、指揮されてみるとそれがよくわかった。
しかし、この戦いの優位はラインハルトの指揮能力だけで賄われてはいない。
ティアナも功労者だ。ラインハルトの命令を確実にこなせるように更に指示を出す。
魔法戦はどうしても個人の能力が重要視される。それに対し機動６課は集団戦、戦術を観点においた戦いをする。その様な戦いにまだ完全に馴染んでいないメンバーをティアナが導いているのだ。
「こちらスターズ３制圧完了」
「こちらローゼン３、４制圧完了」
取り合えず、一段落ついたようである。

∀月％日
ラインハルトさん。あの人は一体なんなのだろう。あの人が三尉!?嘘だ。きっと前の世界では提督とかだったに違いない。
一体なんなのだろうといえば最近のフェイトさんも変だ。心ここにあらず、というか。僕の顔を見ては何かを思いだし一人で盛り上がってる。こういっちゃなんだが、
少し気持ち悪い・・・。

対ガジェット戦、再び　前編（後書き）

エリオはこの後キャロにフェイトがへんな理由を聞いたら鼻で笑われたそうな。そんなのもわかんねーの？これだから男は、という思いがあの笑から伝わったそうな。

対ガジェット戦、再び　後編（前書き）

タイトルと内容が意外と違いました。すいません。

対ガジェット戦、再び　後編

ミッドチルダの首都クラナガン。その上空を三人の魔導師が駆ける。

三人の直下では市民たちがいつもと変わらない日常を何の感慨も無しに過ごしているだろう。そして、三人の魔導師が何をしに、どこへ行くかなぞ気にもしない。日常のなかに潜む非日常は意識せずとも彼らの脳が自動的に日常としてしまう。

それは暗に治安がそれほどよろしくないことを示唆している。危険に馴れてしまうと感覚が鈍るため、真に危険なことを判断できなくなるのだ。平和ボケと同じである。いかに管理局が全力をあげて市民の生活と生命を守ろうともここの人々はそこには目を向けずに管理局を金喰い虫と呼び、批判するのだ。

後に三人の魔導師の内の一人、高町なのはこのような人々を守る意味はあるのか、という部下の問いにこう答えた。

「私達の使命は、市民の皆さんが安心して私達を金喰い虫呼ばわりできる世界を守ることだよ」

治安があまり良くない現時点においてはまだ使命を達成できてはいないだろう。

三人の魔導師は今海へと向かっている。

赤、桃色、金に近い黄色と鮮やかな魔力光の糸を引くそれは流星にも見える。

「FWのみんな、一寸は頼れるようになってきた？」

フェイトは横を飛ぶキルヒアイスとなのはに問いかけた。

「いや、まだまだ頼れるようになってもらいませんと」

「もっとしごいていかなきゃね！」

素敵な笑顔でそんなことを言うなのはは見なかったことにして、フェイトはキルヒアイスに話し掛けた。

「あの、キルヒアイスさん」
「どうされました？」
フェイトはこちらを向いたキルヒアイスの顔を見て頬を軽く紅潮させた。魔力光がなければ不審がられていただろう。
「今度、ちゃんとお休みあげなきゃね」
フェイトは素晴らしいタイミングで話に入ってきたなのはに軽く感謝する。
「皆で出掛けるときっと楽しいよ。ね、キルヒアイスさん！？」
「同感です」
キルヒアイスは微笑しながら返事を返すと前を向いて仕事をする顔へと変えた。フェイトもそれに習う。
とにかく、今は与えられた任務をこなさなければならない。地上でも皆頑張っているのだから。

隊長達が空を駆けている頃、隊員達は暗い地下水路を目標物を探しながら歩いていた。
保護した少女の歩いてきたであろうルートを限定して探すというギンガ発案の捜索方法は確実な成果を出した。
黒光りするケースは地下水路の中でも圧倒的な広さを誇る空間にあった。
「ありましたぁー！」
キャロの歓声は水路に木霊し、広い空間を満たしていった。
歓声に反応して他のメンバーも集まった。
「これで任務も達成した。撤収する」
ラインハルトの指示に従い各々が撤収準備に取りかかる。
キャロは早速レリックの封印作業に取りかかった。しかし。
この空間を支える太い柱を利用して何者かが彼女に俊足で迫ってきた。
『影』は腕に装着されている鋭利な爪をかざし、つき出す。
「うわっ！？」

伊達に破滅的な訓練を重ねているわけではない。直前で気付いたキャロはなんとかそれを避けた。が、レリックケースを手放してしまう。

バランスを崩し、水へ倒れる。

「キャロ、どうかした!?」

向こうからエリオの声が聞こえてくる。

「なんか妙なのに襲われてるのッ!」

『影』はレリックケースを手にするとキャロの息の根を止めようとしてか再び爪をつきだしてきた。

スピードもあり、当たればバリアジャケットなぞ容易く貫くであろうが、動きが速さを重視しているためか直線的である。相手の位置さえつかめばギリギリではあるが避けることができた。

「きゃあっ!?」

だが、相手の速さは尋常ではなかった。ついには完全に避けきれなくなり衝撃波で軽く吹き飛ばされた。

「!」

そこへやはり『影』は攻撃を仕掛けてきた。

キャロは自分の体が貫かれる様を想像して戦慄した。しかし、それはあくまで想像上のことだけに終わった。

「キャロォォォ!」

エリオがこれもまたあり得ないスピードでやって来て『影』を弾き飛ばした。

「お待たせ!」

「遅いよ」

それに続いてラインハルトの艦隊も全速力で二人の1メートル頭上をパスしていく。

「二人を防御する形に整列しろ。装甲の堅い艦を前面に、砲撃艦はそれを盾にする形で砲撃態勢を形成せよ!」

帝国艦隊は『影』へと魔力光線を立て続けに放つ。

魔力光線は近くのコンクリートに当たり、火花を散らした。そこ

で、ティアナがあることに気付く。
光に照らし出された『影』の手にはレリックケースは既になかったのだ。
急いで首を巡らす。すると、向こうをエリオとキャロと同年代とおぼしき少女がレリックケースを抱えて水を掻き分けるように歩いていた。
スバルもそれに気づき、少女を咎める。
「ちょっと！それは危ない物なんだよ！此方に渡してー」
呑気な調子のスバルを少し立ち止まってちらと見やった少女はレリックケースを渡すそぶりすら見せず再び歩き始めた。
しかし、その足はまた直ぐに停止した。
ティアナのオレンジ色の魔力刀が少女の首に当てられる。
「それ、ホントに危ない物なのよ。此方に渡しなさい」
乱暴だが、仕方がない。非殺傷設定は解除してある。いざというときは少女の頸動脈を切断することになるだろう。
少女の顔がこちらを向いた。その瞳は暗く、何かを探し求めているような目だった。

ガジェット?型の猛攻は三人の体力を急激に消耗していった。
いくらエース級が三人揃っても数で押されれば限界が来る。何事も最後は物量的に余裕がある方が勝つのだ。
「きりがないよ・・・！」
なのははその苛立ちをエネルギーにしてガジェットを潰していっているが、顔には疲労の色が浮かんでいた。
「しかし、確実に数は減っています。もうひと踏ん張りです」
キルヒアイスはなのはとフェイトを鼓舞したが、本人も限界が近いことがわかっていた。
それでも　ミサイルとその爆発が奏でる狂気の狂騒曲はゆっくりとではあるが、最終楽章へと近づいていた。ただ、それまでに奏者の体力と気力が維持できるかが問題である。

それを嘲笑うかのように見下ろす女の影が三人のさらに上空にあった。

彼女はまさしくこの狂騒曲の作曲者であり指揮者である。その手にはペンも指揮棒もないが、彼女は楽譜を気分で、より自分好みに改編することができる力を持っていた。

女の口角が上がった。

「フフフ・・・」

思わず口から笑いが漏れる。今回もまた完璧な作戦となり得た。

彼女にとって現場での作戦構想をたてることは芸術を生み出すことに等しい。

彼女手は指揮棒であり、楽譜に走るペンであり、白いキャンバスを自分色に染める筆でもあるのだ。

「クアットロのＩＳ、シルバーカーテン・・・。嘘と幻のイリュージョンで回ってもらいましょう」

曲だけではつまらない。そこにイリュージョンと踊りを加えればきっと素敵なショーになる。

ドクターも、きっと喜んでくれるだろう。

対ガジェット戦、再び　後編（後書き）

何かを忘れてる、と思ったら日記ですね。

六課の戦い（前書き）

うん？あーん？

六課の戦い

ロングアーチの司令室では驚きと戸惑いを孕んだ報告がなされていた。
「ガジェット?型の数が増えていきます!?」
「何?」
はやてが不在の司令室で指揮というより的確な処理を行っていたグリフィスは椅子から立ち上がった
確かに、残り十数機まで減っていたはずのガジェットがモニターの中で増殖していた。
「幻術か?データ解析を」
普通の幻術であればここのコンピューターが自動的に判別してくれるはずだが、その網を潜り抜ける程の高度な幻術を使う魔導師ということになる。グリフィスは背中に冷たいものを感じながら指揮を執るのだった。

敵が急に増えたことに戦慄したのはなにも司令室の面々だけではない。
「幻術と実機の混成部隊?」
フェイトは的を射た推測を行った。
「このまま放っておくのは得策とは言えませんね」
キルヒアイスも呆れてため息をついた。「リミッターは解けないのですか」
「いや、それは部隊長権限で却下やな」
三人が振り向くとそこには騎士甲冑に身を包んだはやての姿があった。
「はやてちゃん!なんで騎士甲冑?」
「なんかさっきからイヤーな予感がしててな、三人には早いとこヘリの護衛にまわってほしいのよ」

彼女の予感は女の勘のような曖昧なものではなく推測の上になりたつため、信頼できるのだが、三人は別のことで心配になった。
「はやて、一人で大丈夫？」
「へーき、へーき。ロングアーチのサポートもあるから。伊達に歩くロストロギアの異名は持ってないって」
彼女はその後あはは、と笑い、三人に軽い驚きと呆れ、そして信頼を与えた。

海の上での戦局が新たなる局面を迎えようとしてるとき、薄暗い地下水路でもまた状況が変わろうとしていた。
ティアナは確かにその少女を捕らえていた。しかし、思わぬ救援によりその有利を崩されてしまったのだ。
それはリインとほぼ同じ背丈の融合機と思われるもので、炎を放ってくる。
少女に融合機、そしてその召喚獣とのコンビネーションはなかなかのもので、ラインハルトにも付け入る隙がなかった。
そもそも実力や能力が確実に分かる相手ではないのだ。下手に攻撃も出来ない。
「どうします？」
ティアナがラインハルトに問いかけた。
「後退しつつ、奴等をここに引き留める」
今回の任務はレリックの回収だ。それは絶対に達成しなければならない。しかし、積極的に奪い返しに行くことも危険だ。
「じきにヴィータとシェーンコップ三佐も来る。それまで耐えればいい」
ラインハルトはそう言ってメンバーに安心感を与えた。
そして、今まさにヴィータと、リインが融合して飛行が可能となったシェーンコップが地下水路の深くへと突き進んでいた。
「ここだな」
ヴィータはその性格上、目上の人に敬語をあまり使わない。彼女

が相手を見下しているわけではないが度々誤解を招いておりいい加減治したいものだった。結局、完全には治らなかったが。

シェーンコップはヴィータに示されたところに戦斧型のデバイスを向けた。

すると、デバイスで射された部分を中心に赤褐色が円形に広がっていき、それは徐々に己の質量に耐えられなくなりその下の階層へ液体化して垂れていった。

これは酸化剤とにたような効力を持つ魔法でシェーンコップらしいものである。

二人はその穴を潜り、教え子兼部下の待つ場所へと降り立った。

ヴィータとシェーンコップの登場はルーテシアとアギトに並々ならぬ衝撃を与えた。一見してルーテシアは微塵も驚いているようには見えなかったが、後に『驚いた瞬間ベスト5』にランクインしていたと語っている。

ヴィータはルーテシアの召喚獣であるガリューを愛機のグラーフアイゼンで吹き飛ばし、数本の柱と壁を破壊した。

いくらここが廃棄都市だとしても始末書との格闘は免れないだろう。

そして薔薇の騎士（ローゼン・リッター）分隊隊長は融合したリインの能力でルーテシアとアギトを氷の壁の中に閉じ込めた。

この二人の一連の行動は僅か二十三秒で成し遂げられた。

「めちゃくちゃ強い・・・」

ティアナにはこの二人の前ではいかなる作戦も無意味に思えてきた。

勿論、これは買いかぶりな訳だが、それほどにヴィータとシェーンコップの動きは敵味方関係なく衝撃を与えるに足るものだったのだ。

だが、全てが終わったかに見えたあと、ヴィータが舌打ちをした。

「逃げられたか」

先程ヴィータが叩きつけた壁には大きな穴が空いており、召喚獣がそこから脱出したことを無言で示していた。召喚獣が脱出したということは主人を助けているはずである。

このようなリインの推測は不本意ながら的中し、氷の壁を壊すとそこにはやはり同じような穴があてがわれていた。

しかし、彼らはレリックの回収を断念したように見られ、ラインハルトとしては十分とまではいかなくとも八割がたは目的を達成できたと考えていた。

と、その時、地下水路の天井が激しく軋み始めた。

「なんだ？」

「大きな召喚をしているようです」

キャロの解説にエリオが質問する。

「このままだとどうなる？」

「間違いなく潰されて仲良くあの世行きだね」

「こりゃヤバイですよ」

小さな騎士の妙な冷静さに多少ムカつきながらもティアナもラインハルトに判断を委ねた。

「脱出するしか道はない。俺とヴィータ、シェーンコップ三佐は後から上がる。お前たちは先に上がれ」

ラインハルトが指示を出し、スバルがウイングロードで螺旋状の脱出路を確保する。

それと同時にラインハルトはキャロにも指示を出していた。

アギトは様々な心配事により頭を痛めていた。

彼女の視線の先にはルーテシアと彼女の巨大な召喚獣のジライオーがある。

ジライオーは地下水路の直上に鎮座しており、その圧倒的な質量は地下空間をそこにいる人間ごと消滅させようとしていた。

「なぁ、いくら管理局員だからって、このままじゃ死んじまうぜ！？」

アギトはルーテシアに殺しはしてほしくない。それは彼女らの保護者的存在のゼストにも共通したものである。
「あれほどの魔導師ならこれくらいじゃ死なない」
何を根拠にして言っているのかはわからないが、アギトとしてはやはりやめてほしい。
「レリックはどうすんのさ」
「クアットロに探してもらってセインにとってきてもらう」
それを聞いたとき、アギトは露骨に嫌な顔をした。
「あんな変態学者やナンバーズ連中とつるむなよ！ゼストの旦那も・・・」
アギトの声がそこで止まったのはジライオーがついに地下空間を地下空間たらしめるアスファルトの天井を踏み破ってしまったからだ。
「あ～あ・・・」
アギトにはこうとしか言えない。もうすんでしまったことなのだ。
生きていても邪魔なやつだったが、中にはルーテシアと同じ年頃のやつもいたな、と考えると少し心がいたんだ。
が、その心の痛みは全く意味のないものだった。
ジライオーが咆哮をあげた。そこに目をやると大量の鎖がその巨体を完全に縛り付け拘束していた。
さらに、魔力反応のある方向を見ると二人の魔導師が魔力で形成された道を滑り此方へと迫ってきていた。
別の方向からもオレンジ髪の魔導師が足元に銃撃を打ち込んでくる。
これらを避けるため二人は軽く跳んだ。
しかし、これこそがラインハルトとティアナの組み立てた罠だったのだ。
アギトは完全に空いている方角へと移動したが、気がつくと周りを大量の氷のナイフが取り囲んでいた。
そしてルーテシアはというと、高速道路のガードレールに着地し

たところへ自分と同じ年頃の赤毛の魔導師が胸元へ槍先を突きつけていた。
二人はさらに周囲を見渡したが、今度は帝国艦船が完全に二人を包囲していた。
「公共物破壊、公務執行妨害その他諸々の現行犯で逮捕する」
そういったハンマー使いの魔導師に心のなかでお前に言われたくない、とアギトは罵ったが、全くもって意味をなさなかった。

煙草というものは人体に害を与える毒物というレッテルを貼られながらも、人類社会の発展に貢献してきたといっても過言ではない。
それはミッドチルダにおいても同じで煙草は人間の悪友として長い間付き合っていた。
この部屋にもその悪友の残した匂いがコーヒーの匂いと共存して漂っている。
「なんだこれは!?」
レジアス・ゲイス中将は中継映像について秘書であり、娘のオーリスに問いかけた。
画面の中では魔導師が広域魔法でガジェットの軍団を次々と破壊していく光景が展開されていた。
「古代遺失物捜査部機動六課、その戦闘行動の中継です」
「このような魔導師が地上にいたのか?聞いておらんぞ」
「所属は本局ですから」
レジアスは盛大に舌打ちをした。優秀な魔導師は根こそぎ本局に抜き取られていく!そのせいで、あのような胡散臭い組織とも関係を持つようになってしまった。
「この部隊の責任者は?」
「八神はやて二等陸佐です」
レジアスにはその名前は聞き覚えがあった。
「あの八神はやてか!?犯罪者の!?」
オーリスが眉を潜める。

「問題発言です。公式の場ではお控えくださるよう」
レジアスはわかっている、と言い捨て、煙草に火をつけた。
紫煙を口から吐き出し、冷静さを取り戻したレジアスはさらに質問を重ねる。
「後見人は誰だ？」
オーリスが手元のパネルを弾くと画面に幾つかの顔写真が現れた。
「時空艦隊司令官クロノ・ハラオウン大将に聖王教会騎士団長カリム・グラシア、地上防衛艦隊司令長官アレクサンドル・ビュコック中将のお三方です」
レジアスは忌々しげに煙草の火を灰皿に押し付け火を消した。
「ビュコックの老いぼれめ。何を企む」
この時言わなかったがオーリスは機動６課とビュコックのもとに監察を派遣していた。しかし、ビュコックの所へ送り込まれた監察は彼の副官のチュン・ウー・チェン一佐により貶められ役にたたなくなっていた。
「機動六課に査察に入れ。お前が直接な。どんな些細なことでもいい！何かしら見つけ出してこい。こいつらを査問会に招待してくれる」
レジアスに下がるように言われたオーリスは敬礼すると完璧な動作で部屋を後にした。
廊下をきびきびと歩き、自分の部屋の戸を開ける。
入室して戸を閉めたとき、彼女の仕事人としての仮面は剥がれ、一人の人間としてのオーリスが現れた。
青色の上着を脱ぎ捨て、ワイシャツ姿になった彼女は機動六課の監察に連絡を取った。
『もしもし』
「ヤン・・・貴方ちゃんと仕事してるの？」
『給料分は確りと』
オーリスが溜め息をつく。
「父さんがいい加減めんどくさいことになりそうなのよ」

『そういわれても、機動六課（ここ）は何も問題ないけどね」
オーリスもそれはわかっている。だがしかし、見つけなくてはならないのだ・・・
その後二三言葉を交わして彼女は通信を切った。
そして、ストレスのせいでまた肌が荒れるなぁと女性らしい独り言を呟いた。

続く

日記
∀月◎▼日
僕は宣言する。これは別に盗聴したわけではない。うっかり聞こえただけだ。
ヤンさんとシェーンコップ隊長との会話。
「どうだい？ここの部隊長は。あらためて」
「それがなかなかどうして、やり手ですな、彼女は」
「シェーンコップが認めるなんて、珍しいね」
「一寸前までは、あんたの命令以外聞く気になれなかったんですがね、あの娘の命令なら聞いてやってもいいかなと思いますな」

本当何者？あの人たち

六課の戦い（後書き）

チュン・ウー・チェンも出してみました。

ナンバーズ（前書き）

友人に「ちゃんと書け」と怒られました。反省。

ナンバーズ

この時の機動六課、特に部隊長である八神はやてに対する評価は様々である。

「聖王の器たる少女を救出しながらその護衛をおろそかにしたことは大いなる過失である。これは最悪の場合、彼女が生涯で手にいれる名誉や武勲がなくなっていたのかもしれないのだ」

「機動六課の面々はエスパーで構成されているわけではない。少女をそれほどに重大で危険な存在として認識できなかったのは致し方ないと言えよう。彼らの行動は常識的観点から見て的確だったのだ」

これらの論争について八神はやては生涯何も語ることはなかった。

機動六課隊員も―ラインハルト達を含めて―同様だった。

廃棄都市は旧都心部が再開発されぬまま放置された都市である。

局員の訓練場や非合法組織の隠れ家ともなるこの都市は建築物の高さがおおよそ均等になっており、少し高いビルの屋上に上がるだけで　人気のない寂しい風景を一望できた。

そして数ある廃ビルのひとつの屋上に人影が二つあった。

一つは海上で隊長達を攪乱した女性、クアットロ。もう一つは布で包んだ大型の狙撃砲を手にした女性だった。

「ディエチちゃーん、見える～？」

ディエチと呼ばれた女性は布を外しながら答える。

「風もないし、空気も澄んでる。良く見える・・・」

彼女の機械的な瞳は数千メートル先を飛行するヘリを確実に捉えていた。常人にはいくら腕のいいスナイパーでも数千メートルという距離を狙撃するのは不可能である。しかし、彼女はどんなに遠くのものでも何百倍という倍率を駆使して確実に撃ち抜くのだ。

「・・・本当に撃っちゃっていいのか？」

「あれが本物のマテリアルならこの程度じゃ死なないとウーノ姉様

が言ってらしたわ」
本来ディエチが聞きたかったのはそのようなことではなかったのだ。
そういうことじゃなくて、と言おうとしたがやめにした。
ディエチは立て膝をつき、狙撃砲にエネルギーを溜め始めた。
この時彼女の目はヘリを捉えていたが、そこから視線を十数度動かしていたら飛行する三つの影を捕捉していただろう。
「見えた！」
三人の目にはヘリの無事な姿が映っている。
「良かった、ヘリは無事――」
『市街地に、高エネルギー反応！？』
安堵の言葉を漏らしたフェイトを妨害するかのようにロングアーチの司令室から通信が入った。
『物理破壊型です！』
これが意味することはただひとつ。発射されればヘリの乗員は一瞬でこの世から消滅する・・・。

エネルギーを溜めるディエチを見守っていたクアットロのもとへ姉のウーノから通信が入った。
内容は至極簡単。かわいいルーテシアお嬢様が助けを求めているのだ。
クアットロとしては見殺しにしてしまいたかったが、ウーノからの命令は即ちドクターからの命令であるのだ。
彼女は渋々ながら妹の一人に連絡を取った。
「セイン、貴方の力でルーテシアお嬢様を助け出してほしいの」
『わかった。合図してね』
流石、ドクターの作り出す芸術品―自分もその一人だが―は優秀である。
私はドクターの用意してくれたキャンバスに絵を描いていくだけなのだ。

「ルーテシアお嬢様、聞こえますか～？」
これは取り調べという名の説教を受けているルーテシアのもとへ密かに、しかし確実に届いていた。
「今から私が言うことを確りと真似してくださいね」
ヴィータの体をとてつもない怒りと動揺の波動が駆け抜けたのは目の前の少女の口から発せられた言葉によるものからだった。
―また守れない。
それは悪夢の再現である。何故そのようなことをいったのかは分からない。しかし、そのせいで少女達に脱出の機会を与えてしまうこととなった。
「何！？」
どっしりとした構えのシェーンコップも驚いたほどである。目の前の少女が何者かに固いアスファルトの地面に引き込まれたのである。
「魔法には、このような力もあるのか？」
まだここに来て間もないラインハルトは率直な疑問をヴィータへ投げ掛けた。
「いや、聞いたことねぇよ・・・つーかレリックまで奪われてんじゃねぇか！？」
先程の地下に潜行できる何者かによってであろうか、キャロの手にあった筈のレリックケースが消失していたのだ。
「いや、大丈夫ですよ。ねぇ、ラインハルトさん」
ラインハルトはキョトンとするメンバーに一瞥して指を鳴らした。
すると、キャロの帽子は吹き飛び、中からレリックが姿を現した。
「奴等が盗っていったのはケースだけだ。本物はここに隠していた」
ＦＷ陣は少しの間呆然とした後、吹き出すように笑いだした。
その笑い声は爽やかな風となって都市を駆け抜けた。
地上ではうまくいったが、空はとても危険な状況下にあった。

砲撃の威力は推定Ｓ　ランクと聞かされ、ますます急がなくてはならなくなった。
なのは達は全力で空を駆け抜けていたが、ヘリは非情にも自分から近づいてくることはなく、なかなか距離を縮めれなかった。
三人の思いは届かない。
エネルギーのチャージが終わったときにはディエチには一片の罪悪感は無かった。ただ機械の引き金を引く機械としてそこに存在していたのだ。
機械はなにも考えない。彼女はターゲットサイトの中心にヘリが入ったとき、無意識に引き金を引いた。
それにより発射された魔力弾は圧倒的な破壊力の牙をか弱いヘリに向かって向けてきた。
なのはのに戦慄が走った。遅かったのだ・・・。
が、ヘリの同乗者は生意気な運命に修正を加えようとした。
オスカー・フォン・ロイエンタールはヘリのドアを勢い良く開けると大きく息を吸った。そして、迫り来る破壊神に向かって怒鳴った。
「ぶるぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
その指向性をもった音はディエチの放った魔力弾と真正面からぶつかり合い、互いに力を打ち消しあっていった。
「卿の使う魔法は実に原始的ですな」
「何を言うか。発声は人類の究極的な芸術の苗床だ。それを原始的と愚弄するとは、軍務尚書もたいしたことないな」
「なにかいったかね」
「気にするな、ただの悪口だ」
このような会話がヘリの中では交わされ、シャマルを呆れさせていたが、その事を微塵も知らないビルの上の二人はとてつもなく驚いていた。
「何てこった、すごいな・・・」
ディエチはロイエンタールに驚嘆し、興味をもった。

それに対し、クアットロは
「私の作品を台無しにしてくれちゃって・・・」
と、声のトーンこそいつも通りであったが、顔が盛大に歪んでいたものである。
しかし、まあいい。今度また作り直せばすむ話だ。
レリックも手に入れたことだし・・・。
そして、その後、彼女達は退却した。
退却後、意気揚々とケースを開けたクアットロは中身が機動六課に回収されていることに気付き、本格的に憎しみを露にするのであった。

「新造艦？」
作戦終了後の士官用の談話室でなのはとフェイトが同時にはやての言葉を鸚鵡返しした。
「せや。ほら、前にアースラが老朽化やなんやらで解体されたやろ？」
次元航行艦アースラはなのは達が慣れ親しんだ艦で、ＰＴ事件、第二次闇の書事件を解決するなど数々の武勲をたてた『奇跡の戦艦』である。
それが昨年退役して解体されたのだ。その光景は今でも彼女たちの脳裏に焼き付いている。
「その新造艦には解体したアースラの装甲材とか細かな計器が流用されてるんや」
これは経費の削減のためだけでなく局員の士気を高める効果もあるかなり有効な手段だった。どこの世界の住人も願掛けや占いめいたことを無意識に求めるものなのだ。
「設計図は無限書庫から見つかったんだよね」
「生産性もよくてコストパフォーマンスも良いらしくてな。戦艦型と巡航艦型の二種類あったらしくて六課が受領するのは戦艦型の方」
はやてがキーボードを操作すると立体ＣＧ　が投影された。

形状は従来の次元航行艦とは違い無駄の無い無骨な形状であった。
三人はそれに見覚えがある気がしたが、勝手に勘違いということにして記憶の海の底へ沈めた。
「この艦は底の世界ではかなり縁起が良いらしいで。アースラの材料も使ってるし、運だけは最強やな」
「はやてちゃん、この艦は何て名前なの？」
なのはの質問に「まだ言ってなかったっけ？」と返事をし、まだ言ってなかったことを確認した彼女はなのはとフェイトに顔を向けた。
「艦首にも書かれとるやろ？この艦は・・・」
確かに艦首には何やら英字で文字が書かれていた。それをはやてが読み上げる。
「この艦は『ユリシーズ』ちゅう名前なんや」
日記は無しです。二回に一回の割合にしましょうか。

ナンバーズ（後書き）

そろそろタイトル変えようかな～と考えてたりします。

平和の時

ここ三日ガジェット襲撃もなく、機動六課の隊舎には穏やかな空気が流れていた。

その隊舎の一室では一人の男が机に向かっていた。

ラインハルト・フォン・ローエングラムは元々は銀河の一部を支配していた皇帝陛下である。

それ故に、机に向かって仕事、ということは毎日のようにしていた。しかし、今彼がしているのは皇帝の仕事ではない。

ラインハルトが顎に手をやり何かを考えていると彼の半身とでも言うべき存在の男、ジークフリード・キルヒアイスが部屋に入ってきた。

「ラインハルトさま、仕事ですか？」

「いや、違う」

そういうとラインハルトはキルヒアイスに一冊の本を掲げて見せた。

表紙には「執務官試験筆記問題集」と書かれている。

「勉強だ」

ラインハルトは実年齢はほぼ三十歳にも関わらず若く美しい顔立ちを保っていた。そんな彼が一度勉強机と対峙すると学生の時と変わらないようにも見える。

「執務官を志望してらっしゃるのですか？」

キルヒアイスはラインハルトが黒い執務官服を着込んでいる姿を想像してみた。きっと似合うだろう。

「そうだな。今になって、やってみたいことが出てきたことが驚きだ」

「あっ、そうそう。ラインハルトさま、少し息抜きでもいかがですか？」

「ん？どこか行くのか？」

ラインハルトは結局休日は図書館でヤンと本を読み漁っただけだったからそのような話は魅力的だった。
「ええ、仕事の都合で聖王教会まで」

『今日のゲストは昨日開催された全世界トライアスロン大会で見事新記録を打ち立てたハイリッヒ・フォン・キュンメルさんです！』
カーナビのテレビ画面では体つきは細いが活力に満ちた青年がアナウンサーのインタビューに答えていた。
(奴がトライアスロン・・・)
「ラインハルトさま、どうされましたか?」
テレビを見ながらぼうっとしていたラインハルトは運転席のキルヒアイスに声をかけられはっとした。
「すまん、ぼうっとしていた」
「大丈夫ですか?ほら、到着しました。ここが聖王教会です」
聖王教会の本部は自然豊かな山のなかに堂々とそびえていた。
建築様式は中世ヨーロッパに近く、豪華ながらも素朴な美しさを持っていた。
ラインハルトは実のところ聖王教会というものが胡散臭いものにしか思えなかった。
宗教組織が政治に深く根をはっている状態はあまり歓迎されるべきことではない。
「キルヒアイスは、ここになんのようがあるのだ?」
「ここの病院に例の女の子が収容されていまして、その件について」
そのような話をしていると、手前の茂みが音をたてた。
「なんだ?」
聞いた話によればこの辺りはよく野生の兎や狸がやって来るらしい。そのどちらかだろうと思った。
だが、茂みから現れたのは一人の少女だった。
『例の女の子』である。
その姿は流石に風呂に入れられたと見え、清潔で腕のなかには兎

のぬいぐるみがあった。左右で色の違う瞳が印象的だった。
「病院から抜け出したのでしょうか？」
キルヒアイスの問いかけにラインハルトは「さぁ？」と答えた。
もしそうならば連れ戻さなければならないのだろうか。
すると、向こうから高町なのはとシスターのシャッハ・ヌエラが駆けてきた。シャッハはデバイスを起動させている。
少女はそのシャッハに圧倒され、思わず尻餅をついた。体が細かく震えている。
「シスター・シャッハ、デバイスをおしまいください。この子はなんの害も無いでしょう」
「キルヒアイス一尉！しかし・・・」
「大丈夫だよシャッハ。しまってくれる？」
なのはにも説得され、シャッハはデバイスをしまった。
「キルヒアイス、知り合いか？」
「はい。こちらは聖王教会のシスターのシャッハ・ヌエラ殿です」
いつものシスター姿に戻ったシャッハはラインハルトに頭を下げた。
「はじめまして。ラインハルトさんですよね？キルヒアイス一尉からお話は伺っております」
ラインハルトにとってシャッハに悪い印象はなかった。しかし、聖王教会という自分でもおろかだとわかる偏見のフィルターがかかってしまう。
「お名前、何て言うの？」
ラインハルトがふと先程の少女の方を向くとなのはが姿勢を低くして質問をしていた。
「・・・ヴィヴィオ・・・」
「ヴィヴィオ、うん。かわいい名前だ。なにか、探し物でもしてたかな？」
なのはの問いにヴィヴィオと名乗った少女は少し泣きながら答えた。

「ママ、いないの」
これを受けてラインハルトがシャッハに質問した。
「ママ、というのは？」
「検査の結果、あの子は人工生命体ということが確認されました。ママ、というのは恐らく本能的に求めている愛情を具現化したものでしょう」
そう聞かされると少々寂しくなる。
ラインハルトには母親の記憶はほとんどなく、親と言えば堕落した父くらいだった。その代わりラインハルトには優しく美しい姉がいた。
しかし、母親の胎内ではなく冷たいポッドのなかで人生の始まりを迎えた彼女には親の記憶どころか元々そんなもの存在しないのだ。
無いものを求めている少女は相変わらず潤んだ瞳をなのはに向けている。
「そうなんだ。それじゃ、一緒に探す？」
なのはは少女へと手を伸ばした。すると、先程とは一変して笑顔を顔に浮かべ、こくりと頷き差し出した手を握った。
このときなのはは単なる義務感からこの行動に及んだのであろう。しかし、この瞬間が二人にとって、そして間接的に見れば次元世界の運命の分岐点だったのだ。

「例の女の子のことやけど・・・」
部隊長室でははやてとフェイトがチェスをしていた。
「その女の子がどうかしたの？」
「やっぱ人工生命体だったらしいんよ」
そう言ったとき、フェイトが少しだけ顔をしかめた。これははやてがいったことに対してではなく、その女の子が人工生命体だということについてである。
「誰かのクローンなのかな」

「多分な。誰かはわからんけど」
自分の母、義母ではなく、本当の母は自分を道具としてしか見てくれなかった。その子も道具として生まれたのだろうか。それなら悲しすぎる。
話の重みで部屋の中の空気が圧迫されていた。
しかし、それはＦＷ陣からの通信で解消された。
『いっちゃやだぁ～！』
真っ先に飛び込んできたのが少女の叫び声だった。
なのはは再び聖王教会へ向かう準備をしていたのだが、それをヴィヴィオの小さな腕とよくとおる声によって妨害されているのだ。
『八神部隊長、フェイト執務官！助けてください！』
画面の中ではティアナがヴィヴィオに負けじと大きな声を張り上げていた。
「いやー、うちのエース・オブ・エースでも勝てない奴がおるんやなぁ」
「そうだねぇ・・・チェックメイト！一寸見てくるね」
「うえ!?」
はやての間抜けな反応を受け流してフェイトはヴィヴィオの元へ向かった。

「やだ～！いっちゃやだ～！」
ヴィヴィオの一人のど自慢は最大の盛り上がりを見せており、なのはと巻き添えを食らったＦＷメンバーを存分に戸惑わせていた。
そこへフェイトがやって来る。
なのはがフェイトへ助けてと目で訴えていることがわかった。
彼女は先程ヴィヴィオが放ったと思われる人形を手にした。
「これは貴方のお友達かな？」
「ほえ？」
ヴィヴィオが不思議そうな目をしてフェイトを見つめている。
「この人はね、フェイトさん。私のお友達だよ」

「ねぇ、ヴィヴィオは、なのはさんと一緒にいたいんだよね？」
ヴィヴィオはフェイトを―正確には兎のぬいぐるみを―見ながらこくりと頷いた。
なつかれてるな、と思いながら続ける。
「でも、なのはさん、困ってるよ？ほら、この子も」
フェイトはぬいぐるみを困った時のポーズにした。
「ハラオウン、慣れているな」
部屋の隅でラインハルトとキルヒアイス、逃げてきたシェーンコップが話をしていた。
「彼女にはまだ小さい甥と姪がいますからな。自然と身に付いたんでしょう」
「彼女を見ていると、アンネローゼさまを思い出しますね」
確かに、彼女と姉にはにたところがあるかもしれん、とラインハルトは思った。では、さしずめ自分とキルヒアイスはヴィヴィオだろうか？
そのうちにヴィヴィオは落ち着き、なのはのことを解放した。
「ヴィヴィオ、良い子だね～」
なのはが頭を撫でるとヴィヴィオは嬉しそうに笑った。

続く

日記
▼月‰日
ヤンさんは元々歴史家志望だったらしい。
「最初のボタンをつけ間違えてね」
これを受けてキャロの夢はなにか、と聞いてみた。
「そうだねぇ。取り合えず十一歳になること」
「もっと大きく持ちなよ。シェーンコップ隊長が言ってたじゃないか」

「じゃあ作家になる。そんでシェーンコップ隊長の嘘八百を本にまとめる」

てっきり画家志望かと思ってた。

平和の時（後書き）

タイトルを変えます。

理由

・物語が進むにつれラインハルトだけの話じゃなくなってきたから。

・ネタバレっぽいですけどストライカーズ編のあとの主人公がラインハルトでないから。

・気分。

ご迷惑おかけします。

謀略の足音（前書き）

山場への繋ぎみたいなものです。さて、うまく行くか？

謀略の足音

聖王教会の一室に合計五人の人間が集まっていた。
一人は聖王教会騎士団のカリム・グラシア。
一人は本局のクロノ・ハラオウン。
一人は教導官高町なのは。
一人は執務官フェイト・Ｔ　・ハラオウン。
一人は機動六課部隊長八神はやて。
そしてそこで行われていることはあまり平和的な会談ではなかった。
「レジアス中将は知ってるわね？」
知らないわけがない。地上本部のナンバー2で、質量兵器の一部使用許可を求めている。
はやても質量兵器の使用は「消極的に賛成」していた。それなら何故行政政府に強くに訴えないのか、と聞かれたことがある。それに対して彼女は、
「政治は文官の仕事だから」
と答えた。しつこい追求からの言い逃れという側面ももっていたが、どちらにせよ彼女は武官は政治にあまり関わるべきでない、と思っているのだ。
それを聞いたレジアス派の局員は影で彼女を「意気地無しの狸」と呼んでいる。
「そのレジアス中将がどうかしたのですか？」
フェイトが質問した。
カリムが少しだけ声を潜める。
「実は、レジアス中将がスカリエッティと裏で通じているという噂があるのよ」
なのはとフェイトは動揺の波に押し潰されそうになった。
これが事実ならば自分達の戦っている相手は間接的に自分達自身

ということになる。なんと滑稽なことであろうか！

「あくまで噂だ。信憑性には欠けるが、騎士カリムの予言のこともある」

クロノのいう予言、とはカリムのレアスキルであり、早くて一ヶ月、長くて数年先のことを予言できるものだ。

しかし、その内容は非常に抽象的でどうとでもとらえることができることも多々あり、実際のところ「よく当たる占い」程度である。

が、今回の予言は分かりやすいものであった。

要約すれば、地上本部が襲撃され、その影響で管理局ご崩壊するというもの。

「レジアス中将がスカリエッティを利用しているのか、スカリエッティがレジアス中将を利用しているのかは分からへん。もしかしたらもっと別のものに踊らされてるだけかもしれへん」

その日の会談は結局はやての推測で幕を閉じた。

得たものもある。実際に地上本部が襲撃されたり次元世界を揺るがすほどの事件に進展した場合、本局艦隊を派遣してくれるとクロノが約束してくれた。

口約束にしか過ぎないが、信頼はできるだろう。もっとも、地上本部の連中が許可を出せばの話だが。

教会内の食堂で昼食にしようと言い出したのはクロノだった。カリムと別れた四人は北棟にある食堂へと向かう。

その途中に中庭に面した屋外通路があり、中庭に咲き乱れる花の麗しい香りが充満していた。

そこで事件は起こる。

通路の突き当たりから一人の男が現れ、クロノの存在を確認するかのように頷いた後、おもむろに腰から所持しているだけで法に触れる物体―拳銃を取り出した。

その時、そこだけ一瞬時が停止したかのようであった。気が付くとクロノの肩を硬質な弾丸が撃ち抜いていた。

男が舌打ちしてもう一度コッキングしようとする。自動拳銃ではないようだ。
だが、なのはとフェイト、はやては男にそのような凶事を起こさせることを許容しなかった。
男は三人による桃色、黄色、白色のバインドを掛けられ、締め上げられた。
「なのは！クロノを！」
フェイトとはやてはクロノをなのはに任せ、男の方を向いた。
男のめは焦点が定まっておらず、何を見ているのかは二人には解らなかった。
「なんかの麻薬でも使ってるのかな・・・」
フェイトがそう言って男を完全に捕縛しようとした。その時。
男は絶叫をあげたかと思うと何重にもかけられたバインドを恐ろしい力で破った。そして廊下の隅にあった重さが数十キロにもなるであろう植木を持ち上げ、フェイトとはやてに投げつけたのだ。
「うわっ！？」
二人は間一髪、プロテクションを展開し、植木は菜園用の腐葉土を撒き散らしながら砕け散った。
そこへ、捕縛専用デバイスを所持した教会騎士が騒ぎを聞き駆け付け、発狂する男を更に強力なバインドで固めた。バインドに高圧電流が流れ暴れ馬と化していた男はひとまず沈黙した。
「なんやったんや、今のは・・・」
「なのは、お兄ちゃんは平気？」
「クッ・・・その呼び方は止めろ・・・」
クロノはそう言い残し、意識を手放した。
「命に別状は無いよ。それより、あの人、どうするの？」
なのはの視線の先には再び高圧電流を流されている男の姿がある。
「取り合えず、今は教会に任せよう。少しすれば本局に送検する」
この場合、執務官であるフェイトに従わなくてはならない。
三人は責任者のシスターに事情を説明して教会を後にした。

その後、フェイトはこの事件についてキルヒアイスに相談していた。この犯行は犯人の独善や凶行等ではなく、背後になにか巨大な闇があるのではないか、と。

キルヒアイスはそれに思い当たる節があった。犯行そのものにではなく、犯人の行動についてである。フェイトと別れた後、ラインハルトに意見を求めた。ラインハルトの瞳がなにかを悟ったように煌めく。

「その犯人の行動からして、たぶん、いや、ほとんど間違いないだろう」

ラインハルトが述べた意見はキルヒアイスと合致したが、些か信じられなかった。

二人はこのような症状を示した兵士や民間人をいくらか見てきた。それは社会を崩壊させるほどの力を秘め、その撲滅のために銀河帝国と自由惑星同盟の警察機関が戦争状態にあるにも関わらず極秘裏に協力したとまで言われている。

「これはサイオキシン麻薬服用者による犯行だ」

この次元世界の中心であるミッドチルダ、いや、次元世界そのものにすべての養分を奪い尽くす木の根がゆっくりと張り巡らされているのが二人にははっきりと見えた。

次元世界某所―

一人の老人が面目なさげに膝まずいていた。

老人は遠目から見れば時が静止したかと思わせるほど微動だにしなかったが、近づけば小さな呼吸音が聞いてとれた。

その直線上に老人より遥かに若いであろう三十歳前後の男が失望の眼差しを老人へと向けている。

「クロノ・ハラオウンはしにぞこなったか」

「左様でございます」

もともと期待していなかったし、ハラオウンの小僧が生きていようが大した障害にはならない。死ねばまたそれでよし、その程度だ

った。
「スカリエッティの輩が黙ってはおりますまい」
「フン、あやつはもう期限切れだ。腐った食べ物を置いておくと腐臭が広がる。腐臭が広がれば周りのものも腐らす」
それは遠回しにスカリエッティを見放すことを意味していた。
「だが、八神はやて・・・奴はこちらとしても始末しておきたい」
「八神の始末はこの者に任せようと思いますが・・・」
老人はパネルを操作した。男の目の前に画面が現れる。
「ほお、こいつか。結局、この男には暗殺者のようなものがお似合いだな。その程度の男でしかない」
画面が消滅する。
「実行は公開意見陳述会の日。どうせスカリエッティも行動を起こす。それに便乗させろ」
広大な部屋には老人の張りの無い返事が響き渡った。
男の目には狂気の怪しい光が耀いていた。

続く

謀略の足音（後書き）

おっと、いつも通り微妙な結果だぜ。

その日、機動六課　前編（前書き）

ついに、奴が動き出す。

その日、機動六課　前編

聖王教会病院の病棟には午後の柔らかな日差しが降り注いでいた。
窓の外に広がるのどかな風景を眺めながら一人の看護婦が検温のため病室を訪れた。
「フォークさーん、検温の時間ですよー」
看護婦がそう言いながら個室に入ると、そこには誰もいないベッドと割れた窓ガラスがあった。
看護婦は慌てて上司にその事を伝えた。
精神病患者には強迫観念にかられ病院から脱走するケースがある。
恐らくそれだろう、と言われた。
フォークはそれほど重度の病気ではない。ヒステリーの一種だ。
そんな遠くへいってはいないはず。
その事から大規模な捜索は行われなかったが、もしその患者が大きな厄災を内包していると分かっていたら捜索は更に大規模なものへなり得ただろうか・・・。

公開意見陳述会は管理局の重鎮や各世界の代表が地上本部へ集まり会議を行うことである。
情報公開の原則に従い、その模様はリアルタイムで世界中に放送される。
今回は質量兵器が最大の論点となる。その為、反管理局や逆に魔法至上主義者によるテロの発生する確率が上がり、例年より警備が強化された。
「私たちは、内部警備に当たります。デバイスの持ち込みは禁止ですから、預かっておいてもらえませんか？」
なのはとフェイトは地上本部の玄関前でラインハルトとキルヒアイスに己の相棒を託した。
「わかった、引き受けよう。それより高町一尉、ヴィヴィオはどう

だ？」

ラインハルトがこのようなことを聞いたのは近頃ヴィヴィオがなのはにすごくなついているからである。

「ここへ来る前も行っちゃやだ！と言われました」

そういうとなのはは照れくさそうに笑う。

「でも、いい子にしていたらキャラメルミルクをつくってあげると言ったら離れてくれましたよ」

ラインハルトとキルヒアイスは同時にアンネローゼが淹れてくれたホットチョコレートを思い出した。あの甘い芳香は今でも脳裏に焼き付いている。

「子供はそういうのが好きだからな。帰ったら何時もよりキャラメルを多く入れてやればいい」

なのはは「そうですね」と嬉しそうに相槌をうった。

「キルヒアイスさん、他のＦＷの子達はどうですか？」

なのはとラインハルトの会話を聞いていたフェイトは思い出したようにキルヒアイスに問いかけた。

「皆、程よい緊張感を保っていますよ。あ、でも、薔薇の騎士（ローゼン・リッター）の二人は少し不安げでしたね」

今回の任務ではシェーンコップは隊舎の警備主任として留守番となっているため現場に居ないのだ。

『歩く風俗壊乱』などと上の連中に言われていてもエリオとキャロにとってはよき教師であり、よき上司であるのだ。

なのはが何気なく腕時計を見るともう開会三十分前だった。

「いけない！もうこんな時間なの！？」

「では、キルヒアイスさん、ラインハルトさん、よろしくお願いします」

「あぁ」

「お二人とも、お気をつけて」

二人の少女は表情を引き締めて建物の中にきえていった。

地上本部管制室
「クラナガン近海海上、廃棄都市区画に魔力反応。例のガジェットと考えられます」
管制官の報告に司令官は「そうか」と答え、椅子に深く腰かけ、不敵な笑みを浮かべた。
地上本部は絶対の防御を誇る。これを破ることは絶対に出来ない。

地上本部内部
「それにしても、予言によれば今日が地上本部の崩壊の筈なんだけど、どうやってここを破るつもりなのかしら」
カリムとはやては待合室でカップコーヒーを飲んでいた。
カリムの言う通り、地上本部の防御は絶対的である。しかしはやてはそれを否定した。
「例えば、卵。あれは外側からは破りにくい作りになっとる。せやけど、内側からは雛の少しの力で破ることができる」
「どうゆうこと？」
「拠点攻略はなにも外からだけの攻撃でなさなければならないというルールは無いんや。内側から破壊・・・いや、少しのヒビを入れるだけでも構わへん。それだけでここは簡単に陥ちる・・・」
彼女は知らないが、かつてヤンはイゼンローン要塞攻略のさいに要塞内の内側から作戦を仕掛けた。
敵が、この事を思い付かなければいいが・・・。そう思うことしかできなかった。だが、はやての切なる願いは運命の神に一蹴されてしまった。
「外側から無理なら、内側からよ」
クアットロの眼鏡が妖しく光る。

地上本部は表面を超硬度装甲とスーパーセラミックを交互に重ねた四重複合装甲と分厚い魔力粒子の層に覆われている。その為、質量攻撃は跳ね返され、魔法攻撃は吸収されてしまう。それ故に、今

まで表面には傷一つつけられていない。
しかし、それが今、過去形で語られるべき時が来たのだ。
「魔力粒子管制システム停止！？回復しません！」
「迎撃システム停止！内部電源停止！」
次々と叫ばれる絶望的報告に顔に笑みを浮かべていた司令官は先程とは売ってかわって青ざめていた。
「予備電源に切り替えろ！プログラムの復旧はまだか！」
管制官たちは設備の復旧に取りかかろうとした。そのとき、中の一人が殆ど悲鳴に近い声で報告をした。
「南南西に高魔力反応！！物理破壊型です！」

ディエチはスコープの中にてんに向かってそびえ立つ地上本部を収めていた。
今度こそ成功させる。
中に数多くの人間がいる、と考えると心が痛むため考えることを止めた。
今回の砲撃は前回の倍の威力に加え装甲を融解させる作用もある。
彼女は再び引き金を引いた。
狙撃砲が唸りをあげ、太い光線を吐き出した。それは衰えることなく大気を貫き、発射の二秒後には地上本部の黒い壁に突き刺さった。
一瞬の間をあけて爆発が起きる。
管制室ではけたましいアラームの音が鳴り響いていた。
「ＬＢ２９ブロック破損！死傷者多数、火災発生」
地上本部の内部は完全な防災設備が整っていた。しかし、ほぼ全て機械に頼っていたためなすすべがない。
「近くの局員は負傷者の救助にあたれ。消化活動が可能な者はそこへ向かえ！」
指示を出しながらも司令官の頭には自分の退職金のことしかなかった。

「やられた・・・」
右往左往する局員をみながらはやてはポツリと呟いた。
「どうする？」
カリムははやてと違って地上本部内部に不案内だった。
「デバイスも無いし、私はあまり力仕事に向かへんからなぁ」
うーん、と悩んでいると一人の男性局員が近づいてきた。
「八神はやて二等陸佐ですね」
はやては怪しがりながらも返事を返す。
「はい、そうですが」
「私、アンドリュー・フォーク二等陸尉であります」
フォークの身長ははやてよりも高い。その不吉さにはやては少し圧された。
「実は、お話ししたいことがありまして」
「はい、なんでしょ――――」
彼女の返事が遅途中で切れたのはなにも言葉を噛んだからではない。
フォークの右手は電光石火とは言いがたかったが、彼にしては上出来な速さでナイフを掴み、はやての下腹部に突き立てたのだ。
「！？」
周りの局員たちはなにが起きているのか一瞬わからなかったようだ。
そして、はやてが血を床に流し、体勢を崩したとき、局員の誰かが叫んだ。
「テロリストだ！」
血のついたナイフを呆然と見つめるフォークに飛び掛かる局員を横目にみながらカリムは倒れたはやての安否を確かめた。
「大丈夫？」
「あぁ、平気・・・やけど・・・」
はやてはこの時クロノが聖王教会で襲われたことを思い出してい

た。
これとあれは、なにか関連性があるのだろうか・・・。
その事を洞察しうるものは今の段階で一人もいなかった。

続く

日記

▼月∀日

ヴィヴィオが六課に来てからしばらくたつけど、だいぶんなれてきたみたいだ。
なのはさんが留守の時はロイエンタールさんとオーベルシュタインさん（同年齢の筈なのにさん付けしてしまう）と遊んでいるようだ。
二人とも最初はいやがっていたけどロイエンタールさんなんかは目が自分とにていることもあってか最近は結構相手をしてあげているようだ。

その日、機動六課　前編（後書き）

もしかしたら外伝みたいのを書くかもしれない。ここで書くのに詰まったときの避難用として。

その日、機動六課　中編（前書き）

今回、あの戦士が登場します。

その日、機動六課　中編

機動六課隊舎――

炎が隊舎を照らし、硝煙と血の臭いが立ち込めるそこはまさしく戦場だった。

元々ＦＷ陣以外に大した戦力を持たない機動六課であったが、それに対してスカリエッティの投入した戦力は大きなものであった。

「東側のバリケードが突破されそうです！」

今現在六課の指揮を執っているのはヤンだった。グリフィスはその補佐に回ってる。

ヤンはやはり椅子ではなく机の上に胡座をかいて指揮を執っており、その妙にどっしりした姿は回りの人に安心感に通ずるものを与えていたがヤンにはこの防衛戦に勝ち目が無いことは既に分かっていた。その為今の達成目標は被害をできるだけ少なくすることである。

「東側の部隊はそこを放棄。通路を封鎖した後、西の部隊と合流するんだ」

それは自分の首を絞めているようなものであった。自ら進んで包囲されようとしているのだ。しかしこれ以外に手がない。

今は時間を稼ぐことしかできないのだ。

現在は東側と南側が完全に封鎖されており、なんとか持ちこたえているのがシャマルとザフィーラの北とシェーンコップとロイエンタール、オーベルシュタインのいる西のバリケードだけである。

シェーンコップとロイエンタール率いる西の防衛部隊は二人でガジェットを相手取り無双していた。因みにロイエンタールは官給品の接近戦用デバイスである。

「む？向こうから何か近づいてきておるぞ？」

オーベルシュタインの報告が聞こえたのはシェーンコップが五十体目のガジェットを倒したときであった。

「かなり大きな魔力反応だ」
「全員バリケードの向こうに後退だ！何か来るようだぞ」
シェーンコップの指示に従い隊員―殆どが非戦闘員や警備係―がバリケードの陰に飛び込んだ。
通路の向こうは煙と炎でよく見えない。しかし、よく目を凝らすと大きな影が陽炎を揺らめかせながらこちらに向かっているのが解る。
「！？何をしている！？」
ロイエンタールが急にそのようなことを言ったのは警備係の魔導師三人がその影に突撃していったからである。
それは果敢なわけではなく無謀なだけであった。
三人とも格闘戦が得意分野らしく、大きな影に各々の武器を降り下ろした。しかし、次の瞬間には三人とも上半身と下半身を生き別れにされた。
通路の壁に鮮血が跳ねる。
「フン！なんだ、貴様らは勇敢な戦士ではなく只のバカだ！」
影は低く地の底から聞こえるような声で笑い、絶命した女性局員の頭を潰した。
「この声は・・・」
そしてロイエンタールにはこの声に聞き覚えがあった。
ロイエンタールだけではない。オーベルシュタインにも、シェーンコップにもわかった。
笑いは大きくなり、煙の中から大柄の男が現れた。
その男はロイエンタールたちの知る帝国軍の装甲服らしきものを身に纏い、頬には紫の傷跡があった。
「・・・オフレッサー！」
その男、ミンチメーカーの異名を持つオフレッサーは大きな戦斧に付いたら血をはらい、ニタリと笑みを浮かべた。
「おお！金銀妖瞳（ヘテロクロミア）のロイエンタール！」
オフレッサーにとってロイエンタールは憎き存在だった。今すぐに

でも奴に飛び掛かり、かつての雪辱を晴らしたいものだ。
だが、もう一人の方はどこかで見たことがあったが、記憶の画廊の奥にあるため思い出せなかった。
「貴様は誰だ？ええ？」
普通ならば怯え失禁しかねないオフレッサーの凄みであるが、シェーンコップにはそれは通用しなかった。
「元、薔薇の騎士連隊第十三代連隊長、ワルター・フォン・シェーンコップだ」
シェーンコップの周りの局員は揃って「？」という表情を浮かべていたが、オフレッサーは豪快な笑いを響かせた。
「そうか、貴様が薔薇の騎士のシェーンコップか！」
オフレッサーの行動一つ一つが今や防衛隊の恐怖の象徴となっていたが、ロイエンタールとシェーンコップは全く臆する気配がない。
「シェーンコップ、卿は誇らしく思わないか？」
「全くだ。まさか旧石器時代の勇者にまで我が名が知れ渡っているとは。光栄の極み」
二人の会話に込められた侮蔑の念を敏感に感じ取ったオフレッサーは元々炎に照らされ赤くなっている顔を更に赤くした。
「貴様ら、明日の日を見れると思うなよ」
オフレッサーの目が、金色に怪しく煌めいた。

スバルは先行したギンガを追っていた。
二人はラインハルトとキルヒアイスの指示をよく聞かず、無謀にも多くのガジェットと未確認の魔導師が存在する地上本部内部へと突貫したのだ。そしてスバルは途中でギンガとはぐれた。
はっきりいってスバルはギンガが撃墜されることはあり得ないと思っている。
先日も模擬戦でギンガはその手練れた技をスバルに魅せていた。
スバルにとって姉はなのはに匹敵するほど絶対なのだ。
しかし、その想いは通路を曲がったところで直ぐに裏切られる。

そこには三人の魔導師に連れ去られようとしている血塗れの姉の姿があった。
その瞬間、スバルの理性は弾け、絶叫と共に膨大な魔力を発した。

チンクはウェンディ、ノーヴェと共に『タイプゼロ』の回収作業を行っていた。
ここに来るまでにチンクは五人の局員をこの世から追放していた。
戦うためだけに生まれてきた自分が人を殺めることに何の抵抗を感じているのか。
チンクは自分が少し壊れている、と思い首を横にふった。
「まだ終わらないのか？」
「傷が激しいからっすねぇ。もうちょいかかりそう」
ウェンディはこのように口調が軽く、時々注意するが、チンクにも彼女のそれがいかに皆の心をリラックスさせるか知っているためあまり気にしていてはいない。
「・・・？なんか来るぞ？」
回収に勤しんでいたノーヴェが近づいてくる魔力反応に気がついたのはその数分後のことだった。
回収も大方終わり、後は引き上げるだけ、というタイミングだ。
現れたのはもう一体の『タイプゼロ』だった。
チンクは念話で二人に指示を出す。
「捕獲しろ」
それはたいして難しい注文ではない。だが、相手のリアクションが違った。
もう一体のタイプゼロは全身で怒りを露にし、こちらへ駆けてきたのだ。
それには冷静沈着なチンクも少なからず驚いた。
三人は各々の技で捕獲対象に攻撃を打ち込んでいたがあまりにも強力な魔力のためか全て弾かれてしまう。
刹那、タイプゼロの拳が数コンマ秒前チンクのいた場所を貫いた。

これに当たっていれば間違いなく四肢がちぎれ飛んでいたことを想像すると全身を悪寒が駆け抜けた。
「一旦退く！」
チンクの指示は短く、分かりやすいものであり、三人はギンガを収容したカプセルを持ち、セインのディープダイバーの力を借りて退却した。
チンクの耳には遠くから聞こえる悲痛な泣き声が響いていた。

一方、再び機動六課隊舎。
空中でオットー、ディードは北の防御を破り、そこからガジェットとルーテシアを侵入させていた。
「・・・何人、死んだかな」
オットーが問う。
「オフレッサーの前に現れたやつの人数分だ」
ディードの回答は「数えきれない」ということを意味していた。
「・・・騎士殿の到着のようだな」
オットーの視線を追うと騎士ゼストと融合機のアギトが飛行しているのが見えた。
「ねぇ、ディード。ゼストは管理局の魔導師と交戦した後だろ？」
「彼はルーテシアお嬢様を迎えにきただけだ」
「しかし、あっちからまた新手だ」
オットーの視線はゼストから離れ、遠くを飛ぶ飛竜の姿が見えた。

エリオとキャロの二人はフリードの背にのり機動六課隊舎へと向かっていた。
闇のなかに明々と燃えている炎が二人と一頭の不安を煽った。
「酷いなぁ」
エリオの言い種は他人事のようにも聞こえたが、彼の顔には静かな怒りが浮かんでいた。
「今は西側だけが持ちこたえてるようだけど、そっちに行く？」

キャロの質問にエリオは無言で頷いた。その時。
「？何かこっちに向かってるよ」
キャロにそう言われ、エリオが目を凝らすと一人の魔導師がこちらへ向かっているのが解る。
「騎士だ！」
「え？」
エリオはキャロに自分にブーストをかけてくれるよう頼んだ。
「ある程度なら飛べるようになるんだろ？」
「わかったよ。私は、先に隊長の所へ行っているから」
ブーストをかけられたエリオはうろ覚えの飛行魔法でその魔導師の元へと飛んだ。
「ム、子供か？」
ゼストは相手がルーテシアと同い年頃の少年だと知って驚いた。
しかし、少年の目にある炎はれっきとした騎士のものだった。
「俺はゼスト。ゼスト・グライガンツ」
ゼストの目はエリオにたいして無言で名乗るように指示していた。
エリオはストラーダを構える。
「僕は・・・俺はエリオモンディアルだ。短い間だが、覚えておいてもらおう！」

キャロが西側の防衛線に着いたとき、ヤンの派遣したミニ同盟艦隊とシェーンコップは五度めの突撃をオフレッサーにかけていた。
「あの人は誰ですか？」
ロイエンタールが答える。
「旧石器時代の英雄だ」
キャロはいまいち飲み込めないようにはーんと返事をした。
「しかし、いいのか。奴は今の段階で六人殺している。お前が七人目にならない保証は無いぞ」
ロイエンタールも建前上こう言わなくてはならない。
ところがキャロは「大丈夫ですよぅ」と妙な自信をもって答えた。

「だって、私十歳で死ぬほど悪いことしてませんから」

日記は今日はないぜ。

その日、機動六課　中編（後書き）

感想とか、意見とか（ゼストさんの名前が曖昧なので）お待ちしております。

その日、機動六課　後編

レジアス・ゲイスは怒りと焦りをブレンドした思考を脳内で滞留させていた。
「スカリエッティと連絡は取れんのか！？」
レジアスの怒りを関知している当直の中年士官は怯えながら返事をした。
「いえ、取れません・・・」
「聖王教会とは！？」
「いえ・・・」
「役立たずめ！！」
士官は小さな悲鳴をあげる。レジアスが下がるように命じると些か安堵したような態度を見せて退室した。
「オーリス、スカリエッティの勢力はどうだ」
「現在、退却を始めています」
レジアスには気がかりな事が多かった。
本局との軋轢、スカリエッティの謀叛、そして機動六課・・・。
「六課の監察とは連絡が取れんのか！？」
「現在防衛任務中につき連絡が取れません」
レジアスは苛立ちを募らせていたが、オーリスは気にせずに続けた。
「聖王教会の方には伝令を派遣しました。もうすぐ連絡が取れるでしょう」
レジアスは「そうか」と呟き、思考の海へと沈んでいった。
オーリスはこのまま父が溺死してしまうのではないか、と危機感を覚えた。

「ラインハルトさま、ガジェットが退却を始めたようです」
「そうか・・・キルヒアイス！高町とハラオウンを呼び戻せ！」

なのはとフェイトは退却を始めたガジェットを追撃しようとしていた。
キルヒアイスが止めに入る。
「今やらないと！どうするの！？」
ラインハルトの指示を伝達したキルヒアイスになのはは食い下がった。
キルヒアイス自身はラインハルトからこの指示の根拠を聞いてはいない。しかし、彼にそのようなこと必要ないのだ。
「目的を達成した敵を追撃しても被害を増やすだけです。今は負傷者の救助や隊舎の方へ救援に行くのが得策かと」
なのははそれでも納得できていない様子であったが、フェイトが彼女を説得してくれた。
「今はキルヒアイスさんの言う方が正しいよ」
キルヒアイスとしてはこれはラインハルトさまの意見で、といいたい気もしたが、黙っておくことにした。
これは彼が急に欲に目覚めたりしたからではなく、部隊内の関係を守るためであり、ラインハルトを守っていることにもなるのだ。
結局、なのはとフェイトが隊舎へ向かうこととなった。
夜は明け始め、空は紫色の透明水彩を塗ったかのようになっている、そんな時間であった。

夜が明ける数時間前、正確には三時間四十分前、西側の防衛隊は七度目の突撃をオフレッサーにかけていた。
三十人いたはずの突撃隊員は今は十二人に減っている。
それでも、まだ被害は少ない方なのだ。
オフレッサーが全力を出したらここにいる全員が数十秒以内に天に召されているはずだ。
オフレッサーがそうしないのは魔法の力、戦闘機人としての力を完全に我が物にしていないからである。
新しく手に入れた力に順応できていないくせにその力に固執する

からこのようなことになるのだが、この状況は防衛隊にとって非常にありがたいものであった。
シェーンコップ率いる突撃隊員達は新たに一つの死体をオフレッサーの手によって生産させてしまい、バリケードの後ろへと後退した。
銃撃隊による足止めを見ながらロイエンタールはシェーンコップに言った。
「一応、準備はしておいた。いつでもいいぞ」
「そうか」
「キャロのアイディアも入れておいた。全く、卿の教え子は悪知恵ばかりついている」
嬉しそうに頷くとシェーンコップは再び十一人の仲間と共にオフレッサーへと駆け出した。
オフレッサーは唸り声をあげる。その時・・・。
「今だ、軍務尚書」
ロイエンタールの合図と共に後ろにいたオーベルシュタインの冷たい瞳がチカチカと光始めた。
「ムゥ!?なんだ!?」
オフレッサーがそう叫んだのは急に視界が闇に包まれたからである。
これは前にオーベルシュタインがなのはにした魔法と同じもので、人の視界を一時的に奪うというものである。
「よし、全員逃げろ!」
オフレッサーの目が見えなくなった瞬間にシェーンコップ一行もバリケードの裏にいた人々も遁走を始めた。
が、逃げる人々の顔は笑っていた。
そのようなことを知らないオフレッサーは活火山の如くの怒りを露にし、憎きロイエンタールの逃げた方向へ歩き出した。
オフレッサーの怪力にかかれば丈夫なバリケードなぞ発泡スチロールの城壁のようなものだった。

バリケードを戦斧で吹き飛ばすと、そこには違和感のある空間が現れた。
数歩先の床に妙な歪みがあるのだ。
数秒考えたあと、その真意を理解し、彼はニヤリと笑った。
「奴等め、俺が二度も同じ手に乗ると思っているのか」
オフレッサーは華麗とは言えない軽い跳びで床の歪みを飛び越えた。しかし。
「ぬおおおおおおお!?」
オフレッサーの叫びは床から二メートル程もあった位置から三十センチ程の高さへ急速移動をした。実は床の歪みはダミーで本命の落とし穴はその後ろ、つまりオフレッサーの跳躍の着地点にあったのだ。
「アルケミック・チェーン!」
胸より下を床に埋めたオフレッサーはそこから脱出を図ったが、キャロの束縛魔法により完全に動きを封じ込められた。
アルケミック・チェーンは魔法といえど単に鋼鉄の鎖を魔力で自在に操っているだけである。
通常のバインドと違い純粋に物質としての拘束はさすがのミンチメーカーでも破れなかった。
「ロイエンタール!!この金髪の小僧の腰巾着!」
オフレッサーはいつかのようにロイエンタールを罵った。
「この落とし穴を考えたのは俺ではない。貴様より何十歳も年下で貴様より進化した少女だ」
ロイエンタールの示した所にキャロがおり、オフレッサーは大人げなくも彼女を怒鳴った。
「卑怯者!!」
「誉められたと思っておきましょう」
その数秒のやり取りでオフレッサーよりもキャロの方が一枚上手だということを曝してしまい、オフレッサーは脱力した。

その頃、エリオとゼストは隊舎の外で激闘を繰り広げていた。
エリオのブーストはすでに効力を失っており、地上を走り回ることとなった。
しかし、ゼストは騎士道精神に乗っ取ってか、エリオに合わせ地上戦を挑んできた。
熟練の妙技を極めたゼストは隙がなく、シェーンコップの指導を受けてきたエリオも押されている。
「降伏するか、続けるか？」
ゼストは吹き飛ばされ倒れたエリオにデバイスの切っ先を突き付け問うた。
「降伏って何？美味しいの？」
「そのようなことを言えるのならばまだ大丈夫だな」
そう言うとゼストは一気に距離を詰め、デバイスを降り下ろす。
が、エリオは横に転がって避け、体勢を持ち直した。
「ストラーダ、このままだとどう？」
『間違いなく討ち取られます』
「素敵な未来予想図だね」
エリオはストラーダをしっかりと構え、ゼストを見据えた。
ゼストとしてはこのような子供を相手取るのは趣味ではなかった。
しかし、彼にはわかる。このエリオという少年は間違いなく騎士の目をしていた。瞳には髪と同じように炎が燃え盛っていた。
「惜しいな・・・」
ゼストはそう思い、エリオと同じように己のデバイスを構えた。
そして、今まさに切りかからんとしたとき、ある念話が脳に響いた。

機動六課司令室では安堵の声が上がっていた。
「敵のガジェットが撤退を始めました！」
だが、ヤンだけが神妙な顔をしている。
「どうか、されましたか？」

グリフィスに質問されたヤンは「いやぁ」と答えた。
「敵の目的がわからなくてね。たかだか一部隊の拠点にこれ程の戦力を投入するなんて常識的に考えられないよ」
そのヤンの疑問の答えとなろう報告は数分後に伝えられた。
「ヤン三尉！アイナさんからの報告です！」
画面にはヴィヴィオの保母をやっていたアイナが頭から血を流しながら映っている。
『司令室！？こちらアイナです！ＦＷの皆に伝えてください！ヴィヴィオちゃんが！ヴィヴィオちゃんがさらわれました！』
戦慄が走った。そして異常な戦力の理由を悟ったヤンは静かに顔をしかめた。

本局　次元航行艦ドック
ボーンヘッド・ウェスカーは新造艦の整備班長である。
ハゲかけた頭から『禿鷹』と呼ばれるが、これは揶揄の念からではなく、むしろ尊敬や部下からの愛称のようなものとなっていた。
「禿鷹班長！」
古参の整備士がウェスカーに声をかけた。
「バカ野郎！口より手を動かせ！」
「違いますよ、地上本部が襲撃を受けたそうです！」
ウェスカーは一時の間の後に整備士のもつ電子端末を奪い取った。
文章を流し読みしたウェスカーは少し笑い、自分が手塩にかけて造船、整備をした艦に小さな声で語りかけた。
「お前さんよ、もうすぐご主人がお前に会いに来るぞ」
ウェスカーは固い装甲版を軽くこずいた。
その船体には「Ｕｌｙｓｓｅｓ」と刻印されていた。

この一連の襲撃事件はそのまま「地上本部襲撃事件」とよばれ、ＪＳ　事件の勃発を知らせる号砲となったのだ。
総死者数は約５３００人。負傷者の数は２万にも及んだ。

機動六課における死者数は３２人。負傷者は１２４人。そして行方不明１人・・・。
死者のほとんどはオフレッサーにより産み出されたものであった。
そのオフレッサーは仲間に助けられ逃亡、エリオと交戦したゼストもヴィヴィオを連れたルーテシアと共に撤収した。

続く

日記
∀月ц日
明日はついに公開意見陳述会だ。
その為には早く寝ないといけないのに眠れない。
そんなんだから飲み物で飲もうとロビーに行ったらＦＷの皆がいた。
「眠れないんですか？」
そう聞くとみんなは同時に頷いた。
そのあとは他愛もない話をして今に至る。
明日が無事に終わりますように！

気紛れで

次回予告（てってってーてってー）
スカリエッティ軍の攻撃により陥落した地上本部。それによりクラナガンはパニックに陥るがはやてにはまだ希望があった。
次回　時空世界英雄伝説第二十七話　『ユリシーズ』
時空の歴史が、また１ページ・・・

その日、機動六課　後編（後書き）

ヴォルテール出せませんでした。いずれだします。

ユリシーズ（前書き）

次回予告通りにならなかった。するもんじゃないね。

かつてヤン・ウェンリーは言った。

「民主主義とはなにか？複数の政党、複数の新聞、複数の宗教、複数の価値観」

これにはこの後オリビエ・ポプランの茶々によって、

「複数の恋愛、複数のベッド」

と続くのたがそれはさておき、民主主義の根源にはこれ等がなくてはならないのは確かなことである。

時空管理局という組織は巨大な国際組織であると同時に複数の管理世界を統治する史上最大規模の国家でもある。

この国においては民主共和制が原則とされているから、ヤンの言うものは全て満たしている。だが、これらを全て覆すような存在が時空管理局には存在するのだ。

最高評議会である。

かつては戦乱の世にあった次元世界を平定し、今の政治基盤を造り上げた優れた為政者達であった。しかし、いつからか彼らは己の地位にしがみつき、世界を陰から操る存在へとシフトしていった。

つまり、時空管理局の民主共和制なぞ表面上における虚構でしかなく、実態は全てにおける実権は最高評議会が握っているという完全な独裁体制なのだ。

最高評議会の構成員は三人。三人供身体という概念を完全に捨て去っており、巨大なカプセル内に脳髄がプカリと浮かんでいる状態だった。

「スカリエッティの謀叛は想定外でしたな」

三つの脳髄のうち一つが合成音で話す。

「しかし、それは大した障害とはならん。奴の謀叛なぞペットが発狂したようなものだ。直ぐに対処できる」

「それよりも問題はベルカ新教だ。きゃつらめ、何を考えておるの

か」

「聖王教会の過激派だ。所詮は宗教組織。いかに社会に深く根を張ろうともそれ以上には為れないのだ」

三人はこの時点でスカリエッティも、聖王教会の過激派のことも甘く見ていた。スカリエッティはともかく、聖王教会は自分達の思い通りに動くと考えていた。

そして、その事がいかにおろかなことであったか気付いたときには、もう遅かった。

八神はやてはフォークに刺されたわけだが、幸いにも傷は浅く、二日もすれば日常生活や日々の職務に関して支障が出ることはなくなった。

今回の襲撃事件により地上の組織体制は壊滅的被害を受けた。

彼女は襲撃時、傷を患いながらも指示を出していた、と証言するものもいるが、今となってはわからない。ただ言えることは彼女が航空魔導師隊の総指揮官となり、それにともなって階級もひとつ上がったということである。

因みに地上部隊はゲンヤ・ナカジマ二佐が、艦隊司令をアレクサンドル・ビュコック中将が努める。

「ワシがまたこんな職につくとはな」

ビュコックは副官のチュン・ウー・チェンにそう自嘲した。

もっとも、地上の艦艇基地も酷い状況にあり完全に復活するのはまだ先と思われるのだが。

とにもかくにも、三人はそれぞれの仕事に追われていたのだ。

「確か、今日は新造艦が到着する日やったなぁ。簡易発着場は完成してんの？」

はやての記憶によれば今日は新造艦『ユリシーズ』号が魔導師隊の旗艦としてここに到着するはずであった。

彼女はそれについて記憶力や事務能力については自分より遥かに

信頼できると確信している、副官のグリフィス・ロウランに質問したのだ。
「はい。間違いなく今日です」
「グリフィス君は、確か本局の方で実物を見たやろ？」
「今までとは違う印象の艦でしたね」
それもそのはず。ユリシーズ号の基本設計は管理局がしたわけではない。
無限書庫の深くから掘り出されたものなのだ。
その事を知っているのは彼女を含めて一握りしかいない。

機動六課簡易発着場――
重傷を負った人以外全員がそこにいた。
そして、揃って上を向いている。
「あれが新造艦・・・？」
従来の次元航行艦とは違う造りの艦は人々に驚きを与えながら簡易発着場へと降り立った。
「キルヒアイス、あれがなにか分かるか？」
「不思議ですね。見たところは、同盟軍の艦艇に見えますが・・・」
キルヒアイスはラインハルトと違い、ユリシーズ号をよく知らなかった、というより全く知らなかった。
それも当然である。ユリシーズが歴史の上にその存在感を示し始めたのはキルヒアイス死後数年後である。
ラインハルトは大まかにユリシーズについて説明をした。本来ならヤンがすべきこの仕事をラインハルトがしているのは、ヤンはユリシーズ艦内の視察へ向かわなければならないからだ。
「なるほど。わかりました。しかし、何故ここの人々がこの艦の存在を・・・」
「さしずめ、無限書庫か何処かに資料があったのだろう。」
ラインハルトがそういったときと同じ頃、聖王教会の一角で以前と変わらず老人が老人より遥かに若い男に頭をさげ、膝まずいてい

た。
「フォークはしくじったか」
「はい。喋ることは無いと思われますが、いかがなさいますか？」
老人の質問にはアンドリュー・フォークを生かしておくか否か、という意味が込められていた。
「放っておけ。どうせ一人ではなにも出来ん奴だ」
男はそう言って踵を返した。が、後ろから来る視線に気づき振り向いた。
老人はなにかを求めるような眼差しで男を凝視している。
「なにか言いたげだな」
そう言った時、男は老人の言わんとすることが理解できて同時に嫌悪感を覚えた。
「地球からベルカへ衣替えをしたのが不満か？」
老人は少しだけ恐れおののき、呼吸を整えた後に乾いた声で話始めた。
「失礼を承知で申し上げます、ド・ヴィリエ猊下・・・。我々の聖地は地球でございました。それにもかかわらずこう易々と信仰を変えてよろしいものでございましょうか」
この老人は潔癖なのだな、とド・ヴィリエと呼ばれた男は思った。
確かに、彼はこれまで拠り所を地球として野望のため暗躍してきた。
しかし、地球はあくまで拠り所にしか過ぎないと気づいてしまったのだ。
「今の我々の目的は地球教の布教ではない――いや、そもそも地球教の布教そのものが目的への段階にしか過ぎなかったのだ」
ド・ヴィリエの言葉を老人は一字一句も逃すまい、という姿勢で聞いていた。が、ド・ヴィリエにとっては少し気味の悪い印象もあった。
「その事はお前も重々わかっていたはずだ」
「は・・・言葉が過ぎました」

そう言うと老人は咳き込んだ。ド・ヴィリエは今度こそ老人に背を向ける。

「・・・とにかく、お前も休め。しばらく我々の出番も無い」

きっと老人はこの言葉に感動して少ない水分を酷使して涙を流していることだろう。かといって老人に好意を抱けるか、と言ったら違うが。

どちらにせよ、しばらく出番がないのは確かである。この事件が終わったら地上本部の戦力は著しく低下するだろう。

それが回復するまで、そう、大体四年くらい。

その間はのんびりと高みの見物ができるのだ。

続く

決戦前夜（前書き）

今回の話は次回との繋ぎみたいなものなので本当に大したものではありません。

決戦前夜

戦艦ユリシーズの到着から五日。首都クラナガンは不気味なほど平和な空気に包まれていた。

次に予想されるスカリエッティの襲撃に対する準備を考慮するとありがたくはあったが、破滅への坂を転がっていることは事実なのだ。静けさはその反動だろう。

「静か・・・」

高町なのはは破壊された元六課隊舎の屋上でそう呟いた。

彼女の目には明らかな哀しみが映っていた。娘のような存在だったヴィヴィオが拐われたのだ。それは彼女の心に重くのし掛かっていた。

それをしたから眺めるヴィータは難しい顔をした。

「不味いな」

今のなのはなら自殺しかねない。いや、彼女に限ってそれはないだろうとは思うが、このままなのはがこの状態なら全体の士気にも関わってくる。

スバルみたいにその辛さを力に変えることができないのが高町なのはであった。

エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエはまだ十歳の子供である。

戦闘中は無我夢中で気にも止めなかったが、戦闘が終わったとき、死屍累々とした隊舎で二人はかなりのショックを受けた。

保護者であるフェイトはそんな二人を確りケアしなければと思った。

が、二人は一頻りフェイトに苦しみを訴えた後部屋に籠り、翌日には何食わぬ顔で彼女の前に現れたのだ。

「私がそうできたのは私の心が丈夫だからで、エリオ君が平気だっ

たのは単に鈍いだけだから」
　キャロはそう語ったが、シェーンコップの指導の結果が顕著に出ている例だとフェイトは思った。
　フェイトはそのような指導をしたシェーンコップを少し憎んだりはしたが、二人がそれでいいならば、と割りきり自分に決着をつけた。
　このシェーンコップの指導のお陰もあり、薔薇の騎士（ローゼン・リッター）の名は後に一個師団級の力を持つようになる。

　旗艦　戦艦ユリシーズ――
　新しい椅子にようやく慣れてきたはやては無限書庫の司書長、ユーノ・スクライアと通信していた。
　この平和が偽りのものでなければ二人は知古の友人として雑談に花を咲かせていたであろうが、生憎、今はそのようなご時世ではない。
「聖王のゆりかご・・・？」
　はやてはユーノの言ったことをそのまま聞き返した。
『そう。ベルカの戦国時代に作られたという超弩級戦艦だよ』
　超弩級戦艦――そのような言葉をこのミッドチルダで聞くとは予想打にしていなかった。
「スカリエッティはそのゆりかごを復活させようとしとるんやな？」
『うん。ゆりかごがあったことは事実だし、あとはそれを見つけ出して鍵となる存在を手にいれるだけなんだ』
「鍵？」とはやてはまたもそのまま聞き返した。
『これは推測の域を出ない――いや、もうこれが真実だろう。そのゆりかご起動の鍵はヴィヴィオなんだ』
　はやては自分でも驚くほど冷静であった。それにしても、古代の戦艦を復活させようとは・・・。時代錯誤（アナクロニズム）もいいところである。
「その、ゆりかごってどれくらいの驚異になる？」
『未知数』

「わお」
おどけて見せたところで事態が好転するはずがない。溜め息をつく。
今回の戦闘で必要とされる戦力は大気圏内航行艦二十隻に航空魔導師六千人。
しかし、現実に揃えることが出来るのが戦闘艦がユリシーズを含めて十二隻、魔導師五千二百人。目算としていた数値そのものが『最低限』な訳だから、この戦力では話にならなかった。
もしも今現実逃避が叶うなら彼女は喜んでそうしたであろうが、幸か不幸か、彼女にそのような決定をする思考が存在しなかった。

ジェイル・スカリエッティは狂気の人であった。
世界には数々のテロリストが存在するが、彼と従来のテロリストとの相違点はその思想にあった。
テロリズムは様々な場合において発生する。
思想の違い、個人的な恨み、その他にも考えられる。
ところがスカリエッティはそのどれにも当てはまらなかった。彼が求むるものは完璧な破壊なのだ。
その先に何かある、等の改革主義ではない。
スカリエッティは座りなれた椅子からゆっくりとたちか上がった。
彼の目には人とは違う何かが煌めいていた。

決戦前夜（後書き）

次回、ゆりかごの決戦が始まります。

決戦　前編（前書き）

なんか最近魔法がじぇんじぇん出てない。今回も出ないしね。

決戦　前編

ゆりかご、という名は本来の名称ではないが、残されている資料ではそうとしか記載されておらず、結局はゆりかごと呼称せざるを得ない。

ゆりかご、という名とは裏腹に針ネズミのように武装しているそれは平和主義者であったオリヴィエの意思を完全に無視しているように見える。

しかし、今はオリヴィエがどのような考えで、もしくはどのような思いでこの負の遺産を産み出したか、といったことは問題でない。

ゆりかごが浮上を始めたのは今から三十分前。このままでいくと半日と少しでゆりかごは衛星軌道上へとあがり、その高威力の主砲で破壊と殺戮の絵を描き上げてしまうだろう。

管理局としては、これを見逃すわけにはいかなかった。

戦艦ユリシーズ――

そこではやてが今回の作戦概要を説明していた。

「ゆりかごは今、大気圏を抜けるための準備をしとる。それを含めてあれが衛星軌道上に上がるのが今から十四時間後。アルカンシェル搭載艦隊が到着するんが十四時間三十分後・・・」

「つまり、間に合わないという訳だな」

ラインハルトの指摘にはやては頷く。

「私たちの仕事は時間を稼ぐことや。んで、地上のことやけど・・・」

はやてはスバルの方を向いた。

「やっぱり、ギン姉が・・・」

「うん。地上からの連絡だと他数名の戦闘機人と行動しとるそうや」

それを聞いたラインハルトはスバルが絶望に征服されてしまうのではないか、と思ったが、予想は外れ、スバルの瞳には熱い焔が赤

々と燃え盛っていた。
「強いのだな・・・」
ラインハルトはそう呟いたが、それははやての声に掻き消された。
「それじゃ、全員の配置やけど、まず、薔薇（ローゼンリッター）の騎士分隊とナカジマ二陸士とランスター二陸士は地上部隊と合同で地上本部の防衛、および戦闘機人の確保をしてくれ。ハラオウン執務官は教会騎士団とスカリエッティの逮捕を」
「了解！」
指名された五人は起立して敬礼をする。
「で、ローエングラム三尉待遇はキルヒアイス一尉を副官として空戦隊の左翼を指揮して貰う」
「何！？」
ラインハルトに衝撃が走った。所詮三尉待遇の魔導師が大部隊の指揮官をやるなど前代未聞だ。それに一応のところキルヒアイスはラインハルトの上司なのだ。
「ローエングラム三尉はそこら辺の将官よりも戦略に優れとるし、キルヒアイス一尉も、その方がええやろ？」
こうしてラインハルトには一時的に三佐の階級か与えられた。ラインハルトとキルヒアイスのコンビが、またここに復活したのだ。

ユリシーズ艦橋――
そこではやてとヴィータが会話をしていた。
「なのは・・・高町一尉は？」
『大丈夫だよ。奪われたものは奪い返すまでだって言ってる』
はやては「そっか」と返事をする。
高町なのはの士気の低下は全軍の士気の低下に繋がるのだ。彼女はエース・オブ・エースと呼ばれる全ての魔導師の憧れで崇拝対象的な側面すら持っていた。。しかし、その存在がいかに心の支えとなるか彼女自身あまり理解していないのだ。
それはともあれ、彼女が元気になったことは戦略的にも、純粋に

友としても喜ばしい。
「敵、射程内まであと十分」
「全空戦魔導師、発艦」
戦艦ユリシーズの全面モニターに多くの魔導師達が飛翔する姿が映る。
その魔導師全ての視線は巨大船ゆりかごへと向けられている。
「八神司令、全魔導師、配置につきました」
「わかった」
艦橋内に緊張の糸が張り巡らされているようだった。そして、司令席のコンソールが敵が射程内に入ったことを小さな電子音で知らせた。
「撃て」
その号令は結して大きなものではなかったが、その声は全ての艦艇、魔導師に間違いなく、正確に伝達された。
号令から僅かに数コンマ秒後、遠距離攻撃魔導師と艦艇が放った色とりどりの魔力光線はひとつの巨大な糸に紡がれ、敵のガジェット・ドローンを百数機蒸発せしめた。
そして、この砲撃をベルとして、ここに首都防衛戦（バトル・オブ・クラナガン）が開演した。

ゆりかご―司令室
そこには空中戦を繰り広げるガジェットを一括して操る丸眼鏡の女、クアットロの姿があった。
「フッフフーン♪管理局もかなり焦ってるわね」
クアットロはコンソールをピアノの鍵盤のごとく操った。
「総司令は――あの八神はやてか。あのお嬢さんは守りの戦いをするのが得意らしいわね」
クアットロの人工頭脳はこの際の様々なパターンを分析して、敵のとるであろう戦術の対抗策を打ち出した。
「全てのガジェットは三段の層となって敵を迎え撃つ。これを破れるかしら？」

「三段構えできたなぁ」
数にものを言わせた戦術である。
はやては敵がこのような手で来ることは予想していた。ここで包囲形態を取られたら今度こそ勝ち目はなかった。
「敵さんが相手の戦術をしっかり調べるタイプで良かったわ。混成中隊攻撃開始！」
彼女の指示を出した混成中隊はランクがＡＡ～Ｓ　までの遠距離、中距離、近距離魔導師をとにかくグッチャグチャにした秩序性の無い部隊である。
彼らはとにかくランクの高さを誇示するような集団行動の取れない連中（実際、個人プレーの多い管理局ではそのような魔導師が多々いるのだ）であり、死を恐れないよく言えば勇敢な、悪く言えば無謀、無鉄砲な人であった。
はやてはその集団を敵のガジェットが密集する場所へ放り込んだのである。
普通なら捨て駒兵法と言うべきこの作戦だが、彼女はべつに混成中隊の魔導師に玉砕を求めているわけではない。
攻撃指示を出された中隊はなにも考えず、敵地のど真ん中へ踊り出した。

クアットロは司令室で高笑いをあげていた。
「あらあら、管理局も堕ちたわね～こんな捨て駒に頼るなんて」
が、この余裕は長くは続かなかった。
ガジェットの群れに飛び込んだ魔導師たちは多少は恐怖を感じていた。
ガジェットはそれに乗じて照準を合わせようとしたが、その魔導師の中の一人、指揮官だろうか。それが笑いながら言ったのだ。
「これはイイ！どっちを向いても敵ばかりだ！」
他の魔導師はキョトンとしていたが、指揮官は興奮して

「これなら狙いをつける必要もない。撃て！撃て！」
と叫んだ。
それが起爆剤となり、中隊の魔導師は全員が雄叫びをあげて突貫を開始し、そこは乱戦状態となった。
乱戦における個人プレー至上主義者は異常なまでの強さを発揮する。彼等のあけた防衛線の穴は大きなものではなかったが、付け入られるには大きすぎるものだった。
クアットロは苦虫を噛んだような顔をするしかできなかった。

つづく

決戦　前編（後書き）

次回はラインハルト達や地上の連中のお話です。
あ、日記書くの忘れてた

決戦　中編（前書き）

遅くなってスミマセン。そのうえ駄文です。

決戦　中編

左翼部隊・・・

「成程、敵は数にものを言わせてきているのか」

巡航艦エリコの艦橋でラインハルトは呟いた。その半歩下がったところにはキルヒアイスが立っている。

先程開けた穴もしばらくすると閉じられてしまい、混成中隊も後退を余儀なくされた。

オペレターの悲鳴が響く。

「敵が数個部隊に別れ我々を包囲しつつあります！」

モニターを見ると確かにこちらのおよそ三倍の兵力が六つに別れて包囲形態をとりつつあった。

オペレターの悲鳴はみるみる内に広がって、艦橋を凶行寸前まで追い込んだ。

しかし、

「何をうろたえるか！」

というラインハルトの渇によって全員が静まった。

「流石です、ラインハルトさま」

「何、このようなことには慣れた。それよりも、見てみろ、敵の動きを。いつぞやの同盟軍だな」

しかし、八神にこれを突破出来るか？

キルヒアイスはラインハルトの考えていることを察知したようで、通信手に旗艦との回線を繋ぐように指示した。

『ラインハルトさん、どうかした？』

「八神、今の状況をどう思う？」

『あんまり良いとは言えへんなぁ』

実際のところ、普通の脳みその持ち主ならあまりどころではない！と言うだろう。もっとも、これは士気の低下を防ぐためだとは思うが。

「どうすれば良いと思う？」
この時はやての答えたものはかつてラインハルトが実践したものと同じだった。
『せやけど、いかんせん、戦域が狭すぎる。直ぐに増援が来て挟まれるのがおちや』
「何も全ての部隊を潰さなくてはならない訳ではない。八神、与えられた命令はゆりかごの撃沈や部隊の殲滅ではないぞ」
ラインハルトがそう言うと、はやては少し考えた後、何かを閃いた。
『せやなぁ。おおきにな、ラインハルトさん』
そういい残し、彼女は画面から消えた。
「ラインハルトさまも、先生に向いておられるのではありませんか？」
「バカを言え。俺には向かない」
そう言いながらもラインハルトが少し満足げなのをキルヒアイスは見逃さなかった。

地上廃棄都。そこを三人の騎士が飛んでいた。
「シェーンコップ隊長、空飛べるじゃないですか」
フリードの背に乗るエリオが今まで空を飛べないと言っていたシェーンコップに言った。
「当たり前だ。能ある鷹は爪を隠す。それが薔薇の騎士（ローゼン・リッター）連隊の隊長たる所以だ」
「まだ分隊ですよ」
キャロの突っ込みに対しシェーンコップは
「じきに連隊になるさ」
としれっと言ってみせた。
三人は今、ガジェットを出現させている召喚師の制圧に向かっていた。その内二人はまだ１０歳の子供であるが、歴戦の兵士顔負けの技術を持っている。その師に関して言えば化け物だ。

そして、化け物は化け物の匂いに敏感である。
「ン、あれは・・・」
シェーンコップは目が良い。そのため、遠く美女もよく見える。
しかし、その時彼の目に写っていたものは絶世の美女ではなかった。
向こうの高速道路が一面血の薔薇の花畑になっていた。
その花畑の管理人は勿論、奴である。
「エリオ、キャロ。二人は、先に行ってろ」
「どうかされましたか？」
「ちよっと急用が出来た」
シェーンコップはそう言って高度を下げた。
「ヴァルハラとかいうところがあればそこで自由を謳歌できたのだがな」
結局、彼の仕事は猛獣狩りである。

シェーンコップから視線を数キロメートル移動させるとツインテールに髪を纏めた二丁拳銃の少女が廃ビルの一角で息を潜めていた。
ティアナは自分では陸士隊の隊員にスバルと共に行動していたつもりなのだが、敵の妨害や散発的な戦闘ではぐれてしまったらしい。
彼女は足を怪我していた。時折、鋭い痛みが感覚神経を駆け抜ける。
「敵は・・・少なくとも三人？」
結果的に、その推測は当たっていたが、今の彼女にははっきり言ってこの圧倒的不利な状況を打破する自信は無かった。
しかし、彼女はここで天に召されるとは考えていなかった。
それは全く矛盾した話であるのだが、機動六課という組織内においては異端とも言える場所の空気を吸ったらこうもなるのである。
とにもかくにも、このような思考回路は彼女の生きるための道しるべとなるのは確かなことである。

場所は戻って再び上空。

艦隊は魔導師達を守るような形で隊形をとっていた。
今からやることは余りにも無謀なことで、敵が賢くなければ成り立たないものである。
「艦隊、陣形を取りました」
はやては指揮官席で了解の意味を込めて頷き、ゆっくりと立ち上がったかと思ったら唐突に鋭い指示を飛ばした。
「全艦、突入隊を護衛しつつ敵軍に突撃！ありったけの武器弾薬魔力エネルギーを敵に叩き付けろ！」
指揮官の忠実な駒たる艦艇は指示と同時に前進を始め、敵に範囲は狭けれど圧倒的な砲撃を文字通り叩き付けた。
この動きに対し、クアットロはほくそ笑みながら完璧な駒のガジェットに命令した。
「おろかな仔犬ちゃん達を優しく抱いてあげなさーい」
が、このクアットロの判断ははやては勿論、ラインハルトのこともニヤリとさせるに足るものだった。
突貫してくる敵に対して前後左右上下からの挟み撃ちはかなり有効な戦術である。
クアットロはそう判断し、ゆりかごを守るガジェットの群れを艦隊を包囲する形で移動させたのだ。
しかし、まさにそのとき、分厚いベルリンの壁に亀裂が入った。
展開を始めて数分後。戦艦ユリシーズの艦橋に再び声が響いた。
「今や。フォーメーションC！」
グリフィスが復唱すると、円に近い形だった艦隊はみるみるうちに矢じりのような形となった。
そしてその矢じりは壁に突き刺さる。が、ただ突き刺さって終わりでは無かった。
「フォーメーションF」
突き刺さった矢じりは尖端からどんどん拡散して行き、ひびをどんどん広げていった。
余談であるが、この作戦はフィッシャー二等陸佐の神業的な艦隊、

部隊運用の賜物である。地上のヤンは知りもしないことであるが。
そのひびから突入隊の魔導師達はゆりかご方面へ飛び立って行った。
「スターズ1、高町なのは、行きます！」
「スターズ2、ヴィータ、出るぞ！」
その勢いは凄まじいもので、なのははいつもの優しさの欠片すら見せない完璧な魔王っぷりであった。
「こう見ていると、意図も簡単に落とされるガジェットが哀れに感じるな」
ラインハルトは苦笑混じりに言うのだった。

最高評議会は本質的な権限は持ち合わせていない。しかし、その存在は世界を二転三転させるに足るものだった。
「スカリエッティの小僧めが、反抗期にも程があろう」
脳髄を浮かべるカプセルの根本にあるスピーカーから合成音が流れ出した。
「まぁ、聖王協会の方も大丈夫だと言っている」
「何ら問題はない」
そこへ、一人の女性士官が入室してくる。この極秘の空間に入ることを許された数少ない人間の一人だ。
「御三方、ホットメンテナンスの時間です」
「おお、いつもすまんな」
士官は「これが私の仕事ですから」とコントロールパネルを操作し始めた。
・・・数分ほどたっただろうか。
評議会の一人が、違和感を感じた。
「妙な、水圧が少し上がっているような――」
その次の瞬間、琥珀色だったカプセルの中の液体は突然白っぽく濁った。
脳髄が炸裂したのである。

「オイ！何をしているのだ！早くそこか――」
もうひとつのカプセルも同様になる。
「・・・何故だ・・・貴様は一体何者だ！？」
最後にひとつだけ残ったスピーカーから機械的な金切り声が溢れ出る。
「私ですか？私はさしずめあなたの孫とでもいいましょうか」
「ま・・・ご・・・？」
孫、とはどういうことだ？
そう言おうとしたとき、彼もまた同僚と同じ運命をたどった。
女性は軽く嗤うと踵を返して部屋から出ていった。
次のメンテナンス予定日は一週間後。それまであの三体が発見されることはないだろう。

続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1819v/

時空世界英雄伝説

2011年12月25日13時50分発行